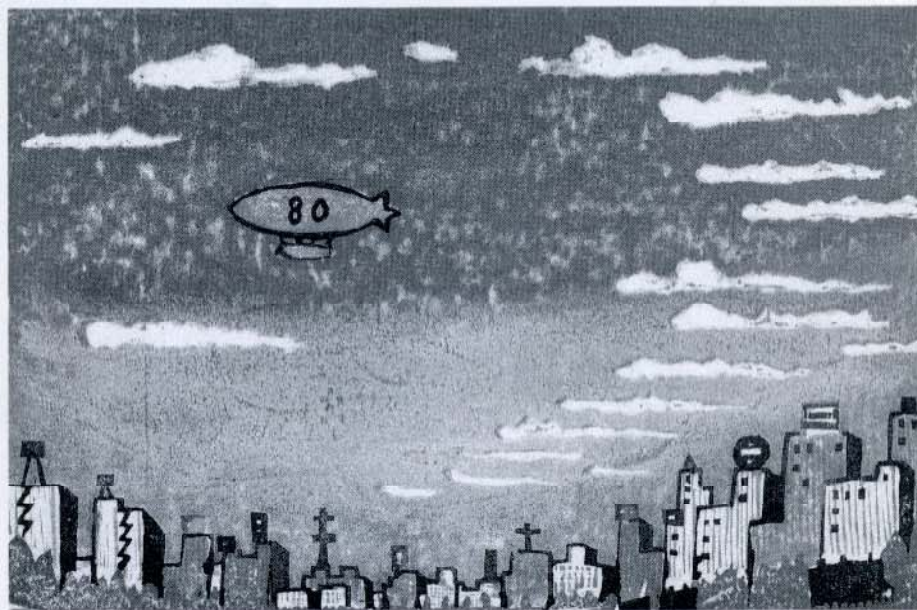


演劇会議



地域演劇とは — 神戸からの報告 —

市民がつくる朗読劇『50年目の戦場・神戸』のこと (梶 武史)

戯曲『祭りの夜の夢』北野 茨

90

1996年4月

¥700



どうやったら観客をふやせるか、どうしたらいきいきした劇団にできるか — 試行錯誤の京浜から発信する仲間たちへのメッセージ。

京浜協同劇団

城谷 護 著

わくわく制作、いきいき劇団

B5判、60頁、500円 (送料別)

アートマネージャーのいない劇団は観客を無視している劇団といってもいい。彼が京浜の経営制作に責任を持ち始めてからはすさまじいものがある。

制作の仕事を貧乏くじ扱いさせている例は多い。本書は全演運動に本質的な問題を提起しているといえよう。

全演議長 しばやしひろし

全演議長 仲 武司

申込先 〒211 川崎市幸区東古市場9-21 電話 044-544-3737 城谷

しなやかに、新鮮に 好評の第一集につづいて贈る 西日本からの戯曲の風

西日本劇作家の会編 戯曲選集 2

ドラマの森 1995

定価/¥2,200 (送料別)

< 収録作品 >

◇栗原省「河童詫証文」

ユーモラスで、そしてあまりにも悲しい河童と小作人男の恋。各地で上演された栗原民話の傑作。木の国民話シリーズ第3話。

◇和田澄子「わが町大阪・ひがし」

「戦争と女性」というテーマを一貫して追いつけるベテラン劇作家が描く大阪の町。庶民をいとおしく描き、劇団未来の舞台が好評を博した。

◇楠本幸男「幻想列車」

怒涛のような激動の時代に、仲間を裏切り、一人生きていくアンチヒーロー、機関士・重田欣蔵。今まさに衝突せんとする列車に人間の危機の影がせまる。

◇広島友好「カンボジアダンス」

戦禍のカンボジアを舞台に、ユニークな視点とみずみずしい感性で描く。いま精力的に書き続ける若手作家の才能あふれる作品。

◇内田昌夫・桜井敏「火の華・サイタ」

廃墟となった町に生きる人々の脳裏に、50年前の神戸大空襲がよぎる。震災の傷跡が生々しい作者と劇団が苦渋の中からやると叫ぶことのできた人間賛歌。

申し込み ☎ 0729(41)0554

☎ 0729(41)4401

東川まで

演劇会議

1996年4月7日発行 第90号

■ もくじ

●グラビア (舞台)	1
●地域演劇とは — 神戸からの報告 — 報告者/境野修次	7
(第6回東京地域劇団演劇祭/シンポジウムより)	
●市民がつくる朗読劇	15
『50年目の戦場・神戸』のこと 梶 武史	
●『うたよみざる』あれこれ 地域演劇からの報告 川村光夫	18
●小さくも大きかった演劇祭典 堤 次郎	21
<報告—銀河ホール国際演劇祭に参加して>	
●今日のリアリズム シリーズ②	25
今、考えていること — 広島とルネッサンス 猿渡公一	
●北から南から (劇団通信)	29
●劇評	43
「犬鳴の滝」(演劇サークルトラム) …はた・けいすけ/「だれが、石を投げたのか」(劇団コロ) …楠本幸男/「50年目の戦場・神戸」(市民参加の朗読劇) …阿部好一/「ワッパ一揆」(だいこん座) …石垣政裕/「蒼い空そしてブギウギ」(演劇集団石るつ) …佐藤逸平	
●<ロシア演劇レポート 5>	52
—モスクワの大劇場、小劇場では……—	
—付、日本とロシア演劇 V— 桜井郁子	
●中グラビア — 顔 —	58
(城谷護・野尻敏彦・藤本文彦・高平和子・奥村佳子)	
●カウナス国立劇場との交流 山田昭一・大峰順二	66
●人間賛歌が支える演劇人生 藤本栄治	69
●ヴォイストレーニングの実際 ② やまもとのりこ	74
●劇評 三連続公演を観て (青年劇場) …八橋 卓	77
●戯曲『祭りの夜の夢』 北野 茨	79
●事務局だより	111
○短信	41
○劇団住所録	113

表紙絵=大橋喜一氏 (ヒコウ船のいる街・版画)

公演

◇劇団だいこん座『ワッパ一揆』
原作・佐藤治助 脚色/演出・高橋寛

◇神戸職演連『レンタル・ファミリー』
作・砂本量 演出・松本昌浩

◇名古屋劇団協議会創立三〇周年記念合同公演『明治転回』
作・栗木英章 演出・木崎裕次
(若尾・柘植・岡部追悼公演)

舞台



公演

劇団やませ『我が内なるラビュータ』—前原寅吉
の夢— 作・梶谷伸夫 演出・加藤健太郎



演劇集団土くれ『きらめく星座』
作・井上ひさし 演出・福田悦雄



劇団支木『へのへのもへ』
作・藤田 演出・堅倉 健



舞台



劇団弘演『ブンナよ木からおりてこい』
原作・水上勉 脚色・小松幹生 演出・秋本博子



劇団かすがい『マンザナ・わが町』
作・井上ひさし 演出・榎崎英三



劇団コーロ『だれが石を投げたのか?』
原作・ミリアム・ブレスラー 訳・松沢あさか
脚色/演出・ふじたあさや

公演

舞台

公演

舞台

◇演劇集団石るつ『蒼い空そしてフギウギ』
作・境野修次／笠置リエ 演出・境野修次



◇東京芸術座『子供の時間』
作・リアン・ヘルマン
訳・小池美佐子 演出・印南真人



◇関西芸術座スタジオ公演『永遠の青空』
作・砂本量 演出・松本昇三



◇劇団未来『雪やこんこん——湯の花劇場物語』
作・井上ひさし 演出・寺下保



◇劇団静芸『花咲くチェリー』
作・ロバート・ポルト 訳・木村光一
演出・伊藤幸夫 装置・大石治孝



◇韓国・劇団馬山『春香伝』
アンニョンハンムニカ韓国文化祭(桑名市)
地元劇団から二人客演しました。



公演

舞台

地域演劇とは—神戸からの報告—

—第6回東京地域劇団演劇祭・シンポジウムより—

パネラー／平田 康・衛 紀生

報告者／境野修次



◇劇団はぐるま『信長天下を取る』作／演出・こばやしひろし

第六回東京地域劇団演劇祭（主催・東京地域劇団実行委員会、東京地域劇団連絡会、財団法人東京都歴史文化財団、東京都教育委員会）が東京芸術劇場小ホール1・IIで、'96年1月6日から1月21日に亘り行われた。

演劇祭最終日の21日に「地域演劇とは—神戸からの報告」と題してシンポジウムが行われた。パネラーは平田康氏（神戸労演会長、神戸をほんまの文化都市にする会代表）、衛紀生氏（演劇評論家）、司会・境野修次（演劇集団石るつ代表）。

☆ ☆ ☆

先ず、平田氏から神戸の被災から起ち上がる地域演劇を中心にした様々な文



◇青年劇場『死と乙女』作・アリエル・ドーファン
訳・青井陽治 演出・松波喬介

◇劇団きづがわ『また逢う日まで』
作・神津晃生 演出・赤松比洋子



化活動に携わる人達の報告をして戴いた。

被災から起ち上がる

平田 地域劇団が被災してどう起ち上がっていったかという事は、『演劇会議』87・88号に詳しく報告されており、また、最近出版された『阪神大震災は演劇を変えるか』に、ある側面では、詳しく出ている。様々な被害があったが、例えば、『劇団青い森』では、演技者の青年が劇団に出たので、彼のアパートを訪れたら、瓦礫の下におり、七時間かかって救出された。今、やっと杖をついてリハビリをやっているが、舞台復帰への可能性は判らない状況。道化座の稽古場は全焼、再建はしたが五千五百万円の借金が残った。劇団四紀会、劇団どろも大きな被害を受ける。神戸労演なども借りていたビルが倒壊し移転、東親子劇場は事務所が潰れ働きの一人が死亡。人的、直接的被害が様々な形であった。が、一番大きい被害は、街全体の問題であろう。市場や商店が苦勞の末、復興し店を再建した、あるいは医者が莫大な費用を出し医院を建てた。が、周囲に人が生活していない、店も医院も立ち行かない。こういう形で街全体が潰れた。この様な被害が地域演劇を含め神戸の文化に与えた影響が最も大きいといえるのではないか。

「神戸をほんまの文化都市にする会」も、個々の生活、各団体をどうするかということ、震災から一ヶ月近くは

活動できなかった。二月になって「会」は動き出すのだが、電車もない、集合場所は、何時なら集まれるのか、集まる所に飲み水はあるのか、という問題に直面する。――が集まって意見が交された。

全国から様々な援助や励ましがあつた。観賞団体は演劇連を通じて、劇団は演劇団体から、合唱団はそのルートで

資金カンパやボランティア公演などがあつた。

これに應えるには、地元がすっかりなくなってはならないと、'95年4月に「会」の主催でフェスティバルが開かれ、東京他からも応援があつた。これがキッカケとなり各劇団は次の活動を考えていった。劇団四紀会は八月に『火の華サイト』を上演し、混成合唱団も震災をテーマに歌を創る。

労演も劇団などの応援を得て、準備例会として続けながら10月には、三回の例会が開かれた。様々な形で立ち上がっていき、文化創造がはじまっていた。

果たして演劇とはこういう大きな危機の中で、どんな力をもてるのか、劇団として、観賞団体としていや応なく突きつけられていく。避難所等での公演にそっぽを向いていた子供が心を動かし、震災以来初めて母親の手を離れて舞台の人形に触れてみる。演劇の力が証明される例がある。一方では、人が死に、家が潰れ、とてもじゃないが芝居なんか見る気がしない、という状況下だ。我々はどんな芝居を見、どんな芝居をやっ



震災直後の長田地区

てきたのか、これからどんな芝居が必要なのか、が労演の中でも意見がかわされた。

やはり、先走るわけではないが、文化や芸術の復興は――神戸でやっていく基本――被災者の家が保障されるということが痛切に感じられる。「神戸をほんまの文化都市にする会」のキャッチフレーズの一つは「人があつて街が出来る。街があつて文化が育つ」。そのために、様々な人の、様々なレベルをひっくるめて、各個人々々の家を保障し、街を作り、その上に地域のネットワークを作らねばならない。

演劇とは人間の関係をつくる

衛さんは、神戸との関わりで心のケアの問題においての人間関係から演劇の役割について話された。

衛 「神戸をほんまの文化都市にする会」の一大アクトセンターづくりの政策提案を取り入れたプランを市が一月に発表した。その直後に震災が起きたのでショックだった。

神戸でなにか出来ないだろうかと思った。現地に行くにあたり「心のケア」の講義を受けた。頑張れノ とか、よくわかるなどと言わない、側においてよく話を聞く――毎月、神戸に出かけていって被災者の話を聞き、被災者のストレスを感じた。これは演劇で出来るんじゃないかと思つた。そして、まさしく街の問題である、被災ということ

を知って、演劇が問われたことは、街と演劇はどういう関係にあるのか。ということだ。

二月から三月までは激励公演やチャリティー公演、避難所での映画などがやられたが、三月になるとニーズがなくなったと感じられた。避難所から人が居なくなる、残った人は「寅さん」を見て笑っていられない、震災直後より心の問題として悪くなっていく。

四、五月になると括弧付きの復興がなされる。大阪に職場がある人は収入があるが、神戸（被災地の商店、中小零細企業及びその労働者）を基盤としている人達は生活が成り立たないなど、ある階層が生まれてくる。

PTSD（ポストトラマティックストレス Disorder）外的心的外傷後ストレス症候群。例えば、夜泣き、夜尿症、暴力的になる、学校へ行かなくなる、または、身近な人が死んだ場合など、なぜ自分だけが生きているのかと己を責める、という心理状態になり、心の交流ができなくなる。大人たちが、子供たちの声を聞くことや、不安に対応できなくなっていく。子供たちもPTSDになる。震災直後より、不安はじわじわと増大していく。家族の中で会話がなくなり、兄弟喧嘩がふえる。そういつた時、一つの芝居を見る中で、家庭に「一本の木」が立った。震災後、初めて心を開いた会話が生まれたという話があつた。

様々な経済的・社会的プレッシャー（将来への不安、二



劇団どらの南側
落下した5階部分の残ガイと押し
つぶされた民家

重ローンの支払い、子供の未来への不安)のある中で、心の状況は悪くなっている。生きること事態が非情の論理、弱肉強食というか、人間の生き様としてさらされてしまう。早く立ち直れる人とダメな奴はダメというように格差ができていく。

街というのは、人間の関係でつくられる。街があつて文化ができていくということもわかるが。人間の関係があつて文化ができる、文化があつて街ができる。このことが演劇をやつていて気がつかなかったことだ。神戸にいて、演劇で何ができるか、ではなく、しなくちゃならない、芝居が好きだ、というだけでは応えられない。しかし、専門は芝居だ、芝居でなにができるかということが喉元に突きつけられる。

神戸で進行している行政指導の軍艦のような街づくり、広い道路と大きな鉄筋コンクリートの建物に小さな窓、大きな公園、これでは人間の関係ができない、コミュニケーションが積みかさなっていけない。

コミュニティがあるところで人が救われ、守られる、大きな道路や大きな建物では人は救えないことを神戸震災が示している。

心のケアであり、人が心を開いていくことが、今、演劇に問われている。

境野 今、私たち(東京)が神戸の劇団に励まされ、元気づけられている。この力はなにか。また「神戸をほんまの文化都市にする会」の活動を平田さんに話して戴きます。

平田 「会」は横浜や京都などの他都市と比べて神戸をどうするか、違いをアップするためにはどうするかというケチな考えではなく、日本全体が文化的には遅れているわけで、ここまで活動すれば終わりという「会」ではなく、永久革命論ではないけれど、いつまでも活動していくつもりで「神戸をほんまの文化都市にする会」という名をつけた。

神戸の劇団は元気がいい!

衛さんから心の問題でますます暗くなっている、一方では本当にそう思う、格差が広がっていることも事実だ。しかし、もう一方では境野さんがおっしゃっているように、

チャリティだとか激励公演などというニーズは終わっているだろう。むしろ心と心を繋ぎ合わせる、いろいろな心と心が出会う場所を演劇はつくらなければいけないという気がする。いろいろな方法があるだろう。例えば「神戸をほんまの文化都市にする会」主催・『五十年目の戦場・神戸』公演を市民が参加して創っている。心のケアの問題として、あの体験は、あのストレスを感じたのは自分だけじゃない、ということと人と人との交流が生まれ、心が開かれてくる。

いい芝居を創るのが使命ではなく、いい出会いをつくることだ、何んでも話してもいいよ、という雰囲気をつくって、自分の中のものを吐き出して、お互いに納得するまで話し合っていく、そして自分が必要とされているとわかることだ。

震災が起きて、恐ろしい体験、心に受けた傷、それは、皆な同じで、特殊じゃない、自分だけが受けたのではない、人と人が出会い、話し合っていくことだ。

社会からのニーズに答える演劇とはなんなのだろう、演劇とは人間だ、人間本意主義の街づくりに演劇は大きな力を発揮できる。演劇というのは人間が人間を救うことだ、人間が人間を守るんだ、と高らかに宣言しているアートだ。そういう意味で、今、演劇は問われている、神戸で問われているのではなく、演劇全体として問われている。

励まされる、ということがある。五人(劇団、合唱団、親子劇場、舞踊家、映画サークル)の人に話しをしてもらったら、ある意味で、みんな元気がいいんです。経済的、物質的、日々の生活はしんどい面がたくさんあるが、とにかく元気がいい、何んでだろう、と私なりに考えた。

全国からの援助——我々のことを考えてくれたんだ——に対して、地元として応えなければならぬという思いが強い。それともう一つは、各々のジャンルで、自分たちは今まで何んでこんな事をやってきたのか、ということが問われてくる。

ピアノを弾いている人が、ピアノは助かった、しかし、こういう時にピアノの音を出しているのだから、どうだろうか、どうだろうか、と自問自答して、やはり、私はピアノを弾くんだと、もう一度はじめる。こういうことが芸術・文化に携わっている人たちの中にある。

劇団の場合でも、こういう時に、いったい自分らがやっている演劇は力を発揮できるのだろうか、意義はなんなのだろうと。しかし自分はやろうとしている、だからこそ、原点をみつめる。劇団をつくる時、初めてやるうとした時に、それなりに自分に問いかけてはじめてであろう。ところが次第にマンネリになり、公演があるから次から次へと演じている、そういうことだけでいいのだろうか、と問われる。

ある画家の彼は、これまで自分が画いてきたのは、いつなにに展があるとかで、創作してきた。今度の場合は、あの焼け跡をみたら、地べたに座り込んで、とにかく画いた、と言っている。

このようなことが、各ジャンルの活動にあったらどうし、それを今でも問い直しながらやっている。だからこそ、様々な外的諸条件はしんどいけれど、しかし元気なんだ、ということを一方では考えている。

文化的スペースをこまめにつくる街づくり

それから街づくりの問題について触れる。衛さんのほうから「街があって文化ができるだろうけれど、文化を中心とした街づくりが大事だ」と言われた。それはその通りだと思っている。

変わらなければいけないものが変わらなくて、変わらなまま続けなければいけないものが変わっていく。悲しい思いをする事がある。例えば、変わらさけない事が変わらないで、というのは、国が考えている復興計画である。神戸市の計画は国の考えている計画で、その計画でなければ神戸市には金を出さない。これは、はっきりしている。

この計画は、この際だから区画整理をする、ということで、失敗してきた大型開発、ゼネコン型の延長線ではない。例えば三宮に大きな鉄筋ビル、地下街を作っていく、

実行できる、権限が下へ下へと降りていかないことには困る、文化なんて育たない。地方分権時代といわれながら、そうじゃない、一つ一つの区画整理まで国のいう通り行われているというのが今の実情。そうではなくてその地域のこと、地域ごとに考えていくということ。それと情報公開と市民参加の実質化という二つの柱が必要だ。

自治の問題について

衛 演劇や文化の話をしているが、最終的には、平田さんが言われた分権というか、住民自治、自治の問題になってくる。例えば、公営住宅を建てたら、アトリエがあり、稽古場があって、そこにアーティストが集う、ここにはいつもアートがあるという状況をつくるということは大事なことだが、アーティストが公共に関わるということは、それなりの自治能力がないといけない、アーティストは施しを受ける訳じゃない、きちっとした公共的な役割を果たすから少なくともそれに対する補助が果される。社会的に必要なことから税金で支えようという根拠が成立することだ。

先に文化庁からアートプラン21という政策が発表され、三十二億円で日本を代表する芸術団体を対象に十億円ある。限られたもので演劇は三、四団体に出る——そういうのを見ていると、演劇人はお金がないから慈善を受けているという感じ。私は違う。税金を使うということは、なん

それこそ人の顔が見えない、そんな所では文化が育たない。だから力はあまりないけれど、僕らも文化を中心とした街づくりを提唱していきたいと考えています。

コミュニティ、人と人のネットワークというか、つながりというか、そういうものが人間を救ったと衛さんは言われたが、文字どおり、具体的にそうであった。ガタガタときて倒れ、気がついた時自分は助かっている、普段からネットワークがなければ人を助けるという発想は出てこない。下町だと普段から人のつながりがあるから隣り近所の人の状況がわかっているので助けにいかれた。助かった例がたくさんある。

やはり、ネットワークづくりが文化をつくっていく基礎だろう。

仮設住宅に集会所があるかないかで違ってくる。あれば人が集まって何かできる。例えば、フランス等では大きな公営住宅をつくる場合そこには画家のアトリエのスペースをつくらなければならない。そこに低家賃で画家を同居させる。日本でも市営住宅等を建てる時、アートの文化スペースをつくることなども、その気になればできる。そういうスペースをつくれれば人が集まる。集会所等、そういうことをこまめにつくるのが大事だ。こんなことを考える街づくりが重要だ。

地方自治(県、市、区、町)単位でものが決定できて、

らかの形で自分たちが社会に影響する利益をつくっている——が、舞台芸術は金がかかる、赤字が出る、俳優もボランティア的狀況でかろうじて演劇を成立させている——が、演劇が社会的利益をつくりだすことで初めてニーズ(社会的に必要)に対応でき、それなら演劇が税金を使う理屈はある。助成を受けるとき、演劇人は恵みを受けている訳ではない、それなりの役割を果たしているかどうかは本当は問われなければならない。

今、出ている殆どのお金は営利法人で、営利として成り立たないところに出ている。これは住専問題の小型版ですが、全国の自治体の芸術文化予算は六千億円くらいあります。それがプロといわれるところに流れている、これもおかしい。

そういうことの枠組みというものが震災で丸裸にされた。それを組み立て直せと、日本が持ってきた社会、政治、文化、日本の演劇などが持ってきた近代をもう一度問い直せということなんだろうと思う。演劇の話をしていると最終的には社会のしくみまで話は進む。そういうことが問われている、この意識を持たないと、公共に関わるという意識はでてこない。

演劇人としての自治能力の問題、つまり演劇人が利益を受けるんじゃない、利益を生むから公的助成を受けられるという健全な関係がもてないから、意識が先に動いていか

ない、社会と演劇ということに無関心ではないだろうけれど、公共に関わることに對して意識が伴わない、が、神戸震災で少なくとも考えるキッカケができたのではないか。

『五十年目の戦場・神戸』

平田 「阪神大震災は演劇を変えるか」という本の中で、今までの演劇の枠を持って、あの状況では神戸に入れない、入れなかった、あの状況をきちっと消化して、具体的に舞台にするには時間がかかる、またはビッコ劇団（兵庫県立青少年創造劇場）がやったように激励公演、チャリティー公演ということ、入り込んでいくべきで、そこから開かれたものは何んだったのかと、いろいろな考え方があがあるが、衛さんは単純に「他の者と違う、演劇人のノウハウを持って、そしてあの時期に「心のケア」という型を持って入る」という問題提起をしている。演劇というものを考える上で、そして演劇の公（パブリック）とニーズとしての問題にどう応えていくかという衛さんの一つの考え方であろう。それが絶対正しいかどうかよく判らないが、それはともかくとしてパブリック・ニーズということは考えていかなければならないだろう。

それに対して僕らなりの一つの答えとして、市民がつくる朗読劇『五十年目の戦場・神戸』ではないだろうか。

（この朗読劇の成り立ちについては梶さんの報告もある

心に敏感であることではないか。そういうことで演劇人は一番、辛い立場に自分を立たせることが、今、必要ではないだろうか。

境野 私たちは、今日のシンポジウムを機会として神戸の教訓を学ぶことによって、これからの私たちの地域演劇の課題をあらためて探っていかなければならないだろう。

市民がつくる朗読劇

『五十年目の戦場・神戸』のじゆ

劇団四紀会 梶 武史

作者の車木蓉子さんから初めて相談を受けたのは四月中旬でした。電話の声は「何かを始めなければ、いま動き出さなければ生きる力さえ失ってしまう、震災を書くので朗読劇にできないか」と、かなり切迫していました。聞けば、東灘区の住宅が全壊し重傷を負って愛知県の子の家に一時避難していた時、神戸市が居住者に報せることなく建物を解体、ライフワークとして世界の戦跡を歩いて書き留めてきた記録のすべてが棄て去られた、と言うのです。「まぬ

ので略します、阿部好一氏の劇評も参考に——境野」

神戸の震災を風化させてはならない。それはそこに含まれた様々な教訓は全国的な問題であろうと考えるからだ。この『本』（五十年目の戦場・神戸）を『この子らの夏』のようにいろいろな地域で演ってほしい。演出方法や参加の方法など様々な形式で演られたらいい。大きな問題として公という概念がなかなか日本の社会にはない。官と民があるけれど、その間を包み込むような公共という概念がなかなかない、したがって文化活動が公共という自負もない、まわりの者、観客なり市民も公のものとして認知していくシステムやコンセプトがないということにぶつかってきている、それを何とかつくり上げていくことが大事ではないかと思っている。

衛 医者の場合でも、あの状況下で否応なく逃げることはできない、日本では救急医療対策は持っていたが災害医療（医療関係者は少なく患者が多数）対策がない、誰から助けたいのかということ、少なくともまだ息のある人をも救えなかった。医者は悔しさのあまり涙を流していた。演劇人はどうだったか、神戸の演劇人以外はその悔しさや痛みを感じる事ができたのだろうか。震災直後の状況では演劇のノウハウはなかった、その悔しさを味わうことが学習の機会だ。演劇を愛するということは、人間の

☆

二時間のシンポジウムで、平田康、衛紀生両氏の発言をすべて記すことができなかった。また、話言葉による細かなニュアンスを表わすことができなかったことを御了承願います。

☆

☆

（境野）

がれえなかった天災の上に、まぬがれ得た人災を被った」車木さんの心情が痛いほど伝わってきました。

私もまた演劇にたずさわる者として、わが街に起きた未曾有の体験をさまざまな角度から記録し上演しなければと思っていたので喜んで協力を申し入れました。けれども劇団では第百回公演として震災を題材にした内田昌夫の創作劇を準備中で、他の集団もそれぞれ活動再開に懸命だったので、小さな朗読グループを中心に有志を募って上演する以外に方策が浮かびません。そこで何をどのように描くかを詳細に打合せすることもなく「思いつくまま書いてほしい、私が上演形態を探りながら台本に構成し演出するから」と、きわめて無責任



市民参加による朗読劇「50年目の戦場・神戸」

守にした時など、ファックス用紙が床面一杯に溢れ返るほどで、しかも上演時間に換算して五時間をはるかに超えるほどの膨大な量に達しました。次々にワープロを打っていた私もついに悲鳴をあげました。労力にはなく原稿の内容容にでした。体験記、自作の詩、まだ恐怖体験の震えがと

な安請け合いをし、「兵庫のペン」52号に執筆した体験記『五十年目の戦場……地を這った者の叫び』に沿って書いてみては、と言いつけるのが精一杯でした。

やがて夏から初秋へ、堰を切ったように膨大な原稿がファックスで届くようになりまして。二、三日家を留

まらないと言いつながら足で集めた証言の数々、それらの一つ一つに詩人の繊細な感性が溢れていて、いかに非情な私でも一回の上演時間内に削除することなど出来そうにありません。原稿はこれでストップして下さいと懇願せざるを得ませんでした。そして、ともかく上演時間二時間の台本にまとめました。

震災は、人間のすばらしさと醜さを炙り出しました。同時にまた行政の無力、弱者に対する冷酷を白日のもとに曝し出しました。そして市民は、その体験を通して物の豊さに囲まれている自らの生き方と自分の街を改めて見直す契機となりました。この作品もまたそうした視点に貫かれているので、「神戸をほんまの文化都市にする会」(四年前に文化団体によって結成)の主催による上演がもつとも相応しいと考え、会に所属する団体のみならず一般市民にも参加を呼びかけることにしたのでした。

新聞紙上で「一行づつでも震災を語りませんか」と公募したところ予想をはるかに超える七十人余が応募してきました。年令も経歴も千差万別、ほとんどが被災体験のある女性でした。最高齢は八十歳の女性でしたが、夜の稽古は帰途が危ないからと家族の猛反対にあつて稽古途中で断念し、悔しい悔しいと繰り返しながら稽古場を去っていった姿が忘れられません。私たちは市民応募者を優先的に配役して劇団関係者は裏を支えることにしました。こうして一

月の神戸公演では、小学生二名を含む七十歳までの、女性二十七名、男性十三名、総勢四十名が出演しました。

稽古は十一月から始まりまして。このときまでに演出には劇団どろの合田氏を推挙し、私は寄り合い所帯の取りまとめや渉外活動など裏の仕事に徹することにしていました。車木さん自身もしばしば稽古場に足を運んでくれました。参加者のなかには朗読経験者もいれば全く初体験の主婦もいたので、稽古のすすめかたに腐心し、配役の変更もしばしばでした。けれども隣人とともに震災体験を語り合いたい熱い思いでいっぱいだったので、稽古場は真摯な姿勢と連帯感に包まれていました。稽古当初に脱落した者以外は、厳冬の夜の稽古にも遅刻や無届けの欠席はほとんどありません。たった数行のために通いつめた朗読経験豊かなベテランもいました。こうした稽古風景は劇団関係者にとって刺激的でした。普段、遅刻や欠席者が多く緊張感を失いがちな稽古場に馴れてきたわが劇団を省みて恥ずかしくさえなりました。

マスコミの協力も私たちの試みを勇気づけてくれました。神戸新聞をはじめ、神戸に支局を持つ各新聞社やテレビ局が取材に訪れました。NHKラジオの深夜放送「震災の街角から」では作者と作品の一部が紹介され、その時の機縁で、小室等さんが作曲・演奏を引き受けて下さいました。十二月十日に神戸で開催された震災フォーラムの際に公開

稽古を行い、来神した演劇評論家の衛紀生氏の激励と感想を受けたことも弾みになりました。協賛金も多くの人々から寄せられました。

稽古がすすむなかで、上演台本とは別に生原稿から編集した『五十年目の戦場・神戸』が出版されました。また各地から上演許可の問い合わせが相次ぎ、二月十七日の奈良市公演では、救援に駆け付けてくれた地元の人々にもその体験記で出演してもらいました。

「神戸をほんまの文化都市にする会」では、この作品が各地で上演されることを願っています。震災を一地方に起こった不幸な出来事に終わらせないで、いま、生かされている自分と自分の街を見つめ直すため、さまざまな場所で、それぞれに相応しい形態で、上演されることを待っています。自主上演の場合はスライドや音楽テープの貸出しも可能です。

上演を希望されるときは、上演形態の大小にかかわらず必ず事前にご連絡下さい。

上演に関する問い合わせ先

〒673 明石市東野町一五一一〇〇九

梶 武史 電/FAX 〇七八一九一一一五二三

著作『五十年目の戦場・神戸』作/車木蓉子

挿かもがわ出版 電〇七五―四三二―二八六八

『うたよみざる』あれこれ

地域演劇からの報告

川村 光夫

編集部からは地域演劇とリアリズムというようなことを書いてほしいというお話だったが、いまの僕には真正面からそれに答えることは、できそうにない。ある作者の創作体験を述べて、お許しをいたさうと思う。

やっていることはまぎれもなく地域演劇だが、果してそれがリアリズムであるかどうか、僕にはわからない。賢明な諸者の御判断におまかせしよう。

拙作の中で一番多く上演されているのは、昔話をもととする『うたよみざる』という作品である。これは後に芸団協からの依頼でミュージカル台本にしているが、もとは一九八一年に雑誌テアトロに発表したものだ。もう十五年も前のことである。その間わが岩手ぶどう座は勿論多くの集団で上演された。ミュージカル版、劇版合せると二十数集団に及ぶ。この作品を劇中劇とした高校演劇版とでもいっべき台本も生れている。

この作品が生れるきっかけは何であったかはっきりしないが、当時の新聞に原発事故の記事がのっていて、その現

場処理をしたのが出稼ぎ農民だとあるのをみて、僕は腹を立てていた。それが劇中の「汚い仕事、危険な仕事、とりわけこの危険な仕事を猿にやらせることが出来ればおらたちは安泰」という長老の台詞となった。

最近ミュージカル版の演出家であるふじたあさや氏がこの台詞をとらえて、「……にわかにも重みをもって聞えるようになった。十年前の予言が現実のものとなってしまったのである」と歌座のパンフに書いている。これは勿論近年各所にみられる外国人労働者の労働実態をみてのことである。いまや汚ない仕事、危険な仕事は彼らに押しつけられている。書いた時には思ってもみなかった状況である。

初稿を読んだ社会学のM教授は、「差別問題ですね」と即座に喝破された。たしかに僕の心中には過疎地辺境に住む者として、繁栄日本の中心都市に住む者へのメッセージにしたという思いがあった。中心地必らずしも繁栄とはいえない者もいることは承知の上である。ちなみにM教授は三十年前学生姿で、農林調査でやってこられて以来

のおつきあいなのである。

雑誌発表の翌々年、ミュージカル版が上演された（音楽三木稔、演出ふじたあさや、音楽監督友竹正則）。この時スタッフはこの物語りを、東アジア地域に置いてみるという大胆な発想で、音楽も美術もアジア的なものとなった。そうなってみると、それまで辺境に住む猿村の人間だとばかり思っていた僕の立場は逆転して、アジア諸国の人びとからメッセージをつきつけられる立場となったのである。これがその時のスタッフが作者である僕に返してよこした痛烈な返書だったのである。僕は差別される側に立って物語りを語ったつもりだったが、実は人間はだれでも差別する側にもされる側にも立ちうる存在なのだということをごこのホンで書いてしまったのである。

これを書くすこし前、長年の勤めから解放された僕は、柳田国男の著作などを読んでいた。それが昔話にとりか、るきっかけだったかも知れない。だが柳田民俗学だけではこの作品は書けなかつたろう。その頃ようやく著作が紹介され始めたマックススリーテイの説にふれ、昔話のみかたが変った。精しくその説を紹介できないが、一言でいえば、柳田民俗学はひたすら日本民俗の深層にせまるのに対して、マックススリーテイは、今日に生きる昔話、あるいは人類共通の遺産としての開かれた昔話とでもいえようか。もうひとつ恩恵を受けたものとして、いまは故人となっ

てしまわれた千田是也先生中心の演劇研究団体プレヒトの会に入会して、叙事劇という手法と出会ったことである。そのことはほかに書いたのでくわしくはふれないが、興味のある方は拙著『素顔をさらす俳優たち』（晩成書房）をお読みいただきたい。

僕らは昔話を叙事劇としてとらえ、仮面をつけて役の人物、仮面をとって素顔の俳優（地域演劇における素顔の俳優は、観客と共に日常生活を生きるリアルな存在なのである）という方法を生み出したのだった。

恩恵を受けたものはまだある。それは子供の頃からみられた山伏神楽の方法を使わせていたことである。山伏神楽は東北地方に伝わる民俗芸能で、もともとは山伏修行者の芸能で、近年は映画『早池峯の賦』で紹介されたから御存知の方もあるかも知れない。この芸能での舞台上の装置は、背後に張られた幕一枚だけである。これを様々に使い、演出がこらされる。例えば舞人が登場するのは幕のかげからだだが、登場直前に幕が前後にゆすられて期待感を高める。あるいはすこしたくり上げた幕の下から、白足袋をはいた舞人の足をちらりちらりとみせるのも、同様の効果を得る。果をねらったことである。そうしておいてやがて幕がたくり上げられ登場となるが、この時でも必ずしも正面を向いてばかりではない。なんとしゃがんだ姿勢で、つまりお尻を観客に向けて登場して、客の笑いを誘う。舞台上の

楽人や舞人にたいして演出上の指示を与えるのは幕の裏にかくれている演出家で、短かい木片に麻で房をつけたスズキというものを幕の上にか、けて合図を送るのである。

あるいは幕に十五センチ程の裂目をつくって置いて、必要に応じてそこへ扇子を差しこんで広げると、そこに菱形の穴ができる。その穴から口上を述べるといふ意表をついた使い方をする。僕の演出ではその穴から突然村人たちが顔を突き出して、爺さまをおどかす場面でこれを使った。

「壁に耳あり障子に目あり」のコトワザのように、共同体内部ではいつでも廻りの人間に見張られているようなところがあつた。そういう村状況がいつべんに出現したためか、大いに喜ばれた。

さて、こゝまでこう書いてきたが、脚本も読まず舞台もみない大方の読者には、何んのことやら判らぬことだろう。こゝらでざっとあらすじを紹介しよう。

爺さまひとり畑の草取りである。あまりの難儀に「猿でも出てきて手伝ってくれたら……」とつぶやくと、山一ぱんの猿が出てきてたちまち草を取り終えて「さあ約束だ娘を一人嫁にくれ」という難題。困った爺さまは家に帰って娘に相談するが上の娘も中の娘もとりあわぬ。話をきき、つけた村の衆には何んとすると責めたてられるしいよいよ困っている、末の娘がおらが行くとかつて出る。こうして少々頭は弱いが気だての良い娘が山に入って、村人たちに

言いふくめられたように、猿に人間らしいききたりを教えようとして一生懸命。猿もそれに答えようと努力の結果、木登りも出来なくなる仕末。……等々あって、やがて猿と娘は里帰りのため山を下りることとなる。途中の断崖に桜花が咲いている。娘にせがまれそれをとろうと木に登った猿は、白を背負ったま、転落水死する。それをみた村人は大喜だ。だが娘は初めて猿への愛を自覚し泣き崩れる。再び顔をあげる、娘の顔は猿の顔に変わっている。村人たちは「猿め！」と石を投げつけ娘を村から追い出す。

この話に僕が書き加えた最も肝心なところは、原話では猿が水死すると、娘はしてやったりと喜んで家に帰ることになっているが、僕はこの話を猿の側から書いて、ついに娘を猿へと変身させたことである。かつて人間は獣たちと競いあって暮しやがて勝利した。だが今日では、もう獣たちを滅ぼしつくそうとしているのではないか。そのあげく自分たちさえ滅亡しそうになっているではないか。そう考えると、初めてこの話を聞いた時の母の語りくちが浮んできたのだ。母は猿が転落水死するところまでくると、急に猿の側に身を寄せるようにして語るのだった。つまり母も原話から離れはじめたのである。

母は早くに夫をなくした寡婦の身だった。事あれば威丈高となつて庄迫する村の男たちよりも、村人にたぶらかされて死に追いやられる猿に共感したかったのは当然のこと

だったろう。僕はその母の想いの延長上でこの劇を書きあげたといえよう。

僕は長いこと木下民話劇をみつめ続けてきたように思う。木下順二氏は御自分の民話劇について、これは先祖たちとの共同作業である、という意味のことを話しておられ、氏のほかの作品とは分けておられる。氏の中では現代劇と民話劇は別なのである。

僕の場合は共同作業というよりも、過去の人びととの対話なのだろう。はるか昔過去にわけ入りながら、それを今日に生きる者の視点でみつめようとしているのである。今日を生なましく生きていればこそ、過去もまた生なましく蘇ってこようというものである。

台詞として採用している地域語（方言）も、山伏神楽の表現方法も、単に昔なつかしさや、地方色を加えるためのもではない。現代と過去との対話なのである。未来を見ようとしたければ過去も見えてこないのだ。

一昨年（一九九〇年）からロシア共和国オムスク市の国立第五劇場でこの作品を上演している。昨年十一月、そこから四人の俳優が来日して、合同公演を行った。そこでの演出は、猿の山一と娘の末子の愛の物語りへとしゅうれんされ、観客に衝撃を与えた。

遠くへ伝わって行けばゆくほど、枝葉はそがれて、樹の部分がかたまってくるものなのかと、その時そう思った。

〈報告—銀河ホール国際演劇祭に参加して〉

小さくも大きかった演劇祭典

京浜協同劇団 堤次郎

昨年十一月二十五日(廿六日)の日程で岩手県湯田町の町立銀河ホールにおいて「うたよみざるによる銀河ホール国際演劇祭」が開催された。我が劇団も「がんとり」（川村光夫作）を上演した直後ということもあって特別の興味を持ち乗車一台いっばいの五名で参加した。収穫も多く大いに楽しんでいたもので、そのお裾分けをしたことになった。

町もいい、
とり囲む大自然もいい

湯田町といえば、知る人ぞ知る川村光夫氏の主宰するぶどう座の本拠地だが、一般には温泉つき駅がある町として、また演劇人には、三年前前におかず四千五百人の町民の力でゆた文化創造館・銀河ホール（本格的演

劇専用ホール)を建てたことで広く知られているが、二度訪ねたこともあってもう少し突っ込んだ町についての報告をさせていたと、この町は奥羽山脈の頂きに近い場所に位置する町でひと山越えればおとなりが秋田県、山々と湖(人口湖)に囲まれた自然のままの町、そんな印象である。我々五人は早急に現地向ったのだが、まだ十一月というのに数十キロ先から猛吹雪の大歓迎をうけるハメとなった。現地に着いた頃には積雪二十センチ程、一面の銀世界にかわっていた。寒さで体が冷え切っていたため、そんな自然を味わうゆとりもなく一軒の食堂にまいこむこととなったが幸運と云うべきか町の住民たちがみんなそうなのかはともかくきさく女主人のご厚意で彼女自慢の漬物とお酒でさっそく無事到着の小宴会を開くことが出来た。こんな楽しい機会を偶然持つことが出来たから言う訳ではないが大自然に囲まれたこの町の良さをあらためてかみしめた思いである。

一度は全リ演ゼミをやってみたい会場

まだ知らない方のために会場となった銀河ホールについて一言ふれると、舞台機構も客席もとてもすばらしく、おそらく全国の劇場と比べても一番でないかと思う。(少々大げさかな?)、床も壁も全体に木の良さが最大限に生かされていて音響などメカの面でも観劇の気分としても最



ロシア・オムスク市国立第五劇場・ぶどう座
合同公演『うたよみざる』

・ユルコワ女史他)、その他、各劇団の『うたよみざる』一部上演または報告などなど。

以上のように今回のこの演劇祭は、看板どおり徹底して『うたよみざる』にこだわり、その先に、これからの地域劇団の在り方、めざす創造を模索し合おうではないかと云う大胆の的をしぼった催しであった。

こうした点からも我々『うたよみざる』に直接にはかわりを持っていない者は当初大きな取獲を予期していなかったのだが、以外や以外、テーマと実際の内容は的を絞っていないながらも奥深く、企画全体から得た取獲は我々が一番大きかったのではないかと思っている。少々大袈裟かも知れないが地域劇団の普遍的課題みたいなものがこの催しに

高、客席の両側は取外し可能な五〇席の棧敷となっており、キャバ三四〇と大変理想的とも言える造り。付け加えるならロビーは湯田の大自然が一望出来る総ガラス張り、建物全体が気持をゆったりとしてくれる感じで一度は全リ演の催しをやりたくと卒直に思った。

シンプルなテーマと内容の二日間

さて、道草に時間をかけすぎた。本題に入るとするが、まずは二日間の演劇祭を要約して報告すると次のとうりである。

第一日目は「地域と演劇について語る」シンポ(報告者は青森から劇団支木の中野健氏のほか東北の地域で活動されている三氏)と、歌座(総監督・三木稔)によるミュージカル・オペラ『うたよみざる』(作・川村光夫、作曲・三木稔、演出・ふじたあさや)の上演。

第二日目は、ロシア・オムスク市国立第五劇場とぶどう座の合同による『うたよみざる』の上演(第一幕は主としてぶどう座中心、第二幕は逆にオムスク中心に、主役を交替させ、装置もぶどう座の内山勉氏プランのものとオムスク松下朗氏プランのものを入れ替えての上演)をメインに、演劇評論家尾崎宏次氏の講演「劇と語りについて」(一時間半)、「オムスク市国立第五劇場における『うたよみざる』体験の報告」(報告者は演出の松下朗氏、支配人のA

参加してとてもわかりやすい形で見えてきたと云う感じで直接お誘い下さった川村光夫氏と銀河ホールの新田満氏にはあらためて感謝の気持ちを申し上げたい思いである。

参加者は小規模だが内容は大規模

お誘いのチラシに「うたよみざるを通じて地域文化の深部に横たわる共通点を発見しよう」地方からの文化発信の典型を問う」と書いてあるように主催者側は参加要請を『うたよみざる』と川村作品に関わりを持った団体・個人に限定されたようで、実際の参加団体も外国ではロシア・オムスク市国立第五劇場、全リ演関係では六・七団体・個人、全体としても百名規模の小さな集まりであったが中味は濃く実り多いものであった。特に歌座のすがすがしい舞台、言語の国境を感じさせなかったぶどう座とオムスク劇団の大胆な実験上演はそれぞれに楽しませてくれ、両舞台とも地元町民で満席となったが客席がおおいにわいていたのもまた印象的であった。上演後に聞いた話がこの客席をうめると町民の一角が参加したことになるといふ事を知って二度びっくりと云う感じである。

また、上演をはさんで行なわれた講演とシンポでは後にも少しふれるが、尾崎宏次氏のお話と中野健氏の報告がそれぞれきわ立っていて演劇祭の背景を支えていたように思う。とにかく全体として、明日どうしようかと悩んでいる

我々に新鮮なエネルギーを注いでくれたそんな実感を持つ催しであった。

収穫そしてまとめ

参加してまず大きかった収穫は劇団支木の中野健氏の報告である。ご自身近く発表される機会があるというので詳細はさけるが、青森県内二十八の劇団がそれぞれ座付の作家あるいは委嘱作家をかかえ地域にこだわった創作を生み上演していると云う報告をされたが、今日、おおむね自称地域劇団になってしまっている我々にとっては実に痛い個所をつかれた刺激的なものであった。



うだ文化創造館 銀河ホール

そして一番大きかったのは尾崎宏次氏の講演内容である。一時間半のお話を数行にまとめる勇氣も力もないので敢えて印象に残った点を断片的に上げると「演劇にはユーモアがなくては駄目、ユーモアの源は批判力、ユーモアのある作品は永遠に人間の中に生きる。おなじ笑いでもダジャレは



ぶどう座の舞台

駄目」「時代の行列に参加するな、そこからは思想も文学も芸術も生れてこない」「どのように幕をおろし、観客はそれをどう受けとめるか、もっと真剣に考えてほしい。科学は問題を解決するが文学(芸術)は問題を提示する。(芸術)は問題を提示する。チェーホフの言葉だが今こそ大切ではないか」などなど、これ以上を書いても真意も伝わらないし紙面もないのでテ

最後に、この催しを表で裏で支えた川村光夫氏、新田満氏そしてぶどう座の皆さん、それから装置家の松下朗氏に「本当にご苦勞様でした」と云う気持ちを表わして報告にかえることとする。

今日のリアリズム シリーズ2 今考えていること

—— 広島とルネッサンス ——

福岡現代劇場代表

猿渡 公一

一九九五年。太平洋戦争敗戦五〇周年の年である。百年前の一八九五年(明治二十八年)四月十七日には、下関の春帆楼で伊藤博文と李鴻章が日清講和条約に調印している。この条約で日本は台湾を中国から奪い、アジアで本格的な植民地経営に乗り出した。今年には日本のいわゆる近代化の出発の年から百年目の年にあたるわけである。

私たちの地域・美しい感性空間を求めて

一八六八年、明治と改元した日本は、ひたすら近代国家への道を走り始めるが、それから百三〇年、私たちが生きた二十世紀は、国家の時代であった。国境の壁の中に国民を囲い込み、国語を統一し、中央政府に権力を集中し、一致結束して外に当たるといふ「理念」の時代だった。戦後でさえも企業に国家に最高の価値をおき、「日本株式会社」という呼称がまかり通る時代だった。

では、世紀末、不透明で価値が相対化された混沌の時代という「はやり言葉」にしたがって、価値を相対化してみ

ると、近代国家と向かい合うものは、「理念」に対して「感性」であり、「国家」に対して「個性をもった都市」、あるいは「地域」ということになる。

もっとも、古代ギリシャの都市国家(ポリス)アテネナイの人口は二万五千人程度であり、プラトンは五〇四〇戸の戸数を都市の理想の姿としたし、アリストテレスは、十万人を越す都市など人間の住むところでないと言いつつ切っているのだから、現在の肥大化した日本の都市なり、私たちの地域をどう捉えるかについては多くの難問を抱えていることになるわけである。

だが、先の見えにくい時代だからこそ、いま私たちは歴史に学ぶことが必要なのではあるまいか。それは、単にギリシャ劇、コメディア・デルラルテ、シェイクスピアなどの古典劇に学べといっているのではない。ここで、私は、都市について、古代ギリシャやイタリヤの都市国家における広場(コミュニケーション・センター)について考えてみたいと思う。

現在でもヨーロッパで最も美しい広場の一つと言われるシエナのカンポ広場について、市民たちは、「散歩に来る場所」「くつろぐ場所」「人に会う場所」「お客さんを案内するところ」と語っている。シエナの人たちにとって、広場は居間であり応接間なのである。広場や劇場やスポーツ競技場など、楽しみのための公共空間を数多く持っていたアテナイの例を出すまでもなく、都市に必要なのは、人と人との出会いの場所、広場という情感あふれる感性空間、楽しみと知の空間なのだ。そこで人びとは生き生きする。それは、私たちが繰り返し語り合った「地域において観客と演劇人が共同して生み出す濃密な劇場空間」そのものであり、かつて私が、観客と創造者の共同体、知の交換集団、知的体験的コミュニティの形成と呼んだものと同質のものである。いま、求められているのは、私たちの地域、私たちの生活空間における広場（アゴラ、フォーラム）の存在なのであるまいか。

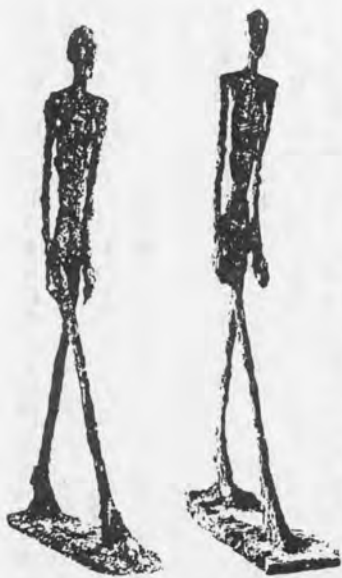
リアリズムとは何だろう

二十世紀は科学技術、技術文明の時代だった。

技術文明の基礎となった合理主義に基づき、機能性、経済性、効率性が追求された時代であった。日本の近代化百年の歴史もこの線で推し進められた。新劇も、日本に近代を根づかせるための文化運動として始まった。その新劇が

明治の末、十九世紀末ヨーロッパのリアリズムが日本に紹介されたとき、リアリズムは写実主義と翻訳された。自然主義の時代、それはかなり正確な翻訳だといってよい。しかし、印象派まではそれですむとしても、その直後の後期印象派のセザンヌやゴーギャンの作品は、リアリズムと呼んでいいが、もはや写実主義ではない。そしてリアリズムであることとその抽象性は矛盾しない。リアリズムは時代とともに代わり得る規定なのである。しかし、リアリズムを写実主義と翻訳した言葉の呪縛は私たちをとらえ続ける。ヨーロッパ近代を模倣した日本の近代化のありさまと関係するのだろうか。

宮岸さんが指摘するとおり、現代におけるリアリズムというとき、それは写実主義とは別物だといえることができる。しかし、ジャコメッティやヘンリー・ムーアの彫刻をみれば、その作品は具象様式ではあるが、けっして写実主義ではない。では、それが、現代におけるリアリズムなのか、抽象とリアリズムとの関係はどうなるのか、もっと深めていきたい問題である。



ジャコメッティ「歩く人」

十九世紀の自然科学の発展に支えられた自然主義に強く支配されたのも当然だといえる。そして、大まかに言えば、新劇の歴史はリアリズム演劇探究の歴史であったと言っていられる。

「演劇会議」八七号に宮岸泰治氏の「敗戦五〇周年を迎え―主に戯曲について」という大変面白い小論が掲載された。その中で宮岸氏は写実主義の問題にふれ「見えるとおりを写し取って良しとする写実主義では、届かない世界がある。現実



着衣の横たわる母と子（ブロンズ原型）1982年
ヘンリー・ムーア財団

がある。現実の下におおわれた、矛盾の根というものは見えてこない。今日では、さすがに写実主義の持つ限界はもう常識化しているといっている。「と書いています。さて、リアリズムとは何だろう。」

「現代社会は混沌としており、自分たちは論ずべき足場を持たず、ふらふら漂っている存在だ。」という現実認識に立ち、その空気を反映している若者たちの芝居がある。時代を反映した空虚さは切実であり、同時代の感性を共鳴させる。ダダの演劇なのだろうか。ただ、その主観的センチメンタリズムと想像力ということばの仮面をかぶったその空想性の幼なさにはうんざりさせられることも多い。それも、成熟した大人の文化を創りえなかった日本の大人たちの未熟さのせいなのだろう。ともあれ現代は困難な時代なのである。

だが、ふりかえてみると、困難な時代にこそ、新しい時代が生まれてきたのだ。

ボッカチオの「デカメロン」第一日の冒頭部分には、一三四年、フレンツェを襲ったペストの恐るべき様子が描かれている。ルネッサンスは、まさにこの困難のなかで始まったのである。困難な時代、先の見えない時代は過去に知恵を求める。ギリシャの美的生活の復活、再生を意味するルネッサンスは、「自然と人間の発見」と言われるが、中世のように理念に生きた時代と違って、現実の人間自ら

を見つめ、自らを取りまく自然と人間関係を見たとおりに認識しようとした現実主義の時代であった。人間そのものの存在、肉体を美しいものとしてとらえる人間讃歌であり、遠近法にみられる合理精神であった。それは花のある美しい生活を求める態度であり、過去と共生し、その中から知恵を発見する態度である。

「死の勝利」を描いたブリュッゲルもベストで近親者を失う困難な時代に、働く農民たち、すなわち人間への共感と自然讃歌の絵を描き、幕末の困難な時代を生き、安永七年（一七七八年）から嘉永三年（一八五〇年）まで七十年にわたって絵を描き続けた北斎も「自然と人間をあるがままにみる」という地点にまで自らの画境を到達させた。新しい価値体系を求めて苦闘している時代だからこそ、私たちは、現実そのものの中から、現実的に学ぶ態度が必要なのだと思う。すくなくとも、それをリアリズムの態度というのであろう。

理念を先行させた社会主義リアリズムの時代には、劇場は啓蒙主義的空間であった。いま、現実を現実的にとらえて、そこに「新しい美の発見があるような感性的空間の劇場へ」という新しいルネッサンスの時代を迎えようとしているのかもしれない。写実主義とリアリズムの関係が、どこかへ飛んでしまったが、私は、一方で、抽象ということが気になっている。抽象は抽象という認識の問題であり、

具象の発展したものでないことだけははっきりしているのだが……。

かつて、「老子」は「色がありすぎると目がだめになり、音がありすぎると耳がだめになり、味がありすぎると舌がだめになる。」と言ったそうだ。気になる言葉である。それは、ビーター・ブルックの「何もない空間」と通じあうものがある。

ここまで、美術の視点から話を進めてきたので、もう一つ「デッサン」について少し考えてみたい。デッサンは、あらゆる意味で、もともともごまかしようのない芸術である。デッサンの名手ロダンは「自然に単純に素描すること」と語った。さらに、「事柄の真実がつかめていることだけで美しい」と語った。デッサンは絵画のように完結した表現ではない、表現であるより物の見方、認識なのだ。そのような視点でリアリズムについて考えてみたいものである。



ジャコメッティ「指さす男」
(1947年)

北から 南から 劇団通信

劇団がおおは新年五日から稽古を開始、張り切っています。
次回公演は次の通りです。

◇桑名河畔情話 『歌行灯』

泉鏡歌／原作・久保田万太郎／脚色

二月十七日（土）桑名市民会館 二回公演

これは劇団の三十五周年記念／桑名市文化スポーツ振興公社創設一周年記念／共同企画で桑名市が三〇〇万円拠出、国と三重県の文化振興基金助成事業で広く出演者を市民公募で募りました。演出は地元出身の元松竹歌舞伎俳優。この芝居、明治の桑名が舞台で、仕舞いあり、謡曲あり、桑名の芸者衆が全面協力、下座音楽の吹込みから、当日の出演まで全てが新しい試みです。衣裳は「松竹」からの借用です。

◇成井豊・真柴あずき／作 伊藤恭子／演出

『アロイン・アゲイン』

三月八日（土）九日（日）

桑名市コミュニティプラザ 二回公演

桑名市文化スポーツ振興公社助成事業

もっぱら、このところ「キャラメル路線」を走っています。若いメンバーが全力投球。二本の作品が同時進行中です。こちらも劇団の三十五周年記念公演です。

報告

アンニョンハシムニカ韓国文化祭

韓国・劇団馬山公演『春香伝』

実行委員会が招待。韓国の古典劇を現代風に早いテンポでミュージカル仕立ての楽しい作品で好評でした。観客は約四〇〇名。城谷事務局長も観劇に来桑してくれて感激。劇団馬山は全リ演との交流を切望しています。韓国の他の劇団も日本の劇団との交流を期待しています。武生市でも劇団たけぶえの招待で公演しました。

◇成井豊／作 伊藤恭子／演出『銀河旋律』

九月二十二日（金）二十三日（土）二十四日（日）

劇団稽古場「ななわ小劇場」四回公演

観客は四二〇名。連日満席の押す押すな盛況。あつい汗をかきました。

511 三重県桑名市睦美ヶ丘一〇五八

TEL 〇五九四一三一四二二〇〇

神戸職演連

九五年一月十七日の大震災に襲われ、余震もひどかったが仲間達の心の中の揺らぎが納まるのがなかなかで、今年公演は出来ないと思っていたのが、砂本量作「レンタルファミリー」一幕を神戸「神劇まわり舞台」の一つとして、会場もほとんど使えなかったので、劇団「どろの芝居小屋」で十二月八、九、十日の三日間上演しました。サークル員一同晴々とした顔で一年をくぐりました。その他の各サークル員個々の活動は、四月二〇、二十一、二十三日四日間「わ・わ・わ・フェステバル」。六月二十三、二十四、二十五日「どろ」にて元気の出る集会。

九月八、九、十日「火の華・サイタ」。と出演

九六年一月二十七、二十八日「五十年目の戦場・神戸」。参加

二月二十四、二十五日「劇団」（七）に中垣参加。

（菊地照一）

という方を含め、観客数も九百人を超えました。この七月公演は、サールナートホール（私立・二百席）で舞台全般について学ぶことができませんでした。多くの事に関われた事に、深く感謝し御礼申し上げます。今年は、六月八日に静岡市民文化祭の公演をひかえています。秋の自主公演や劇団の創立を祝う集い等を計画中です。団員の創造力向上、劇団財政の安定等々、課題が沢山あります。

劇団火の鳥は、内状は火の車ですが、若い力で未来を見つめて、今年のスタートをきりました。全リ演のみなさん！ どうぞよろしくお願いします。 草分裕美子 記

(421)21 静岡市安倍口団地五―三八―

三〇八 泉地守方

TEL 〇五四―二九六一―二九七

劇団あしづえ

九五年は八雲村「しいの実シアター」お披露目の年でした。九六年は島根県多伎町の旅公演（一月二十八日）から始まりました。今年、シアタースタートの年です。劇団創立三十周年でもあります。三つの目標に向かって劇団員一同歩みます。

一、私たち劇団員がシアターを使いこなせるようになること。（空間、機材、地域の人

々）

二、シアターへ来て下さるお客様をふやすこと。観客だけでなく、劇団活動をいろいろな面（例えば受付やカメラ係、劇場内外の環境整備、その他スタッフ、キャストも）支えて下さる方々、つまりアートボランティアとして、登録団員制度をスタートさせる。

三、新しい劇団員をふやし、次年度からの新しい仕事の基礎固めの年とする。

劇団にとって大切な「財産」は「人」。その「人」が育つように拡げていきたいと考えています。

五月から、演出も美術も新たに「おこんの初恋」をロングラン公演します。

公演日程は

五/二十六(日)・六/九(日)・六/二
十三(日)・七/十四(日)。

詳しくは、しいの実シアターにお問合せ下さい。

(690)21 島根県八雲村平原四八―

一― しいの実シアター

TEL 〇八五二―五四―二四〇〇

FAX 〇八五二―五四―二四一一

演劇集団 あり

今年も雪が多く稽古に集るのも大変です。昨年十一月の米子市文化ホールでの、二十五周年記念公演は、横内謙介作「ジプシー」を前田あきら演出で上演し、久々に四百五十名の観客を迎え、評価もよく多くの人に励まされた喜びがありました。

現在県西部の米子市を中心に、活動できる

のは「あり」のみです。他のサークルが停滞し、解散するなかで、私共も決して順調とはいえません。昨年末には創立メンバーや、中心で働いた人の休団も数名ありました。

労働環境の変化や、年令差による考え方の

相違等の問題克服もあります。さいわいにも、

県演劇連盟での相互刺激や、地域文化団体協議会や鑑賞団体内での活動、高校演劇への協力等の継続で、新しい仲間も次第に増えているのが救いです。

三月二十四日には、県民文化祭演劇公演に、

米子市から三十キロ中国山地に入った、日野

町の新ホールで、私共がみ群杏子作「恋ごころのアドレス」を田中小百合初演出で、他に

鳥取市の劇団と共に公演します。

只今は、その稽古と未知の町での観客を迎える活動に取り組んでいます。そして、六月に

は、米子市文化ホールで春の定期公演も行ないます。

(683) 鳥取県米子市昭和町二二―二宮倉方

TEL 〇八五九―三三―九三〇二

黒石演劇研究会

全リ演の皆さん、本当にお久しぶりです。

私達黒石劇研は、昨年十一月十二日に第五十二回公演、『愛さずにはいられない』（作・ジェームス三木、演出・杉山隆一）を、創立五十周年記念企画「第一弾」として上演し、約五〇〇名に観ていただきました。新人の頑張りもあり、このところの長期低落傾向の観客数にも漸止めが掛けられました。又、(財)第百生命フレンドシップ財団の助成も受ける事が出来、制作面ではまずまずでした。最も心配していた稽古場も知人の紹介で職業訓練校を使わせて貰う事になり、本番の実寸に近い広さで稽古が出来ました。

しかし『五十周年記念』と銘打ちながら創作劇がやれなかった事には悔いが残りましたし、新聞の劇評にも「アマだからこそ挑戦への意気込みが感じられない。」と叩かれました。アンケート等では近年にない程好評だった事もあり、『演りたいもの』と『演れるもの』をどう折り合いをつけるかという事

難かしさを改めて感じました。

今年には劇研が黒石の地に生まれて満五〇歳。曲がりなりにも、半世紀に及んで上演し続けて来れた事を感謝し、更に活動を続ける事を誓うために『記念の集い』を四月に、そして十一月には企画「第二弾」を上演する予定です。今年もよろしくお付合の程を！

(担当・村山)

(036)03 黒石市乙徳兵衛町五一加賀谷方

TEL 〇一七二―五二―四〇九七

稽古場 黒石市花園町三四 杉山方

TEL 〇一七二―五二―三〇四一

演劇集団土くれ

昨年十一月十六日から十八日と、麻布演劇市にて、第四十四回公演「きらめく星座」（井上ひさし作）を上演しました。観客の受けも良く、無事上演できましたので、ひとまず、ほっとしております。と、言いたいのですが、今年二月六日より、第二回土くれ演劇教室を開催するにあたり、その準備と、二月十七日、十八日と土くれの総会があるので、休んでいる暇もなく、ちょこちょこ忙しく活動しています。

話は前後しますが、先日一月二十日に、太鼓「どんどんクラブ」のメンバー五名で、ロ

シア大使館の新年会に、太鼓を打ちに参加

しました。ロシア大使館の新年会で、太鼓は初めてだったそうで、大変皆さん喜んでいただき、私たちもとても貴重な経験を、楽しかったです。この場をお借りして、太鼓を教えていただいている、京浜協同劇団の皆さんに、改めて、感謝を申し上げます。

土くれの次回公演は、十月後半の予定とされていますので、一同頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

(近藤ちづえ)

(105) 東京都港区虎ノ門一―二一―

第一法規ビル 三F 福田事務所内

TEL 〇三―三五〇八―一〇一四

FAX 〇三―三五〇八―一〇一四

東京芸術座

年明け早々、「冒険者たち」（斎藤惇夫・原作／平石耕一・脚色／杉本孝司・演出）の稽古開始。これは、恒例になりました全国お

やこ劇場・子ども劇場例公演の準備です。

一月二十四日の練馬からスタートし、首都圏、山陽、近畿、中部、北陸、信越、東北、北海道を回り、四月一日の新宿で終了。

「ピート」（平石耕一・作／印南貞人・演出）は、二、三月の子ども劇場と中学校の公

演。これらの公演とかぶりながら、四月東京公演「プラボー！ファール先生！」（平石耕一・作／杉本孝司・演出）の稽古スタート。この作品は、平石耕一が文化庁派遣の海外研修の際、九四年十月にロンドン、コートヤードシアターで英版を上演。好評を博しました。今回は待望の本邦初演！

四月十四日（日）前進座劇場、十八日（木）二〇日（土）朝日生命ホール、二十一日（日）練馬文化センター小ホール。

学校公演は「あわて幕やぶけ芝居」東京空襲三・一〇」と「子供の時間」の二作品。

(177) 東京都練馬区下石神井四一九

TEL 〇三三九九七四三四一

劇団弘演

九五年内に九六年のレポートリーをの手にいたしましたが間々ならずレバが決まらないまま年を越してしまいました。とりあえず昨年の取り組みを報告しておきます。前号でお知らせした秋の公演「ブンナよ木からおりてこい」は三ステージ一〇〇名で念願の一〇〇〇名の大台に乗せることができました。青森県民文化祭参加作品ということで弘前市内はもちろん周辺の町村の学校にもチラシを

入れ合計二五〇〇枚のチラシを配布しました。また地元マスコミにも公演の特徴を掲載したニュースを送付し小さい記事を含め数社に紹介掲載してもらいました。「大人と小人で創り親子で見る」をキャッチフレーズにどう地域にねざすのかを前面に出して制作活動を行いました。上演の結果制作意図をくんでもらい地域にねざす一つの方法として評価いただきました。今年はこれをどう発展強化していくのが課題になっています。企画性を持った制作活動が重要になって来ています。と言いつつ今年のレバは……ま、ガンバロウ！

おりました。構成力のシッカリしたドッキリと人間が描ききつてある戯曲であったのが幸いだったのかも知れません。今年には二月に定期総会を開き、新たな思いで、創造活動をもって出発です。元氣の出る芝居創りをめざして頑張っていきたいと思っております。よろしくおねがいします。

さて私共、麦の会は昨年一〇月に「獅子（三好十郎作）の公演を上演しましたが、思いまかぬ大好評でホットしているところで、稽古期間中、故障者続出で公演もあやぶ

ましたので、何とかきりぬけて肩の荷が

昨年、一九九五年は、私たちにあって、波瀾に満ちた一年でした。大震災による幕あけ。家が半壊した者、避難所暮らしを余儀なくされた者も……。プラス公演の延期、ets…それでも人がでなかった事が幸いでした。その節は、皆様の温かいご支援、ありがとうございました。

招いたこともあり、役者たち、団員の成長を促した作品でした。

キャストインダは組めません、そこで全り演の各集団にはなにかと、ご依頼するようになる事と思いますが、其の節は勝手ながら協力程を宜しく願います。

そんな中でも、結成二十五周年という記念の年でもありました。六月に二十五周年記念第一弾公演「いま生きる」を盛況のもとに終え、十月には、第二弾、井上ひさし作、橋崎英三演出の「マンザナわが町」を行いました。「マンザナ」は、女五人芝居、かなり難しい芝居だといわれながら、また外部から演出を

の幕あけです。市内の公民館をジブシーのごとく渡り歩いてきた私達は、ようやく安住の地を手に入れる事ができました。練習はし放題、装置も作り放題、朝まで宴会し放題の、すてきなお城です。夏には、稽古場公演も予定しています。その前に、四月二十六日、二十七日は、尼崎ビッコロシアターで、自主公演をひかえ、活動中です。

一九九六年、お互い頑張りましょう。

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

新住所

一五 川崎方

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

TEL/FAX

TEL 〇三三三三〇九一八六三三

また、「センボ・スキハアラ」リトアニア公演以来交流の始まったカウナス国立ドラマ劇場の招聘で山田昭一、大峰順二が訪れ、それぞれが現地のスタッフ・キャストで「愉快なおばあさん」「ナラヤマ」の二作品を演出し、「日本の夕べ」として上演。大きな成功と貴重な体験を土産に、五五日間の滞在を終え、十一月下旬無事帰国しました。（井上）

他の劇団と合同で阪神大震災チャリティを逸早く企画をしたりする者が出たり（震災直後の二月）、文化団体法人化支援公演参加をしたり、このところ支木はなかなかスマートじゃないかな。

そして、荒波を乗り越え今年も初優勝のさしが見えています。青森演劇鑑賞協会の例会になるのです（七月）。金星。作品こそ決まっていますが、こんなチャンスはめったにないと同奮起しています。さらに劇団総会を終え心機一転、それも役者からの立案で、すぐアトリエ公演で「ボンチ絵」もやろうというにもなり、秋を含め年に三つもやっで、ご同輩、白髪がふえませんか、心配になりけり。地元出身力士「舞の海」のように、めまぐるしく舞いながら、支木健在。負けてられっかい、この野郎。（伊藤）

TEL・FAX

〇一七七七七四六七七

釧路演劇集団

今年も、北海道演劇祭が当釧路市で開催されます。十月十日～十三日までの四日間熱く燃えるような演劇祭にしたいと地元劇団を中心に準備している所です。

FAX 〇六一六六一二〇六〇

劇団たけぞ

昨年は結局「水仙」一本をもって、国民文化祭と地元での公演を行いました。

でも十一月二十六日の公演は、「劇団すがお」を中心として桑名市で開催された「韓国文化祭」に招聘された「劇団馬山」に武生へも来て載き「第三回武生国際地域演劇祭」として実施しました。当日は「劇団すがお」から加藤武夫さん「上野市民劇場」からは西出實さんが駆け付けて下さり、韓国の若者達のパワーに圧倒されながらの楽しいものとなりました。

この演劇祭に招聘した劇団は今までヨーロッパの仲間ばかりでしたので、今回「近くて遠い国」といわれ、戦後五〇年たつて未だに信頼された隣人関係を築く事が出来ないでいる（この半月前まで江藤総務庁長官の問題発言で両国はギクシャクしておりました）韓国の仲間を迎える事が出来たことは大変意義のあるものでした。

私達はこれを一時的なものとして終わらせるのではなく、継続した交流の中から今後一層の信頼関係を積み重ねてゆこうとの合意を得ました。その始めとして今年の十一月彼ら

地元四劇団、北海道内七劇団の十一劇団の上演予定。演劇評論家、衛紀生氏（四日間）他を招いて「演劇によるまちづくり」をテーマにシンポジウム、また観客のためのワークショップ（演出家松本修氏、劇団MODE、交渉中）を予定しています。

現在、二月二十一日に第一回実行委員会を予定し、何とか市民各層へ働きかけ一五〇名の実行委員を組織していきたいと必死に取り組んでいます。多くの市民が実行委員会に参加していただき、ここで多くの出会いを作り、新たな文化を通してのコミュニティの復活を図っていきたくと考えています。また、今まで演劇を観た事がない人へこの演劇祭を広めていくことにより、演劇の持つ「人間を描く」という優位性を発揮していきたいと考えています。

十月の釧路は、気候が大変良く、雄大な釧路湿原に映える夕焼けは絶品です。ぜひ、多くの全国の仲間が参加していただきたいと考えております。（尾田）

TEL 〇一四五一五二一七八四六

関西芸術座

一月五日、劇団始会で新年を迎える。十六

日には、仮決算及び九六年度予算を中心に財政総会。そのための各部署の会議と、厳しい劇団財政を反映して新春気分がけし飛ぶ。

二月三日、日頃お世話になっている人々をまねいての、恒例「ざ・びらき」は、劇団員自慢の手料理と出し物で、約一〇〇名の来賓と楽しく語り会う夕べがもたれる。

公演では中学・高校作品「蕪いng」「奇蹟の人」の巡演班の再稽古。三月一～三日、大阪新劇合同公演、関芸プロデュースによる「カッコーの巣の上を」を、東京演劇アンサンブルの広渡常敏氏を演出にむかえての稽古が連日。他に劇団の若い層の自主公演の稽古と、二面の広い稽古場は忙しい毎日である。

三月初旬から約二週間、田辺聖子作「姥ざかり」公演が、東海地区の各市民劇場へ巡演。また、三月三日には、附属演劇研究所の四十期生が入試予定。今年度は四十名以上を目標に取り組んでいる。

なお、昨年十一月、スタジオ公演「永遠の青空」砂本量・作。松本昇三・演出は、今年度大阪新劇フェスティバル、女優賞を「菓子」役の藤田千代美が受賞。

TEL 〇六一六六一二二二二

の主催する演劇祭に招待されました。

しかし、私達はこの直前に今年五月のカナダ・ハリファックスでの「リヴァプール国際演劇祭」に招待され、参加する事を承諾しておりましたので、今年も二つもの海外公演を抱え込むことになりました。

更に今年も紫式部が父藤原為時と共に武生に於て千年になるという事で、十月には市を上げての色々なイベントが行われます。私達もこれに合わせて数年前から脚本を委嘱するなど準備を進めて来ておりました。これも今更に取り止めというわけにもゆかず、今劇団ではスタモンの議論を展開しております。

TEL 〇七七八一三三〇一四七

FAX 〇七七八一三三〇四九五

劇団京芸

昨年の第二国立劇場の開前公演に於ける藤田芸術監督の暴言に毅然たる態度で対抗した木村光一会長をしっかりと支え、今年になって出されたアープラン二十一に対しても、官僚的な押しつけを許さず対案を示して交渉する日本劇団協議会は頼もしい限りです。

〇「蠅の王」（ゴールデンディング原作・藤沢薫演出）―秋田県高校・神奈川県おやこ劇場・

全国高校巡演中。

〇「白いライオン」（岡部耕大作・藤沢薫演出）―全国おやこ劇場・近畿小学校巡演中）
〇「そうべえごくらくへゆく」（田島征彦原作・つげくわえ演出）―全国おやこ劇場・小学校巡演中）

〇京芸俳優教室第二〇期終了公演
「スナフキンの手紙」（鴻上尚史作・藤沢薫演出）四月五・六・七日・於DDシアター（稽古場）

〇京芸小劇場
「国語元年」（井上ひさし作・平岡秀幸演出）九月二十～二十五日、於DDシアター。

住専処理問題で国民の怒りが渦巻く中で、京都は民主市政実現の期待をこめて市長選がはじまります。

TEL 〇七五一六三二二六〇九

八四八〇

青年劇場

青年劇場では二年に一度、小劇場公演に取組むこととしており、本年はその年にあたります。今回は一本を十日間続けて、二本立てを十日間、合計三本の芝居を稽古場で上演することになり大変あわただしい年明けとな

りました。

作品は「死と乙女」(アリエル・ド・フア
ン)作・青井陽治Ⅱ訳・松波喬介Ⅱ演出、二
ノ(二ノ十二)と「剃刀」・「殺意」(「剃刀」
・中村吉蔵Ⅱ作・西沢由郎Ⅱ演出、「殺意」
・飯尾憲士Ⅱ原作・瓜生正美Ⅱ構成・演出、
二ノ十六ノ二十五)です。地下の稽古場は座
席が約九十席、小じんまりとした空間の独特
な雰囲気の中でご覧いただけると思います。

並行して稽古に入っているのが三月の特別
公演「鮮やかな朝」(森脇京子Ⅱ作・中野千
春Ⅱ演出、三ノ六ノ十、シアター・サンモー
ル)です。(注)日本劇団協議会主催で、青年劇
場が製作のこの公演は元従軍慰安婦が主人公
のお話で、出演者が全員女性です。さらに
並行してその公演中「キッスだけでいいわ」
が、九演連統一例会で四月中旬まで派遣しま
す。五月は第六十六回公演「BOKU」(高
橋正嗣Ⅱ作・松波喬介Ⅱ演出、五ノ十七ノ十
九、前進座劇場、五ノ二十一ノ二十七、朝日
生命ホール他)を予定しており終演後、三作
品(「キッスだけでいいわ」、翼をください
い)、オミれさんが行くが)が学校公演な
どで、近畿、東北、北海道へと出かけていき
ます。目いっぱい忙しい活動が続きます。

この様な公演スケジュールの中、更に今年
は二年に一度の劇団総会の年でもあり、全員
がそろそろ七月末に行うことになっております。
次回にでもご報告できると思います。

(160) 東京都新宿区新宿二一九一〇〇
間川ビル六F 青年劇場 片桐千津子
演劇集団和歌山
脚本が、ない！
傑作戯曲は演技がつかない、大作は
人数が足りない、少人数ではチケットが売れ
ない、深いものは難しい、軽いものでは物足
りない、創作するには時間が足りない、とい
うことで、春の公演の脚本が決定せず、脚本
選びに四苦八苦しています。思えばわがまま
な悩みではあるのですが、現在の劇団は中途
半端な時期にさしかかっているようです。容
赦なくすきま風、というより、通りを吹く風
がそのまま入り込むような稽古場ですが、と
にかく、体を動かさし、声を出し始めました。

(幸)
(641) 和歌山市和歌浦南一ノ一四
TEL 〇七三四一四四一四三三七



劇団はぐるま
雨にたたられながらも、野外公演「信長天
下を取る」を、無事上演することが出来まし
た。十月一日のゲネプロは雨のために地元招
待を取りやめ、近くの体育館を借りて通し稽
古となりました。二ノ四日の期間中、晴れた
のは三日だけで、二日も四日も本番の直前ま
で雨が降り続けました。それでも、開演に合
わせるように雨も上がり、三ステージ、五、
二四八人の観客動員となりました。
二月公演、いずみ凜作「ぼくの鳥あげる」
の稽古は二回中断されました。十二月三日の
「ビーターパン」輪之内町移動公演のための
稽古と本番。そして、正月です。この中断を
演出は、「(稽古の)一幕、二幕、三幕」と
呼び、緊張がとぎれないように、そして、休
み明けに稽古の質が落ちないようにと、注意
していました。そして今、フィナーレを迎え
ようとしています。実は今日、二月九日は初
日なのです。チケットの売り上げも順調で、
数ステージを除き、満席となっています。キ
ャスト二六人がほとんど二役、三役をこなし、
暗転も多い大変な芝居ですが、小さな御浪町
ホールで、息遣いの伝わる舞台上に仕上げたい
と思っています。(内田 薫)

(500) 岐阜市西野町一丁目
TEL 〇五八一二六五一八五二二

劇団埼玉

昨年十一月四日(五日、浦和市民会館で、も
うひとつの教室——夜間中学)の公演を無事
終えることができました。二ステージ、約八
百名の皆様にご覧いただきました。主人公イノさ
んのキャラクターの面白さと、夜間中学の存
在そのものに、観客は多いなる賛同と支持
を示してくれました。この公演を通して得た
「埼玉に夜間中学をつくる会」の仲間達との
交流は、お互いに活動の輪を一つ広げた事
になり、今後も大切な接点として協力し合っ
てゆきたいと思っています。

さて、新しい稽古場に引越して来て、早や
半年が経ちました。まだまだ万全とは云えま
せんが、やっと落ちついて稽古ができる状態
にまで漕ぎつけました。そんな中、関東プロ
ダクションの「新春の集い」を是非、埼玉の新しい
稽古場で、という要望が寄せられ、今その準
備に追われているところです。

埼玉は来年創立三十周年を迎えます。

今年一月、劇団総会を持ち、三十周年に向
けての討議を重ね、今年から向う三年間の計
画を出しました。レパートリーも創作を中心

に九八年度迄は決まり、その第一弾として
「今どき現代史講座—ブロンクンファミリー」
が決まりました。

作者の佐藤逸平は、古い方々なら御記憶に
あるかと思いますが、埼玉が結成される以前
の、「埼玉県南演劇集団」の旗上げ公演「石
もまた叫ぶ」(六六年)の作者であり、実
三十年振りの復帰作品となります。戦後五十
年の思いを今風に描き、我々の置かれている
現代とは何かを問う作品です。芝居は喜劇仕
立に書かれており、苦手の喜劇を埼玉がどこ
までやれるか乞う御期待といったところです。

次回公演
「今どき現代史講座
—ブロンクンファミリー」

作 佐藤逸平/演出 川村武夫
日 時 九六年五月二十五日(土)
P・M七時〇〇分
P・M一時三〇分
会場 浦和市民会館ホール
会 場 埼玉県上尾市日の出町四一五〇八

(362) 埼玉県上尾市日の出町四一五〇八
TEL 〇四八一七七七一四四三〇〇

京浜協同劇団

新稽古場が完成してから一年。その活用方
法を考えているところですが、地域の人々の
交流の広場として生かす方向が少しずつ見え
てきました。

昨年六月から七月にかけての柿落とし公演、
川村光夫作「がんとり」では二週間にわたる
ロングラン公演ができたし、近所の人たちも
かつてなく見てくれました。ごぜ唄の竹下玲
子さんを招いての公演も百八十名の観客で足
の踏み場もない盛況ぶり。「こんな所でござ
唄が聴けるとは思わなかった」と好評。また、
劇団員瀬谷やほ子の個人企画・勉強公演、別
役実作「トイレはこちら」も、方言指導の大
原穂子さんが「方言で語る憲法九条」をもっ
て友情出演、近所の人々が手芸品や木彫り像、
絵手紙、生き花などで友情展示してくれるな
ど、新稽古場ならではの企画ができるように
なりました。新人たちもすでに二回の公演を
やったほか、他の団体も稽古場を活用してい
ます。

さて、次の公演ですが、三月末には川崎市
教育委員会主催の第二十五回かわさき演劇ま
つりに、栗木英章台本の「モモ」を持って出
演します。川崎演劇塾、初参加の劇団行動座

との三劇団の合同公演で、演出は演劇塾の団のぼる氏です。

六月下旬には、作者、演出、制作、主演とも女性陣というわが劇団としては珍しい企画で、木庭久美子作「父が帰る家」を室野定子演出、瀬谷やほ子制作で稽古場公演をやることになりました。

そして、秋には三年がかりの団内創作劇「のむぎOCS物語」(仮題)を山本忠利作、中沢研郎演出、堤次郎制作で上演する準備をすすめています。

(211) 川崎市幸区古市場二一〇九

TEL 〇四四一五一―一四九五―

FAX 〇四四一五三三―一六六九四

劇団未来

八九号の通信、欠礼して申し訳ありません。

劇団未来は、第四十四回公演・井上ひさし作・寺下 保演出「雪やこんこん湯の花劇場物語」、九五年十一月十八日(土)〜十九日(日)、二十三日(祝)〜二十六日(日)の十ステージを劇団未来ワークスタジオで上演し五五三人に観ていただきました。

井上ひさし作品とは、今までに「泣き虫なまいき石川啄木」「きらめく星座」と取りく

みました。今回は①大衆演劇の人たちの日常身についた「芸」の下地が必要であること、②稽古場公演という狭い空間をどう生かせるかという危惧がありました。

しかし、劇団の日常活動を少数の劇団員が支え、上演の段どりが決ってから、他のほとんどがやっと動き出すという弱点を持つ中で、この作品の中村梅子一座や小屋側の人たちと重ねあわせ、劇団員の結束と今日演劇をしている意味を考えたいと、あえて挑戦したのでした。

ベテラン・中堅・新人がそれぞれ、大衆演劇に姿をかりて、「今を生きる」私たち自身を笑いと哀しみの中で表現することができ、ある程度の共感を得てホッとしているところ

です。やり終えて、私たちの「芸」と「創造姿勢」を確立するためには、各人が生きてきた体験を、削りだそうとする舞台にもっと鋭く表出していく必要があることを痛感しています。

次回公演は、九六年六月四日(火)〜六日(木)の三ステージ大阪府立青少年会館プラネットステーションで行いますので、又今、その作品の検討に入っています。

「ブンナよ、木からおりてこい」

水上勉作 山田一己演出

クレオ大阪西(JR・阪神西九条駅下車)

(551) 大阪市大正区泉尾四二一七

TEL 〇六一五五三―七九九一

演劇集団石るつ

十一月十、十一日、深川江戸資料館小劇場にて、小松重男原作、笠置リエ台本、境野修次・いとうエリコ演出、「鍋屋の紐はなぜ朱い」(三ステージ)を上演した。

小松文体をそのまま、生かし、小説を地のまじりにした様な台本。主人公二人のみが普通の衣装で、他は黒衣のみ、観客の見える位置での楽器を奏で、衣裳を変、語りもやる、一人何役もこなす。舞台はシンプルそのもの。

一月十八、十九、二十日、(三ステージ)『着い空をしてブギウギ』(作・境野修次/笠置リエ、演出・境野修次)で上演しました。これは、第五回東京地域劇団演劇祭参加(東京芸術劇場)でありました。

九六年七月十二、十三日・第四十二回公演「飯田」大戸ドケチ伝』矢野喬・作/境野修次・演出で、深川江戸資料館小劇場で公演します。(135) 江東区森下五十一一八・吉川複写工業棟内)

座付作者・和田澄子は、代理母から生れた青年を描く創作に入っていますが、第二稿の半分が仕上がった所で、「このまゝ仕上げたい」

でも、今までの殻を破る作品にはならない」と、構成や人物の堀りさげを一からやり直すことにしたようです。

けじめのつかないこういう時代だからこそ、創作劇をつくりだしていかなければならないのですが、その作業は大変です。

(536) 大阪市城東区成育一四一二五
TEL 〇六一九三九―五七七七

劇団静芸

◇昨年十一月の県芸術祭招待公演「花咲くチエリ」公演は、劇団必死の取組みで、短期間の稽古を乗り越え、一定の水準の舞台を生み出すことが出来、次につながる公演として終ることが出来ました。製作的には若干の赤字を出しましたが、かえってこのことにより、劇団は普及について真剣な討議を重ねることになり、プラスになるように、次の公演の準備に入りました。

◇今年六月一日(土)市文化祭参加、小島真木作「手のひらの上仔猫」の公演にむけて、稽古に入りました。劇団としても、創立以来第百回目の記念すべき公演を、私達の座付作

短 信

いつも「演劇会議」を送っていただき、ありがとうございます。

十二月十四日、誌代振込みました。引き続きよろしく願います。

現在わたしはJR新潟支社の社員ですが、国労の組合専従をしています。一昨年の第四十回「国鉄演劇祭」では、亡くなられた萩坂先生に来ていただいて、大変お世話になりました。萩坂先生のきびしい批評にはびっくりしましたが、とても勉強になり、一生忘れることはできません。同行していただいた奥様とともに、あらためてお悔やみと御礼申し上げます。

国鉄演劇は故八田先生、宮本先生にご指導いただき、現在は大橋喜一先生に指導していただいています。国鉄時代から国労には「演劇サークル」と「劇作グループ」がありまして、OBには岡山の岩城さん、米子の宮倉さん、議長団の梶さんなどが活躍されています。新潟ではJR労働者を中心に、組合活動の合間に集会等を利用して公演を行なっています。

北海道・四国・九州の三島JRが運賃値上

家小島真木の創作をと、「手のひらの上仔猫」の再演(一九九三年初演)に決定しました。初演は県芸術祭賞を授賞し、今はなき萩坂氏も観劇して下さって、好評であった作品です。今作家は改訂に入っており、今という時代を真正面から、みずえたこの作品の上演成功に、劇団は全力をあげてとりくみます。

(420) 静岡市昭府町一〇一〇三三

TEL 〇五四一―二七三三―〇六〇四

劇団きつがわ

寒さきびしき冬と思いきや、二十度近い陽気になったり、今度は大阪で大雪が降り、高速度路が全面通行止めになると、わけの分からぬ気候ですが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。

我が劇団きつがわは昨年十二月六日(水)七日(木)とクレオ大阪西での「また逢う日まで」の公演を無事終え、一月二十八日(日)劇団総会を行い、春の公演のレバを決定しました。結果団員が少ない中、出演者を大々的に公募して取り組んでいるところです。日程は左記の通りです。

大阪春の演劇まつり参加

七月六日(土) P.M.六・三〇開演

七日(日) P.M.二・〇〇開演

けをきめ、国鉄分割民営化の最大の理由にしていた「赤字」は増え続ける一方です。ここに来てまたしても分割・民営の矛盾が露呈してきています。国民みんなの共有財産であった国鉄を取り戻すためがんばりたいと思います。

「演劇会議」のますますの発展を期待して
います。

一九九五年十二月十四日

新潟県新発田市緑町三丁目一二の二

松村 隆

全リ演のみなさんこんにちわ。山口県の「演劇サークルトラム」です。トラムはサークルなので、劇団とか演劇集団とかとはちょっと毛色が違うかもしれません。もちろん、演劇を作る情熱や、作品への責任感のみなさんに負けないつもりです。でも、やっぱり技術はまだまだです。

ところで今回はトラムの名物について書くかと思っただけです。そこでいろいろ考えたんですけど、やっぱりトラムで誇れるものならこれでしょう！ということで、トラムのリーダー、事務局長の藤原重孝について書きま

劇評

広島友好・作 品川三男・演出

演劇サークルトラム『犬鳴の滝』

はた・けいすけ

山口の仁保地方の「犬鳴き谷（滝）」にまつわる昔からの言い伝えは、一、二、三の説話として残されている。

ある年の暮れ、市という名の犬を手引きにした、座頭が滝壺のある難所を通り過ぎようとして、岩苔に足を滑らせ真逆様に滝壺に落ちてしまった。座頭の忘れたバチをくわえて帰ってきた市は、ことのすべてを悟り、その悲しさのあまり滝壺の側で力尽きるまで幾日も泣き続けた。その鳴き声は谷と谷、山と山にこだまし、遠く仁保地の里、里までも聞こえてきたという。

トラムの舞台「犬鳴き滝」は、じつは、この旨しい座頭が、娘と思って手引きしてもらっている市は、人間ではなく犬だった。その設定のもとに、この地方に伝わる「犬鳴きの滝」の由来に迫っていく。

トラムの芝居を見るといつもそう思う。決してうまいとはいえないが、捨てたもんじゃあないぞ。今度の「犬鳴き

トラムは創立以来、今年が三十四年目です。藤原はトラムに三十年在籍しています。今や、一番の古株。トラム最年長で、五〇歳をいくつか越えています。西リ演の総会なんかで、ときどき若い人とベテランの対立なんてことを聞くことがあります。すると僕はいつも、

「へーっと思います。職場でならよくあるけど、演劇仲間では対立かあと思うのです。トラムにはそんな対立がありません。嬉しいなあ。」

きつと対立のないわけは藤原にあると思うわけです。藤原はいい役者で、いい演出で、

いいお父さんです。それでもって道具づくりはプロ級です。でも、偉ぶらないんだ。いつもにこにこしているし。だからみんな彼のこと大好きです。この前の公演で、初舞台の人が多くってみんな緊張してるとき演出（僕でした）が「でもサ、いざとなったら藤原さん（当時舞台監督）がいるから大丈夫だよ」といったときのみんなの「あ、そうかあ」という顔。みんな、藤原がいると思うと、ほっとしちゃったんだよねえ。

そんな藤原と僕の最近の酒の上での話題はというと「リアリズムはあるのか」「リアリズムとは何か」「それを、演劇でどう表現するのか」です。だいたいいつも、「リアリズム

の滝」を見てしみじみとそう思った。どだい、うまいとか、下手とか、そういう言い方が、自分でも気に入らない。しかし、ついそう言ってしまう。トラムから、芝居をするとか、案内状が届くと何もかもほっとらかして百キロの道程を車を飛ばして行ってしまおう。何でだろう。「それああんたがもと、トラムにおったから、それだけひいきにしとるからばい。素人芝居を普通の人はそんなとこまで観にはよういかなばい。」

たしかに友人芝居は（プロと言うことらしい）なにもかもがちゃんとしている。舞台装置、照明、音楽効果、舞台での演技。そのどの一つをとっても売り物として洗練されている。その点、トラムのそれぞれはどうだったんだろう。

真冬の峡谷のまっただ中、滝壺を望む断崖の上という抽象舞台としては、ひどく、美的感覚に欠ける装置だと思っただのは僕一人だっただろうか。照明にしても袖際まで明るく、ほとんどがオーブンの状態だった。にもかかわらず、と僕は思う。「サークル演劇のいいところは、その泥臭さにあるんだよね。観客にとっても親近さでも言うのかな、お互い仲間同士という。もちろんそこに安住してるといい芝居はできんけどな。」お互い泥の臭いまでかきあえる。嘘う？だが半分は本当かもしれん。

芝居の終わり近く、血まみれになりながらバチをくわえて帰ってきた市が、待っているはずの座頭がいないので罵



る場面がある。「このうちが嫌いになっていってしもうたか。一人で行ってしもうたか。お前様も所詮人の子、この世で一番恐ろしい人の子か。」市は僕に向かって罵る。明らかに舞台をはみ出していると思ひながら、僕は思わず、ギョッとしてしまひ狼狽える。

彼らは決して舞台で芝居を演じようとはしない。彼らは、自らの日常生活ではなかなか生き得ないものを舞台上の役を通して生きようと試みる。その生への願望や情熱、舞台的行動は、時たま台本や舞台からはみ出してしまふ。いつの間にか彼らの日常の生き様そのものになってしまふ。そこに予想外の感動が生まれる。そこがまた何ともいえない魅力なのである。

劇団コロロ『だれが、石を投げたのか』

もつと感じさせてくれ……

楠本幸男

十五歳の少年トーマスは、成績は抜群であるが、生まれつき足が不自由なため、何かにつけひがみがちである。父は建築家として成功し、金銭的には不自由していないが、愛人がいて帰るのが遅い。母親の顔色はさええず、時としてヒステリックである。トーマスは姉のエリザベートを愛し

は全体がとても説明的に感じた。たとえば、トーマスがスージーに心を寄せるようになるきっかけとして、トーマスが転んだときスージーが手をさしよるシーンがあり、そのあとトーマスによって彼女がティッシュペーパーで泥をふいてくれたことが語られる。これは「説明」であつて、観客の私は、トーマスがその時彼女にどのように心がときめいたのかを今までに聞いたことのない言葉で聞きたい。今までどの俳優がやったことのない演じ方を見せて欲しいのだ。すべての恋愛はありふれたものだが、当人にとってはかけがえのないものだから。また、フリーダーの死が発見されたあと、パパがトーマスの部屋に来て「パパが間違っていた」と詫げる。息子の死によって家族を省みず不倫をしていた自分が間違っていたことに気づくというのは当然すぎるくらい当然な筋書きだ。観客の私は、家族を愛しながら妻以外の女性を愛してしまふ人間の矛盾する姿、苦悩する姿こそを見てみたい。この家の人々はみな矛盾をもって生きている。家族を愛しながら成績の悪いフリーダーを傷つけてしまふママ、やはり家族を愛しながら、もはやこの家にいるのが耐えられなく感じ始めている姉のエリザベート。人に愛されたいと思ひながら、周囲の人間に無関心でいたトーマス、それら矛盾した人間の姿を丸ごと見てみたいと、私は劇場に通ふ。

十一歳で将来のコースが振り分けられ、義務教育期間に

ているが、彼女は早く家を出て行きたがっている。弟のフリーダーは花を愛する優しい少年なのだが、友達がいな上、成績が悪く母親の怒りの対象である。トーマスの唯一の楽しみはおじいちゃんの家へ行くことだ。一人暮らしのおじいちゃんはいつもトーマスを暖かく迎えてくれる。

やがてトーマスは同級生のスージーに心ひかれるようになっていき、彼女に勉強を教えるようになる。彼女が勉強ができない悩みをもっていることを知り、次第にトーマスは周囲に目を向け始める。

そんなある日、弟のフリーダーが学校から帰ってこない。学校に電話をすると、彼はその日試験で悪い点を取り落第が決定したとのことだ。懸命に行方を探すが、フリーダーは二日後、首吊り自殺をしているのが発見された。彼の死によって家族の一人一人が、自分自身に向かい合うことを余儀なくされる。フリーダーの死の原因が母親にあると責めていたトーマスも、スージーによって、彼自身にも責任があつたことを気づかせられる。

原作はドイツの児童文学作家ミリアム・プレスラー、脚色・演出はふじたあさや。原作はトーマスによって語られる一人称形式の小説だが、舞台もトーマスの語りを入れながらほぼ原作の流れに沿って進行していく。叙情や説明を排し、短いシーンと簡潔なモノローグによって観客のイメージを膨らませていく演出意図だと見受けられたが、私に

落第があるなど、ドイツの教育事情も、子供たちにとっては日本以上に厳しい面もあるようだ。崩壊寸前の家庭、落ちこぼれ、少年の自殺など、この作品の世界は我々にもあまり身近な世界だ。しかし、障害者の視点からというところが少しユニークかとも思うが、原作はそれほど思春期の心情をみずみずしく描いているとも思われないうし、深く人間を描いているとも思われないう。劇化にあたっては脚本、演技の両面からもつとふくらませる必要があつたのではないかと。主人公のトーマスはほとんど出さずばり芝居と語りを連続してこなさねばならないという過酷な役だが、語りの部分はただ単なる説明や解説に終わらせないで、人前では話さない心の奥底の声として演技に変化をつければ、人間が立体的に描けたのではないかと。「僕も石を投げたのではないか」というこの芝居の心臓となる台詞は少し乱暴過ぎはしなかつたか。

おじいちゃんの村上嘉利、兵役の代わりにボランティアでトーマスの運転手を務める青年の福寿淳が存在感があつた。パパ役のベテラン、恒川勝也は脚本の隙間を埋めるべく懸命に演じていた。しかし、この脚本で「パパ」という人間を十分表現するには無理がある。多くの若い出演者たちの真摯なエネルギーが確かに感じられた。が、演出はこれらのエネルギーと十分に格闘したのだろうか。

なお、この作品は大阪新劇フェスティバル作品賞を受賞

(一月十九・二〇日 近鉄小劇場)

「五十年目の戦場・神戸」

神戸学院女子短大教授 阿部好一

阪神・淡路大震災から一年余り。あの大地震を描いた朗読劇「五十年目の戦場・神戸」が上演（一月二十七・八日神戸シーガルホール）された。主催は「神戸をほんまの文化都市にする会」（代表・平田康）

自身被災者でもある詩人車木蓉子の詩の間に、消火や被災者の救援に奔走した消防士、医師、看護婦、避難所になった学校の教員、自治体職員、そして被災者たちなど多くの証言が挿入される。構成・梶武史（四紀会）、演出・合田幸平（どろ）、音楽（小室等）。

これらの証言は人間のあらゆる感情の赤裸々な噴出である。たとえば、消防士は崩壊した家屋から老夫婦の救出に成功して人々から感謝されるかと思えば、生存者救出に回らなければとせりながらも崩壊家屋の下敷きになった遺体搬出を遺族に迫られ板ばさみになってなやむものもあるし、消火栓から水が出ず遠巻きに市民から罵声を浴びる人もいた。

それにしても劇のなかで朗読される固有名詞、その多くは地名なのだが、それらがこれほど生々しく現実感を以て迫ってくるとは思ってもよらなかった。私自身は大阪に住んでいるが勤務先が神戸市内だから、市内外の地名はよく知っている。だから、それらの名前が挙がるたびにそれらの町の風景を頭に浮かべた。時には地震による惨状を知っている場所もあるだけに、これは強い印象を私に与えた。難や東灘の地震前の平和な住宅地だったころを思い浮かべたり、長田の大火のあとの一面の焦土を思い起こした。そのたびに身がひきしまる思いがした。その意味でも、私にとって上演時間二時間は決して長くはなかったが、土地不案内の遠隔地で上演される場合はもう少し刈りこんだほうがよいかも知れない。

私が見たのは二日目だったが、客と舞台に独特の雰囲気が生まれていた。出演者にも観客にも震災の被災者が多数いただろう。だから舞台が進むにつれて出演者も客席も異様に緊張していった。同時に一方では互いに残酷な経験をともにし、なおいま生きている者同士の強い一体感が双方を包んだ。

私はもと新聞社の演劇担当記者だったから、仕事として演劇を見始めてからでも三十数年になる。その間すぐれた舞台も数多く見たが、今回のように舞台と観客が濃密な一体感で結ばれたのを見た経験はそれほど多くはない。

その凄まじいまでのリアリズムは聞くものを圧倒する。詩の背後から重い地鳴りが響いてくるようだ。これらの証言は詩の世界をさらに豊かに広げてゆく。一方、詩はともすればバラバラに拡散しがちな証言を一本の糸につなぎあわせ、その深い意味をさぐり当て観客に伝えてゆく。詩と証言との結びつきは予想外に大きく広がりのある舞台空間を作り上げた。

出演者は男性十四人、女性二十六人。男性の一部に地元劇団のメンバーが加わっているが、他は一般公募の市民たちである。朗読ボランティアの人もいるが、全く経験のない人が三分の二ぐらいいると言う。サブ・タイトル通り「市民がつくる朗読劇」である。

黒いカーテンで区切られているだけの飾り気のない舞台。トレーナー姿の朗読者たちが整然と動く。音楽はギターだけの演奏である。朗読そのものも、劇団のメンバーたちがや、ドラマチックに読む部分はあったが、全体としては淡々として抑えている。経験の有無は表には出さず、アンサンブルもとれていた。その簡素で率直な舞台作りが劇の内容にふさわしかった。ただ、詩と証言はもう少しはつきり区分されていてよい。音楽が照明か、いや朗読者のわずかな動き一つでもそれは可能であろう。なにかそのほうが、詩と証言の相乗作用のごときものももっと出てくるような気がするのである。

朗読された避難所住民の証言のひとつが心に残っている。深夜に、大阪から見ず知らずの夫婦が子ども二人を連れて訪ねてきて『花なんか置いてはいけませんか』と言い、黄色いチューリップを十七鉢も車で運んで来た。「そして『花は自分のために咲きますが、みなさんは自分のために生きて下さい』と言われました。身につけるものより何より花を持ってかけつけてきた母親の心に打たれました。みんな水をやりに、長く長く咲かせました。」とあった。

震災という緊急事態における芸術や文化の有効性が問われている。おそらく避難所に咲いたこのチューリップのごときものが芸術や文化を求める心の芽生えであろう。この朗読劇もまた一輪の大きなチューリップであると思う。震災の語り部を志す主催者の心意気を感じた。

だいこん座二〇周年記念公演から

「ワツパー揆」

劇団仙台小劇場 石垣政裕

おおよそ徳川の世から明治への移行は、必ずしもすぐに「御一新」されたわけではなかった。明治の初期、政府は版籍奉還、廃藩置県、地租改正と矢継ぎ早の制度改革を押し進めていくのだが、改革そのものは旧領主を中心とする

幕藩体制をそのままひきずっていかざるを得なかった。支配される農民にとっては、「御一新」という言葉が現実にはなにを意味しているのか見当もつかず、「天皇」とは何者なのかその存在すら知るものなどなく、戊辰戦争に破れ、経済的に破綻を来していた旧藩主・新知藩事体制の中の下剋上という意味でしかなかったと考えることも可能である。この時代、旧士族（旧藩主松平権十郎）が酒田・鶴岡の一部特権商人層と結びついておこなった経済支配は明治政府の要人と通じながら、この農民をいっそう苦しめるものであった。

「めじゃね話だのう」

今年二〇周年を迎えた鶴岡の劇団・だいこん座の記念公演「ワッパ一揆」も、苦しみあえぐ農民の姿を描くところから始まった。すでに藩禄を失った士族たちの開墾費用まで農民の租税によって支払われている。田畑を手放し、娘を売し、村を逃げ出していく者も続出した。

「おらだ百姓どごいだけいじいめれば氣いすむんだが……」

明治政府はすでに一年も前から米の代わりに金で納める方針を打ち出している。しかし酒田県はこれをひた隠し、特権商人に米を買い受けさせた。米の値段が上がればあがるほど農民から納められた米と政府に納める金額とから、莫大な利益が転がり込むといった仕掛けである。このこと

てまた、ワッパ一揆が「暴動」でなくむしろ理論闘争であるとすると佐藤誠朗らの分析と同じ地平でとらえている。

それを認めた上で、一夜の舞台の観客としては、どこかに凝縮したほとばしりを期待するのである。そのためには、唯一、人間の心理を描いた若い農民「徳治」と「豊江」（佐藤晃と佐藤直美、ともに好演）の葛藤と交流をもっと丁寧に描くべきではなかっただろうかと思えるのである。貧困がゆえに恋人を奪い去られるかなしさ、立ち上がらない青年へのもどかしさ、一揆の隊列に加わったときの二人のたくましさ……。

徳治「百姓はふまいればふまいるほど強くなる」

豊江「まるで麦見てえだ」

徳治「んだ、麦みてえだ。その上ただつよくなるだけでねえ闘ってみて始めて世の中のことをわかる、社会のごとわかる。」

言葉に頼ることなく、各場面で深い意味を伝え、それを重層化していくためにもっともつと俳優もスタッフも演出と同じ平面で台本の構造を明らかにしていく必要があるかもしれない。

とはいえ、だいこん座は二〇年を迎えた。若い俳優たちがしっかりと自分たちの位置を確かめつつある一方、五十嵐芳郎（主役・前野仁助役）やほんの一場面の登場だが、さすがだと思わせる小池昌子（おヨネ役）をはじめベテラ

を知った農民は怒り、徒党を組み、庄内農民一万人が蜂起する。この一揆は県政の蚊帳の外に置かれた改良派と呼ばれる一部士族を抱き込んで大きな広がりを見せていくのである。

農民の願いが認められれば「ワッパ弁当一杯分」のお金が戻ってくる。

「おらがたは、無理だお願いしているではねえ。自分がた食うだけの米が欲しいってたのんでんなです。」

佐藤治助の骨太い原作（「ワッパ一揆」）を鶴岡で二〇年、しぶとく劇団を指導してきた高橋寛が二幕にまとめ上げた。

舞台は一揆の指導的役割を担う「仁助」を追って展開され、総勢三十四人の出演者が一揆の発起から、県の弾圧、直訴を受けた中央政府のとりなしによって勝訴する一八七四年（明治七年）から一八七八年（明治十一年）までを一気に演じきった。

農民全てが主人公とする脚色・演出の高橋のねらいがあるのだろう。舞台はこの一揆に関わった農民の直系も多数駆けつけたであろう地元の満員の観客を前にしても、情にのめり込むことなく、事件の推移を淡々と物語る。この方法は、一揆の中でも、自分たちの百姓仕事を休まず、祭りをまつりとたのしみ、そしてねばり強く闘争を続ける農民の姿を描く原作の精神を汲み取る優れた方法である。そし

ンの役者が安定した舞台には欠かせない存在である。劇団の成長が伝わった舞台だった。

「んだ、くうものつぐんなは国の一番大事な仕事だ」この言葉が空虚に聞こえるほど農民は今でも翻弄されている。

一八六八年（慶応四年）から一八八四年（明治十七年）の秩父事件までに群発する農民一揆の終了が、東北や北陸、中国と巡幸などをとおして一八八〇年代後半までに定着させられる天皇のイメージの創出と相前後している。この一揆の後、天皇を頂点とする絶対主義国家体制の再編の中で、殖産興業、富国強兵の近代化の流れに農民がおし流されていったとすれば、この一揆を描くことこそが、現代の農業をめぐる諸問題を考える重要な鍵になると思われ、その意味で「ワッパ一揆」はだいこん座の二〇周年にふさわしい舞台となったのである。

演劇集団「石のつ」 「蒼い空そしてブギウギ」

劇団埼玉 佐藤逸平

今日ただいまの時間のテンポを計る物差しに江戸時代との対比で語られることがある。とりわけ、現代科学の進歩の度

合いについて、巷間耳にするのは「現代の一年の進歩は江戸時代の百年間に匹敵する」という論だ。これを世相の変化に当てはめて考えた場合、「一年が百年」という数字は、アバウト過ぎて必ずしも妥当なものであるとはいえないが、「一年が十年」という単位はあながち間違いとは言えない。とすれば単純計算でも、一九四五年度の敗戦から今日までの五十年は、五百年余という気の遠くなるほどの年月に置き換えられてしまう。飢餓時代から飽食時代へ、藁葺き家屋から鉄筋コンクリート造りへ、囲炉裏や火鉢から電気冷暖房へ等々身近に目にするものを挙げただけでもその変転の著しさの例を挙げれば切りがない。

前置きが長くなってしまった。私は、つい昨年の春から埼玉に関わるようになった演劇好きの帰り新参者。全リ演の仲間劇団の公演はおろか三十年近い間演劇観賞からも遠ざかっていった。

一月二十日、東京芸術劇場・小ホール二で「蒼い空そしてブギウギ」石るつ第四十一回公演を観賞した。四十回公演から二た月余りという、かなりハードなスケジュールの公演で——東京地域劇団演劇祭参加という事情もあったようであるが——積極姿勢に驚嘆させられる。

この「蒼い空そしてブギウギ」作・境野修次・笠置リエ／演出・境野修次は、劇団パンフレットによれば、すでに数回の上演実績のある劇団のメイン・レバの一つである

劇の進行にしたがって私は、田村泰次郎の「肉体の門」を思い出していた。この小説が読者の目に触れて、すでに五十年余が経ったと思うが、いまでもその風俗描写とそこに蠢く人間群像の強烈な生きざまが脳裏に焼き付いている。だがしかし、田村作品の決定的な弱点であり限界は、パンパンと復員兵との交情を通して示された、いうところの肉体派文学のレッテルどおりの戦後風俗に止まってしまった点である。

それに比べ、「蒼い空そしてブギウギ」はもう一步踏み込んで、天皇制の問題、アメリカ占領軍問題、パンパン（街娼婦）問題、戦後アメリカイズムなどに関わって多くの問題提起をしている点は、当然の事ながら共鳴できる。

さて、昨年は戦後五十年という区切りの年に当たって、戦争に対する歴史的認識などについて数々の議論が交わされた。そして以前から戦争体験なり戦後体験なりを語り継がなければならぬとも言われ続けて来た。そこで、長々とふれた冒頭の前置きの歴史に対する距離感というものを考えてみたい。そう言えば、おかしなもので江戸時代の庶民の姿のほうが、それが真実の姿かどうかは別として、毎日のように放映されているテレビの時代劇を通して我々にとってはすこぶる身近に感じられる。反面、それよりもかなり時間的距離が近いはずの戦中戦後の方が遠く霞み、風化されてしまっていると感じるのはなぜか。戦後は最早心

ようである、それだけに課題意識を十分に孕んだ意欲を感じさせられる舞台であった。

劇は敗戦間もない東京下町は闇市焼け跡の荒廃の極にあった時代の話だ。

明治維新以降、敗戦を迎えるまでのわが国は、国家権力が公教育を始めあらゆる手段方法によって日本の民衆のほとんどを「天皇教」の信者として唯一絶対神である天皇陛下のために死ぬ事も辞せず、これを無上の名誉と考えるようにマインドコントロールされていた。一転して戦後は天皇に代わり占領軍総司令官ダグラス・マッカーサーがわが国に君臨する。しかし、神は代われど庶民のおおかたの願い、とはいえ、これまでのありのままの姿を見る目を奪われマインドコントロールされていた残滓、為政者の策略——によって、極めてあいまいな日本の発想に基づく温情を施して貰うべく、マッカーサーに懇願する。一つは天皇の戦争責任の免除、そして日本の安全と復興のためにアメリカの最大限の庇護を乞い願うといった意図が、冒頭のスライドとナレーションによってかなりアイロニカルに伝わって来る。

そんな背景の中に浮浪児、パンパン（街娼婦）、復員兵、闇屋、占領軍慰問の楽士、カストリ焼酎の飲み屋、といった戦後風俗を象徴する群れが、空しいほどに明るい蒼い空の下に点在される。

理的にも五百年の昔に過ぎ去ってしまったのであろうか。このことを今回の舞台からも感じられた。

それほどに戦中戦後という時代は異常であり、今日の常識の物差しでは計る事のできない時代であったことは確かである。それだけに舞台は、昔こんな事があったんだ、こんな人間たちが生きていたんだ、という情報は十分に提供してくれた。だが、それだけでいいのか、という疑問が最後までつきまとった。その理由を自分なりに尋ねて見ると、為政者が国家としての戦後処理を曖昧なままにやり過ごし、現代史を歪めて正対する事を避け、加えて世間一般の常識という怪物——日本だけに通じる鎖国的常識ののだが——が、異常な時代には目をつぶり避けて生きることがこれからの賢明な生き方であるという風潮が、戦中戦後を遠い彼方に追いやってしまったのではなかったか。

そんな壁を突き破って、観客に異常な時代の異常な人間たちの、若しくは飽食の時代では到底想像もできない飢餓の中での人間の生き様を伝え、現代との共通項を見出さず方途は、自戒を込めていうならば、先にも述べた時代の点描としての浮浪児やパンパンや復員兵たちを、たんに点描に止まらずに互いが生きるために戦い、戦いの果ての熱い心の通い合いを描いてこそ普遍的な人間像に変容するのではないか、と思うのである。どうも作品論にだけ論点が偏ってしまった。

「ロシア演劇レポート 5」 モスクワの大劇場、小劇場では……

付、日本とロシア演劇 V

桜井 郁子

「社会主義リアリズム」このテーマについて言うのは辛い。初めこれはロシアに生まれた芸術創作方法の一つであったが、芸術論の域をこえて、スターリン体制下、権力闘争の具に利用され、果てはソビエトの芸術運動閉塞に力を貸してしまった、いわば汚れてしまった概念である。と、こう言えば、恐らく反論も出てくるだろう。芸術論の規定としては歴史的に意味もあったろうし、それとスローガンとして利用された事とはわけねばならない。ましてこの言葉をめぐる身を削り、論争しあった人びとがいて、のみならずこの言葉で演劇教育を受けた人びとが今も日本の演劇界の各所に居て、一言なかるべからずと想っているはずだから。

「社会主義リアリズム」は初めに書いたように一九三〇年代に生まれ、これが権力と結びつきかけは34年結成された「全ソ作家同盟」でソビエト文学および文学批評の基本的方法として規定されたことによる。20年代の文学あるいは芸術諸流派の行き過ぎをたしなめる意味をもって規定

定が、定式化の過程で、スターリン体制強化に連れ教条的に用いられ、リアリズムの一定傾向のものだけが容認され、他の一切の諸傾向が圧殺されるという結果を招来した。

作家同盟の初代議長だったゴリキイはこの規定起草に参加していたし、彼の諸作品は20年代末期の泥沼的創作論争に終止符を打つ程の力強さを持っていた。この事の演劇史的意義は変わりない。しかし演劇関係でも、この言葉の下に多くのものが失われたのは事実である。メイエルホルドだけでなく、ワフタンゴフやタイロフ等の演出の仕事は認められなくなった。モスクワ芸術座が規範とされ（けれどチェーホフさえ認められなくなり）、多くの作家・演出家は抹殺（メイエルホルド、バーベリ、キルジョンなど）され、あるいは沈黙（オレーンヤ、トレチャコフ、ブルガーコフなど）させられた。このスローガンは第二次大戦後にもジダーノフの文学整風（46-48年）に悪用され、無価値なスターリン賞作品の乱発にも利用された。

近代劇の先進国であったロシア演劇に学ぶ日本演劇界、

とりわけプロレタリア演劇運動は影響を受けた。日本プロレタリア演劇運動は28年の小山内薫の死、29年の築地小劇場分裂の前後に全盛期を迎え、40年頃には閉塞させられる。その運動の内部で「社会主義リアリズム」についての激的な論争がまき起こったのはよく知られている。けれどこのスローガンはいわば「築地小劇場」世代のみならず、その後の世代にも影響を与え、後遺症とも言うべきものがあるのも確かである。ロシアではスターリン批判後、「雪どけ」期以後は全く省みられなくなったのに、少なくとも名目的に使用される他は。

一つにはリアリズムを何かで規定しないとすまないという考えがあること。生成発展する現実と共に、生きたリアリズムを考えたいと私は思う。

第二に「スタニスラフスキー・システム」との混同、混乱があるのかも知れない。システムは、現在もロシア演劇を根底から支える演技方法である。日本では「社会主義リアリズム」とならべて論じられたり、実態のない瘦せ細った合言葉として使われた不幸な歴史があるように思われる。

（以上、少なくともロシア演劇に関わる者として、最小限書かせてもらった。元来この分野、私は不得手なのだが……）

ハロシア演劇レポートVに戻る。

モスクワも世界の他の都市同様、大して目ざましい演劇

シーズンを迎えている訳ではなかった。でも年末年始の19日間、年末の一日を除いて毎日の観劇予定をたてるのに、さ程困難もなかった。それどころか、後数日の滞在をして見たい芝居があったのに、泣く泣く帰国した次第、私の見た印象は大きくてこの小文に納まりそうもない。

生活事情を一言書いておこう。治安悪化が言われているロシアだが、モスクワの街頭は半年前に比べて明るくきれいになっていった。スーパーマーケットが増え、商品が溢れている、但しほとんど外国製品だが。「モスクワの市当局はよくやっている」と評価する声を聞いた。電化製品、衣料品、食料品何であれ、お金さえあれば不自由はない。劇場帰りには毎夜白タクを利用せざるを得なかったけれど、危ない目には一度も会っていない。

劇場はどうか。新作が少なく、休業日の増えた所もあるが、閉鎖のニュースは聞かない。この冬目立ったのは、ネオンや明るい照明付き看板を表に新設する劇場の増えた事。自由は得たが、経済は困難という情勢に変わりはないが、それなりのアビールをする元気ができたという事だろうか。

実験劇を見るのはモスクワ観劇の楽しみの一つである。到着翌日V・フォーキン演出の『変身』を観た。ある朝目覚めたら、自分が巨大な虫に変身した事を知る青年グレゴリーとその家族の悲喜劇。F・カフカの原作である。フォーキンはパートナーの建築家と共に構造的演劇空間を求め、



F・カフカ作『変身』V・フォーキン演出

60人定員の観客が、ドラマの進展と共に床まると下降するグレゴリーの部屋をのぞき込むような装置を作りあげた。透明な壁越しに見える家庭団欒風景、グレゴリーは律儀に翌日の出張準備をするが、その夜の悪夢はとてつもない

ものだった。目覚めた彼は四肢が変化し、語尾が羽音にも似た虫語に変わるのを知る。自分でも納得できないのに、変身はとまらない。家族の不安は嫌悪に変わっていく。家族室の敷居が高くなる。彼は天井に貼りついて隣室をうかがう……夢の中では妹と嬉々としてダンスできるのに……。

この劇を成功させたのは演出家だけでない。この主人公を演じたK・ライキンがあればこそだろう。サチリコン劇場小ホール。

モスクワに着いた時、多くの人に聞かされたのは10月末から一か月近く上演したベテルブルグのマールイ・ドラマ劇場のこと。F・アブラーモフ原作の『兄弟姉妹』は十年前と変わらぬ感銘を与えたようだ。ヨーロッパやアメリカの観客を魅了してきたレフ・ドージン率いるこの劇団は、今回この他にチェーホフの『桜の園』(二年前の春、パリのオデオン座で幕を開けた)やドストエフスキ原作の『悪霊』(91年にドイツで初日の幕を開けた。全三部計九時間。この芝居の幕間は「さながら長距離列車の車中と同じ。皆、持参の弁当をひろげてね」と知人が言った)。他に演劇大学のドージンのクラスを母体につくった実験劇『ガウデアムス』と『閉所恐怖症』。ロシア作家作品からアレンジして作った実験劇である。ただし圧倒的支持のある『兄弟姉妹』以外は、評価が分かれるところらしい。ともあれマールイ・ドラマ劇場の全力投球は、首都の演劇界に興奮の余

波をのこしていた。

モスクワで興奮させる劇場がないかというのと、さにあらず、相も変わらず切符が入手難のいくつかの劇場がある。個々の芝居の話に入る前に、シーズンのレバートリーの特徴を見てみよう。

古典の花ざかりは変わらず。二年前ブームを起こした19世紀ロシア演劇の父A・オストロフスキイ作品は健在、チェーホフと並んで主位を占める。これに次ぐのがドストエフスキイである。

ある雑誌々面で、昨シーズンはオストロフスキイの初演が10、チェーホフ初演8に次いで、ドストエフスキイ初演が話題を呼んだとある。K・キンカス演出の『K・I、『罪と罰』より』。S・ジェノヴァチ演出『白痴』は三部計十二時間の大作。A・ワシリーエフが『おじさんの夢』を、ベテルブルグの青少年劇場が『罪と罰』を新演出とある。

これに私の見たS・ユルスキイ主演『フォマ・オピスキ』(『ステチェンチコヴォ村』改題)を加えていいだろう。因みに12月から1月、二か月間にみるモスクワとベテルブルグの演目表から拾うと。

オストロフスキイ 29 演目 / チェーホフ 23 演目 / ドストエフスキイ 13 演目 / シェークスピア 12 演目 / である。これに次ぐのがゴーゴリ、モリエールそしてソビエト時代のM・ブルガーコフの作品である。

昨年話題を呼んだゴリキイの復活は、タバコフ劇場の『最後の人びと』(A・シャピロ演出)の他はちよっと一服の形である。『どん底』以外は私たちの目から長く姿を消していたゴリキイが今何故復活したのか、それが何故オストロフスキイやドストエフスキイのようなブームにならないのか、という問いかけは一つのテーマだが、説明はまだのようだ。

大劇場(基本的に五百席以上)の話題作から。

モスクワ芸術座のプーシキン作『ボリス・ゴドゥノフ』はO・エフレモフのゴドゥノフ役を褒める人もあるが、私には見る時間がなかった。

随一の人気芝居が二つ、レンコム劇場の『王のたくらみ』とマヤコフスキイ劇場の『キーン四世』切符の値段が何かの尺度になると言えないが、どちらの公演も上席の値段は破格、レンコムは七万ルーブリ、マヤコフスキイは五万だった。サラリーマン平均月収は二十三万とかいうから、安くはないのに、それでも入手難なのだ。他の劇場は一・五萬位から八千である。

『王のたくらみ』はG・ゴリソフ作。アメリカの作家アングラスン作の、ヘンリー八世と二番目の妻アン・ブリーンの愛と破局を描いた戯曲を下敷にしている。奔放で専制的な君主が、アンナを愛し、妻にし、姦通罪で処刑するま

での話、主役に抜擢された若い二人の俳優は見事に演じきった。しかしM・ザハロフの演出は、超近代的な衣裳、巨大な風船を使った装置と共に、エンタテイメントに傾いて、落ち着きのいいものではなかった。

同じゴーリンの作だが、マヤコフスキー劇場の『キーン四世』は台本のよさが素直に出た演出だった。勿論これは



G・ゴーリン作『キーン四世』T・アブラムコワ演出

イギリスの名優エドモンド・キーンの物語。ゴーリンはキーンと王子ウエルス(二幕ではジョージ四世)の演劇に結ばれた二人の友情と葛藤というタテ線に、進行役を兼ねたブロンプターのソロモンをからませて、すっきり分かり易い二幕に仕上げた。主役キーンのA

・ラザレフは期待にたがわぬ演技だし、相手ウエルス役の俳優も品格をもち、場面転換は回り舞台を活用し、更にシエクスピア劇の各場面をすばやく挿入して、スペクタクルとしても楽しいものになった。繰り返されるが、ゴーリンの戯曲は数多いせりふも、主役をめぐる人間模様と程よくからみ、全編を貫くテーマの明快さを際立たせた。創作劇では、文豪トルストイの晩年の夫人との葛藤を描いたS・ココフキンの『ミセス・レフ』(「現代戯曲の学校」劇場、B・モロゾフ演出)があった。夫人役が好演だった。観劇の満足度から言えば、S・ジェノヴァチ演出、オストロフスキー作よりの『深い淵』(マーラヤ・ブロンナヤ劇場)があるが、ジェノヴァチについては『白痴』と共に書きたいので、次号にまわそう。

小劇場(基本的には百席以下)には、さきの『変身』の他いくつか印象の深いものがあった。

昨年は詩人エセーニンの生誕百周年にあたる。この年、詩人に似た才気溢れる若い俳優がデビューしたと評判になった。そのエセーニン役の芝居は見られなかったが、タバコフ劇場の『狂人』(アメリカ作家ミンケン作)で主演する彼、S・ベズルコフの演技をたっぷりと拝見した。自在なエロキューションとエネルギーでしなやかな身体行動、将来楽しみな俳優だ。

エセーニンを主人公にしたもう一つの芝居がスタニスラフスキー劇場小ホールで初演になった。『詩人の運命』(原題は『黒い人』)V・ランスコイの発案・演出によるもので、実は主人公はエセーニンに限らない、多くの詩人創造者と黒い人リデーモンとの争いを、演出家自ら名づけ「クリップ」形式でつないである。引用された作品はブーシキンの『モーツアルトとサリエリ』、チエーホフの『黒い僧』、シェークスピアの『ハムレット』、ゴーゴリ『狂人日記』など。四人の俳優が詩人役、デーモン役などになりながら混然一体の世界をつくる。女優一人、赤い布をひるがえしイサドラ・ダンカン役で踊ったり、メイエルホリド夫人ライフになったり……。

いつも衝撃的な舞台をつくるカマ・ギンカスが『デカプリストの処刑』という芝居をつくった。18世紀、闇に葬られた十二月党員たちの死の真相を、記録や書簡、同時代人たちの証言(実在しない)などで探り直そうという歴史再現劇である。作者役を演じたG・ヤノフスカヤの演技と、尼枷手枷、絞首台、囚人着などビジュアルな小道具を揃えながら、全体として異化効果をねらったスタイルが印象深かった。青少年劇場小ホール。

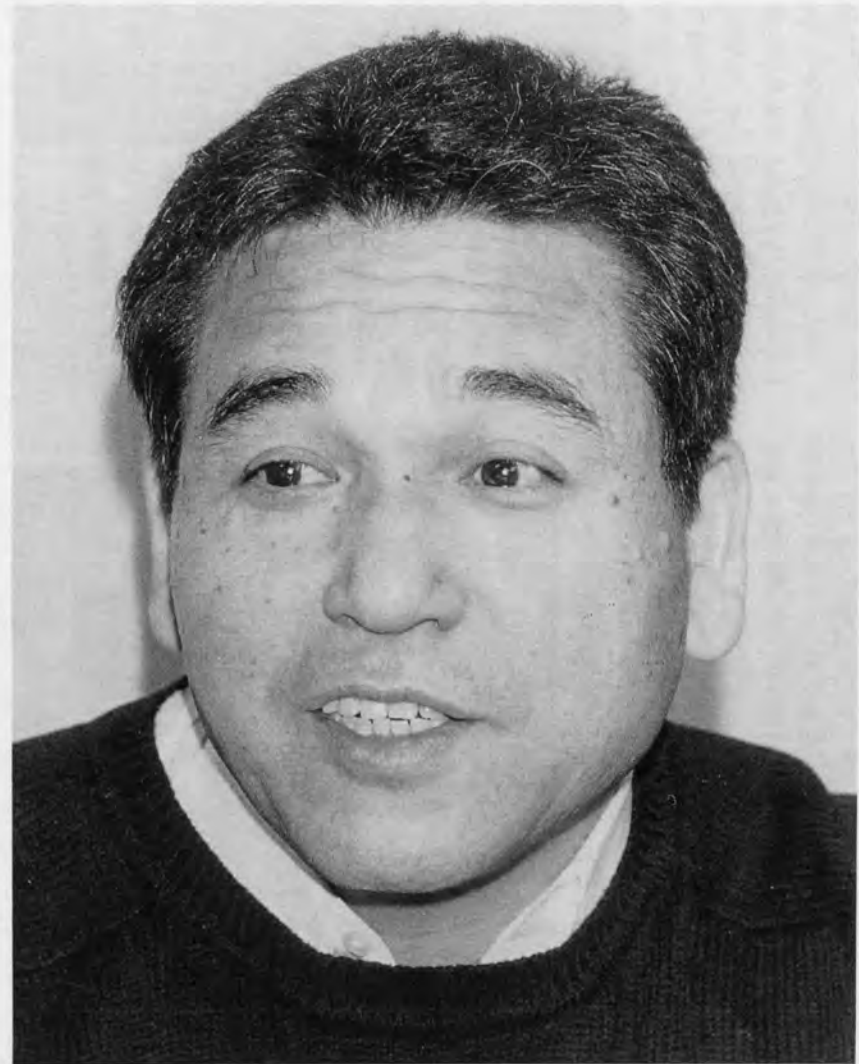


『デカプリストの処刑』カマ・ギンカス作・演出

顔

しろ たに まもる
城谷 護

全リ演事務局長
京浜協同劇団代表委員



多能・多才の背後にあるもの

「京浜協同劇団新稽古場建設を支える
仲間と市民の二〇〇人委員会」

事務局長 笹岡敏紀

仲間たちは皆、「シロさん」と呼ぶ。私もまた「シロさん」と呼びかけるような付き合いを始めて十年余になる。シロさんが多能・多芸・多才の人であることは誰しも認めることだが、この人をトータルに捉えることは本当は難しい。とかく多能・多才の人間はその基本のところが見えなくなるからである。しかし、彼には明白なバックボーンがある。それは、何よりも彼が「労働者」であるというところにある。

私が畏敬と共感を持ちつつ、彼の中にも見ているのは、労働者としての彼の基本的な生きざまである。大企業の厳しい労働現場で働き続け、組合活動家に対する差別政策に抗しての十年余の争議を勝利に導き、今なお職場の中の「希望の会」という、闘う仲間の組織のリーダーとして生きる。

彼が京浜協同劇団での創造活動を通して、「制作」の分

野で新しい道を切り開いてきたことはよく知られていることだが、その制作活動の源泉はこの労働者としての彼の生きざまの中にあるのだろう。先年彼が上梓した『わくわく制作・いきいき劇団』という一書は、そのことを余すところなく語っている。

京浜協同劇団は新しい稽古場を建てた。その建設事業の総責任者としての奮闘の中に、彼の持つ限らない力量をしっかりと見せてもらった。あえて、畏友と呼び、頼もしい働く仲間と呼ぶゆえである。

彼と芝居のことで言えば、この一月、新しい稽古場劇場に、彼の奥様の瀬谷やほ子の自主企画による「二人芝居」(別役実作「トイレはこちら」)をものした。舞台上のシロさんは、芝居をする喜びを全身で表わしていた。

全リ演事務局長としての彼の活躍については、私が書くまでもない……。

顔

の じり とし ひこ
野尻敏彦

演出家
劇団テアトル・八カタ



「地方色で勝負ですよ！」

劇団夢工房 石川 螢

野尻さんが若者たちに乞われて、東京から博多に移り住んで、テアトルハカタを設立されてから二十年余りになる。この間私は野尻さんと色々な関わり方をさせていただいた。或る時は傍観したり、或る時は酒をのみながら、劇団運営の難しさを語り、私の脚本を野尻演出で合同公演したりした。その都度私はテアトルハカタの人材の豊富さや財力や、広報の巧みさと観客動員力に羨望した。十年後には、ビルをまるごと借り切って、二百人劇場を作ってしまった。演劇不毛の地と言われて来た博多にも、やっと演劇の花が咲き始めたと思った。野尻さんはこの頃から、「博多に骨を埋める」と言い出された。「そうですか！まさに心技一体の感がありますね」「もうそんなに若くはないし、腰を落ち着けるよ。石川さんも兎年でしょ。兎年はタタミの上では死ねないそうだよ」と野尻さん。「そうでしょうね。じや私は稽古場で」と私が言うとう野尻さんも「それがいいね」と言った。その頃は四回目で野尻さんは五回目の兎年だった。この頃の酒は実に楽しかったし、芝居作りも充実し

ていた。野尻さんは、ミュージカルまで手がけるようになっていた。それから五年後、二百人劇場がバブルの嵐に巻き込まれた。ビルは壊され駐車場になった。その間、劇団一丸となって抵抗しておられたが、得体の知れない経済のしくみの前に敗退やむなしかったのだろう。この時の心労からか、野尻さんは体調をこわされた。それでも新しい稽古場に移り、あちこちのホールでの公演は続けられた。敬服の限りだ。

昨年の秋、久しぶりに酒席をご一緒した。次なる演出への意欲を語る中で、弱気な発言があった。「ほくの演出作品古いのかねえ」私は返事に窮しながら「要は、現代の観客の心にどうひびくかじゃなかですか」「そうね…！」野尻さんは水の音をさせながら大好きな水割りをのんでおられた。私、「四季の常打劇場が出来ますね」、野尻さん「地方色で勝負ですよ」。野尻さんは、博多にはいなかったタイプ

顔

ふじもと ふみ ひこ
藤本文彦

演出・演技
人形劇団京芸



おっちゃんのこと

関西専門人形劇団協議会

白井 昭伍

劇団・京都芸術劇場（人形劇団京芸の前身）の創立が、昭和二十四年（一九四九年）と聞くから、もうしばらくで五十年となる。

藤本文氏は、谷ひろし氏と共に、唯一人、現役の劇団創立メンバーである。

氏は、昭和三年（一九二八年）大阪・堺市に生まれる。父君は教育者、長兄は医師という恵まれた環境からか、その身長のごとく伸び伸びと育ち、少年のころは大陸に雄飛するを夢見たこともあったと云う。

戦後は激動の世であった。文化活動においても、いわゆるラジカルな時代であったといえよう。その激流に揉まれながらも、なんとか劇団を砕けさすこともなく、無事、「劇団京芸」と、「人形劇団京芸」に発展的な独立をさせることができたのは、理論的な面もさることながら、美術・演出の谷ひろし、演出・演技の藤本文彦など、人間らしい暖かさ、豊かさが指導者にあっただけこそと思われる。

今、茶どころ宇治白川郷に七百坪の敷地をもつ、「人形劇団京芸」が建っている。

氏はここに家族と共に暮らし、おびただし役を演じてきたし、これからも演じる。一九七八年度には「全国児童青少年演劇協議会正賞」も受賞し、一昨年は一人芝居に挑戦、念願の井原西鶴の世界より「鯉のうらみ恋」——西鶴諸国ばなし——「おさん茂右衛門語り草」——好色五人女巻三より——の二本を、かたおかしろう氏の脚本・演出、谷ひろし氏・水野靖子氏の美術で上演し、永年の夢の一端を果たしたという。

昔から「おっちゃん」とニックネームで呼ばれる氏は、昨日、入団した新人からもそう呼ばれる。これからは若者の時代である。新しい才能が数多く伸びてきている。

技能面の指導と共に、人間的な豊かさを植えつけてあげるのが、氏の重要な任務となるに違いない。

顔

たか ひら かず こ
高平和子

人形劇俳優
人形劇団クラルテ

おく むら よし こ
奥村佳子

人形劇俳優
人形劇団クラルテ



(左から奥村佳子、高平和子)

エロシエンコ原作「せまい檻」

お二人は、ホンモノ

大蔵流・狂言師、羽衣学園短大教授

安東 伸元

とにかく、このお二人はホンモノである。ホンモノ指向が妙に蔓延して見ようによっては至る処ホンモノと称するモノが氾濫している昨今、そうであるからこそ一向にホンモノに出会いたいと思いが持てない中であって、「これはホンモノだな」と、このお二人は思わせるのである。年間の大半を旅公演に費やし絶妙鉄壁の二人同行を維持して十三年。公演地は日本全国津々浦々に及ぶ。人形を繰るといふ事には、人の心をそこまで惹きつける魔力が潜んでいるのかと思わされる。公演地では確実に足跡を其処に残し、高平和子・奥村佳子という二人の女性との再会を待ち望む人達も多い。狂言との出逢いは一九八七年、以来狂言の演劇性を吸収するのに極めて熱心である。場合によっては人形劇と共に狂言の意欲的な紹介も欠かさない。先日奈良県の或る中学校で狂言鑑賞会が催され、二人によ

る「蝸牛」が演じられた。二人の存在を知り、その狂言を見た文化行事担当教諭の要請によって実現した公演であった。三〇〇人の悪童の前に彼女達はともかく狂言を完演したのである。これは驚くべき画期的な出来事と言わねばならない。昨今マスコミで話題の女性狂言師誕生の報道とは以て非なる真正正命の女性狂言役者の登場である。そこまでやってしまおう二人だからホンモノと言うのである。元より彼女達の根は人形劇、しかも舞台芸術として広汎な支持を受ける人形芝居の実現への思いである。民族文化遺産の狂言から何を抽出し、それをどう我が田へ持ち帰るのか：お二人の今後の公演活動を通して私に見守ってゆきたいと思う。最後に、同性のよしみではないが彼女達をホンモノの存在にしている母艦を用意し、付き合い続けておられる二人の御主人達に心からなる敬意を表したいと思う。

☆ ☆ ☆

高平和子 北海道札幌市出身。一九七二年入団。学校公演で活躍。八三年より奥村佳子とコンビを組み、小班で全国を駆けめぐる。大人の公演では、近松物の「関八州繫馬」「女殺油地獄」。説経の「愛護の者」、近作では「しんとく丸」を主演。
奥村佳子 滋賀県水口町出身。人形劇団杉の子を経て、一九七七年入団。近松の「生玉心中」の花車でデビュー。八一年の「小栗判官」の照手姫をはじめ、巾広い役で活躍。「しんとく丸」の、のぞきからくり師、継母。

劇団銅鑼

カウナス国立劇場
との交流記

山田昭一

私達二人は、劇団の仲間の声援を背に、曲がりくねった美しいナムナス川に沿う、中世のたたずまいを残す静かな街カウナスに五十五日間滞在した。

今年のカウナス国立ドラマ劇場創立七十五周年記念という事で新作七本をつくることになり、劇場の演出家の他に、オーストリア、イギリス、ロシア、日本と外国の演出家を招聘しての意欲的な企画を立て、中でもこの劇場では初めての日本作品上演ということで、「日本の夕べ」は、メインイベントとして取組まれた。私達自身も賓客として大事にされた。

私の方は、ダイニユス・カマイティス氏訳による「愉快なおばあさん」で、出演はレギーナ、アンターナス、ヴィリウスとベテラン俳優陣。レギーナさんは、かのルナチャルスキー演劇大学出身の人気女優。アンターナス氏は、詩人であり、TV脚本家でもあり、ヴィリウス氏と共に若い

頃から喜劇で人気者になっている。三人共日本に対する好奇心いっぱい、で、「明日は稽古十時から、お疲れさま」と私が言うと、「ジュウジ、ジュウジ、オツカレサマ」とすぐ覚え、稽古場ではなるたけ日本語を使って欲しいと注文が出た。



山田昭一演出「愉快なおばあさん」

稽古をしながら、日本の歴史、宗教、精神的風土、文化等、積極的に質問が出され、作品に則して、役に則して日本に対する理解を深めて貰った。おかげで徹底したリアリズムの上で立って飛躍した舞台を創造することが出来たと思う。満員の客で埋まった舞台稽古では「愉快なおばあさん」は笑いの渦に包まれ、「ナラヤマ」はシーンと静まりかえり、終ると一瞬、間があって、大喝采となった。予想以上の反応の訳を聞く

と、「分かり易い、身近な問題なので共感出来る」と当然のように答えが返ってきた。

カーテンコールで送られた本の表紙に次の詩が書かれてあった。

桜よ

遠つ国に咲く花よ

その姿

我が瞳に映らずとも

我が思い出に残り

心の中に映る

されば客人よ

願わくば

我が心持ちて行け

桜咲く君が故郷へ

ありがとう山田さん

リトアニア晩秋

大峰順二

カウナスからビリニウスに向かって、アウトバーンA1

を走る。一九九五年十一月十二日、早朝。切れ目なく続く沿道の樹木。真っ白に氷結している。「冬が始まる……」

カウナス国立ドラマ劇場の文芸演出部責任者エルビラが流れる風景を見ながら呟く。しばらく、沈黙の時が流れる。突然、空がフワッと明るくなった。日の出た。風景はたちまち淡く美しいバラ色に染められた。「きれい。あつという間ね、二か月なんて……」名残り惜しそうな彼女の表情。

☆

☆

☆

山田と私は、二か月間、リトアニアのカウナス国立ドラマ劇場で舞台演出をしたのだ。一昨年の「センボ・スギハアラ」リトアニア公演から始まった交流のセカンドステップ。相手側の希望で日本の作品が選ばれた。山田は、老齢の三人の俳優と共に「愉快なおばあさん」。私は、二三人の俳優と共に「ナラヤマ」。二作品を「JAPONIJS・NAKTYS (日本の夕べ)」というタイトルで上演。

台詞は勿論リトアニア語。私たちは、かつて、髪の毛を赤くしたり、目を青くしたり、ノーズパテをつけて鼻を高くしたりして、外国の作品をやっていた。いわゆる洋物。今回は、その正反対。妙な感じだ。だが、舞台も観客も当時とは変わった。髪の毛を黒くする必要もないし、目の色を変える必要もない。しかし、言葉。その大きな障害。通訳を介しての稽古は、時にもどかしく、時に俳優との意思の疎通を阻む。が、これも二か月という時間が全てを解決し



大峰順二演出「ナラヤマ」

てくれた。日本の過去、現在を語りながら台本との接点を深めていく。役の特徴を、人間の問題として相互に理解しあい、深めあっていく。稽古はシーズン中の多忙な時期であったが、総じてうまくいった。

俳優たちは、日本的な特徴を生かしながら人間としてのリアリティーをみごとに見せてくれたのだ。作品の命は違和感なく観客に伝わった。満員の観客は、

山田演出の前半で笑い、後半の「ナラヤマ」で泣いた。拍手は直ぐにスタンディングオベーションに変わり、長く続く続いた。セカンドステップは大成功だ。楽しさと充実の二か月。それだけに別れがづらい。

「またきつと……。」いつとは決められぬ次のステップ。だが、その時はきつと実現する。凍付いた滑走路を蹴立て

るようにして、舞い上がる飛行機。その中で、私は、劇場で抱き合った一人一人の俳優たちの顔を思い浮かべた。

全り演（東）作家会議の予告とお願い

時期 5月11日(土)午後3時から5月12日(日)正后まで。

会場 JR浜松社員宿泊所

〒432 浜松市西浅田一ノ五ノ七

TEL 〇五三(四五三)二二八四

(JR浜松駅より遠鉄バス十分)

参加費(交流会費を含め)約八〇〇円

申込期限 四月二十日 事務局まで。

書き手の皆さんや演出あるいはこれから書こうと思っている人など多数の参加を訴えます。

尚、新作を書かれた人は20部、四月十五日までに事務局へ送付して下さい。お願いします。

事務局 〒457 名古屋市南区汐田町十一一八 栗木方

TEL 〇五二一八二二一三六九一



人間賛歌が支える演劇人生

藤本 栄治

(劇団潮流)

劇団潮流の紹介

一九六〇年五月大岡演劇研究会として発足、六七年劇団潮流となり今年で三十六年目に入る関西の老舗の職業劇団である。主宰者大岡欽治さんの指導のもとで一貫してリアリズム演劇を志向し常に社会性のある創作劇を数多く生み出している。学校公演や親子劇場も積極的に取り組む静岡から鹿児島までの地域で年間二〇〇ステージ公演している。大岡欽治さんは「演劇会議」に十七年間に亘って「戦前関西におけるプロレタリア演劇の研究」を発表してこられた。その大岡さんが九二年九月に亡くなられてからは劇団代表として、また中心的な役者として活躍しておられる藤本栄治さんの魅力のすべてに若手劇作家の楠本幸男さんが迫ってみました。(赤松)

楠本 僕は最近俳優の仕事に興味があるんですけど、前号に

載った溝田繁さんの話も面白かったし、仕事としての俳優というものがどんなものか知りたい。女優のことはわかりに作家なんかも書いてますが俳優についてはあまり無いですものね、長く俳優を演っている方の話をぜひ聞きたいと思ってたんです。僕が最初に藤本さんの舞台を観たのは「霧の旗」の大塚弁護士ですから二〇年くらい前になりましたが、その時からベテランの役者さんやなあと思いました、もう何年くらい演られてるんですか。

楠本 そうですね、四〇年くらいになります。

楠本 へえーそんなに長く役者を演られていて突然ですけど、イヤになったりやめよと思われたことはありませんか。いやあこ二十年くらい毎回やめよ思ってます。これ限り、この舞台限りでやめよう思うんです。若い時はそんなことはなかったんです。特に役者はじめて十年くらい

聞き手 楠本幸男 まとめ 赤松比洋子

はええ調子で気持ちよう演ってたんです。自惚れやで、オレはうまいや観客に見せたるんやと思てたんですね、それが十年目くらいにイブセンの「民衆の敵」のストックマンを演った時に恐くなりましてね、舞台が恐くて袖でガタガタ震えてたんです。喉がカラカラになって袖に水を用意して引っ込んでくる度にガブ飲みしてました。その恐さが三年くらい続きましたね、芝居が解りかけてきた時だったんです。それを乗り越えた後はしばらく楽になりましたけど最近、また恐いです。

楠本 演技の節目以外にやめたいと思われたことは？

藤本 今から十二、三年前になりますけど経済的な問題や人間関係に疲れ果て、おおげさなようですけど死ぬことばかり考えてたんです、どうやったら楽に死ぬるかとかね。

楠本 へえーそうですか……、でもそれをどうやって克服されたんですか。

藤本 やっぱ人間関係でしたね。演劇畑ではない全く関係のない人達との交流の中でぶっつけてみたんです、その時ポロクソに言われたんです。「そんなにしんどいんやったらやめたらええやないか、何んでそこまで悩んでこだわってるんや」みたいなこと言われて反発を感じましてね、それやったらもう一回本気になって財政面も立て直してやろうと思ひ、学校公演のオルグを殆ど引き受けてるんです。まだまだ財政的には苦しいですけど八年

前からギャラ制をやめて給料制にしたんです、余計苦しいですけどね、学校公演のない夏休みや冬休みは一銭も入ってこないのに給料は払わないいけないですものね。

楠本 マスコミの仕事はされてないんですか。

藤本 三十六年間、一度もやってないんです。創立の時から舞台だけでやっていくというのがモットーなんです。マスコミの仕事で稽古抜ける人が出るのがイヤでね、そらマスコミやってもちゃんとして来る所もあるだろうし、狭い考えかも知れませんが舞台だけでやっていきたいからこだわってるんです。だからうちの稽古は毎日全員そろってやる、一人も欠けないんです。

楠本 毎日全員そろうというのは凄いですね、プロの強みかも知れませんか。僕なんか自分の書いた作品はだいたい自分で演出しますけどいつも役者がそろうやるか、あいつは今日稽古に来るやるか心配ばかりしてるんです。藤本さんは演出もされてますが、若い人達にどんな指導をされてるんですか。

藤本 あまり教えませんね。僕の持論は、役者は自分で創るものだと思ひますのでイメージを押しついたり、演じ方を教えたりすることはありませんね、役者が創ってくるものを信じてジーンと待って、良いものが出てきたらそれを引き出していくんです。

楠本 それじゃ潮流での俳優教育みたいなのはどうされて

るんですか。

藤本 初めに四カ月くらい理論や訓練をやって後は実践に入っていきます。うちみたいな弱小の劇団ではすぐ舞台に立たないとやっていけませんからね、だから勉強が足らんと思てるんです、これは関西の弱さやと思ひんですけどね。少し時間が取れたら、もうちょっとじっくり演りたいことがあるんですけどね。

楠本 どういうことを演りたいんですか。

藤本 演劇人としての意識の問題です。何のために芝居をするのかそれが欠如していると思ひます。その思想がない人は魅力もありません、役者やってたら面白いから……これだけでは絶対に長続きしない。僕は業余劇団の人も全部専門劇団やと思ひます、職業化してないだけで……地域で演ってる人達の舞台で創造的に優れたものに出合うことが多々あって口惜しい思ひをすることがあります。芸術というものは土壌は同じだと思ひます。職業化することで抜け落ちるものがある、何のために芝居するのか抜け落ちる危険性があるんです。業余でやってる劇団の方がはつきりしていると思ひますね。

楠本 必ずしもはつきりしているとは思ひませんが、何のために芝居するのかという事は生き方の問題でもあるし、それはリアリズムの問題でもあると思ひます。全演会議の中でもこのことが追求されますけど、リアリ

ズムの問題についてはどう考えられていますか。

藤本 昔は社会主義リアリズムとか発展的リアリズムとか言われましてね、支配階級とそうでない階級の対立が一つの構図となっていたがそんな個定した観念がイヤでね。僕は祖父が芝居茶屋をやっていた影響で、小さい頃から歌舞伎や大衆演劇を見続けていたので自然と自分も役者になろう思てたんです。東京に出てマスコミでやっていこう思てたんですけど、大岡さんと知り合いその人間的な魅力にひかれて新劇の道に入ったんです。新劇の世界は理屈の世界でしてね、スタニスラフスキーもずーと勉強してやってたんですけど、十くらいやった時に疑問を感じましてね、ギスギスした骨だけの人物を創っている、これは違うんじゃないか、幹だけ太くしてもダメだ枝葉も必要じゃないか、もっと無駄なことも必要じゃないかと思ひリアリズム一辺倒でないものを演りたくなつたんです。大岡さんは戦前からやってる左翼系の堅い人で、築地が金科玉条的だったのでよくぶつかり喧嘩しました。でもレバに対しては非常に巾の広い人で、演りたいというものは何でもやらしてくれましたね。

楠本 藤本さんの演りたいものというのはどんなんですか。

藤本 やっぱ人間がよく描けていて身体が震えるような身ぶりが来るような感動的な舞台を創りたい、自分も触れたいと思ってるんですよ。それに芝居には毒が必要

ヴォイストレーニングの実際② 息を無駄なく声にする

やまもとのりこ

前回は、体の内側が張るような強い息の出し方、それを支える下半身の踏んばりについてのべました。

今回は「響き」を手がかりに、上半身の緊張をゆるめ、強い息をしっかりと声にしていく訓練です。声の高低、明るさや重さなどにも関わりの大きい部分です。

①響きについて

前回の『肋骨の内側から下腹部が張る』位強い息を、短く(シュッ)出します。同じ息の出し方で短くハミングをします。(フン、フン)——しっかりと音になっていきますか。息が抜けて弱くなったり、息がまじってかすれたりしていませんか。

息の時は声帯の間が開いて空気を通しますが、声(ハミング)を出す時は声帯が閉じて、空気は声帯を震動させながら通り抜けます。その震動がどの奥の空気に伝わり「響き」になるのです。

ウ、ウ」と短く言ってみてください。——のどで息をつめたり、唇をつき出しすぎているませんか。アゴや唇にこわばりがあると、響きが伝わりにくくなります。どこかにこわばりを感じたら、そこに手をふれてゆるませ、軽くそこを手で動かしながらやってみてください。胸に手を当て響きを感じても力が抜けます。

同じようにウーからアー、「ア、ア、ア」という風にアイ、ウ、エ、オを言ってみます。アやオは口(アゴ)をあきすぎると、息が無駄に外に出て響きにくくなります。イヤエは舌が前に出すぎないように注意してください。舌のこわばりはセリフのもつれにつながります。のどの奥で言うつもりで、舌をゆるませましょう。

強い息が口の内側で(舌の位置やほほの内側の形の変化によって)しっかりと母音になるよう、耳をすませて研究して下さい。

④子音について

しっかりと母音に、「カ、サ、タ、ナ……」と子音をつけて発音してみます。

母音が息の流れなら、子音は舌や唇を使って息の流れを一瞬さえぎり、その結果もっと大きな響きを生むものです。子音を十分に使いましょう。

ささやいてみると、呼吸と発音の弱いところが聞こえない

日本語はのどの奥を使わなくても話せますが、響きが大きい方が声の効率が良く、聞きやすい声になります。耳の下、アゴのつけね辺に指をふれて、内側の響きを確かめて下さい。

②響く声をつくる

響きが弱くならないように、ハミングを長くしていきま(シュー)。後半ほど音が大きくなるつもりで。

次は強い息で唇をほんの少し押し開くようにして、ウー(ウー)に近い声を出します。——口から息が涙山出るので、ハミングよりもっと息を出さないと響きが弱くなります。後半は、坐っている姿勢から立ち上がる時と同じ位足の裏で床を踏みしめて、息を出し声(響き)を大きくしていくと、音量の増大、声のコントロールに結びつくでしょう。

声(ことば)で人を動かすには息のパワーが必要です。口先でなくのどの奥(喉頭、咽頭部)からしっかりと響く声は、相手に向かってまっすぐ届き、気持ちも伝えます。

③母音について

ほったた息でふくらませてから、ウーとのぼしていきます。最後の方ほど声が大きくなるように出せると、「ウー」とはっきりした母音が残ります。同じ出し方で「ウ、

くなるので、自分でチェックしてみてください(ただし、ささやきは母音を無理に響かせないので、声帯を痛めやすいため、長くはやらないで下さい)。——ことばがもつれる(ロれる)のは、舌や唇に入れた力が解放されないで残ってしまいうケースが多いわけですが、舌打ちのように(チッ!、ケッ!)一音一音鋭くささやく(言う)とスムーズに話せるはずですが、必要な力を抜きすぎると、かえってもつれてしまいます。

はっきり言おうとして舌や口の周辺がこわばってしまう人は、唇の端を指でハジキながら、とかアゴを左右に動かしながら話して、どこに無駄な力が入っているか調べて下さい。口の内側が十分使えていれば(母音、子音とも)ことばはほとんど乱れずに出るはずですが、唇をハジク時はパ、マ、ワなどの行が多少変わるかもしれません。唇の過緊張は声の出方や、顔の表情にも影響しますから、鏡を見たりしてリラックスしてしっかりと話せるように工夫して下さい。

⑤最後に、前回の「体の動きと呼吸を一致させる」と同じ要領で、立ち上がり歩き回りながら、一足づつ数を数えたり、ア、イ、ウなどと声を出します。音の響きや発音がはっきりできたら、一息でアイウエオ……と続けます。

体が自然な状態でないと、観客は敏感に声やことばに無

理を感じとるものです。しかし、自然さだけでは舞台表現として不足しがちです。呼吸をパワーアップし、発音と結びつけて自分の楽器を大きく育てて下さい。

【ワンポイントアドバイス】

※声の高低：一般に高い音は口の上側、低い音はのどの下側の共鳴が大きくなります。高い声は体が上ずらないよう（高いと感じるとのど、首に力が入りやすい）下に踏んばって強い息を出すこと、低い声はのどで押さええないよう、音の上に響かせるつもりで首の力を抜くことがポイントです。

階段を上がる時は高い声、下がる時は低い声の練習をするとわかりやすいでしょう。

※音の変化：ハミングでド、レ、ミ、ファ：としっかりした音を出します。高低同じに音が決まってきたら、声でド、レ、ミ：と言ってみます。ドのD、レのR（日本語はしに近い）など子音も意識して利用し、ドォ、でなくド！と歯切れ良い音で。音程の変化は気持ちの変化にもつながりますので、エッ、エエ、エー！ などと同じ字を違う音程で言ってみて、気持ちの動きとどう結びつかか試しながら、音のバリエーションを増やしましょう。

※鼻声、ふくみ声の克服：響きを上を使いすぎたり、口内で無駄に響かせすぎたりしている場合は、とにかく息をシ

劇評

青年劇場 稽古場「小劇場公演」

三連続公演を観て

八橋 卓

創造においては「現実変革をめざすリアリズム」を、運営においては「劇団内民主主義」を追究する劇団「青年劇場」が、隔年二月に稽古場での「小劇場公演」を決定して三回目の公演である。

今回は翻訳劇と「近代古典、現代劇」の二本立ての連続公演で、情況と言葉の関係も問われる興味あるレパートリーであった。

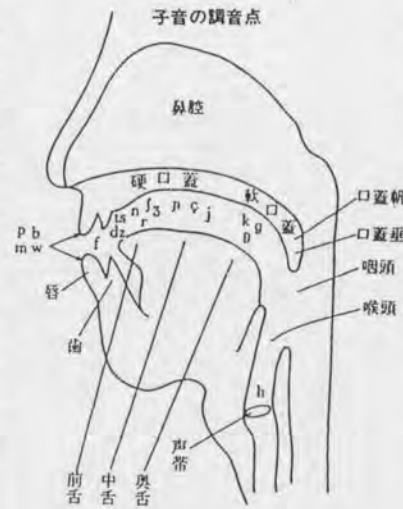
「死と乙女」 作／アリエル・ドーファン

訳／青井陽治 演出／松波喬介

日本から遠く離れた南米チリで独裁政権から民主政権に戻った一九九〇年、スリリングな展開のなかに国家権力と個人の関係という普遍的な問題が問われていく。

車のパンクで立ち往生していたジェラルド（千賀拓夫）を送って来た医師ロベルト（中津川衛）は、車の中でジェラルドが新設された大統領直属の審査委員会のメンバー

ッカリ出すことが大切です。しかし首をつき出すと口先の声になりやすいですから、首のうしろに手のひらを当てて、そこにしっかり響かせるつもりで言えば、声はかえって前に出ます。のどの奥を反響板として使う感覚です。後ろの人にふりむかず話すつもりで言うのも、自然とのどの奥（後方）を使うこととなります。



「顔の断面図（子音の調音点）」
—「日本語音声学」より—

※笑いと言きについて：声やセリフの感情的な部分は呼吸の変化によると考えられます。響きとは問題が違ってきたが、顔、アゴ、首、そして胸からわき腹（背中）のどこかに不自然な緊張があると、呼吸が動きにくくなりますので、感情的な表現が不自然に感じられる、という点では課題は共通しています。ここでは技術的に体をチェックして

(73頁へつづく)

に最年少で選ばれたことを知り、再び訪ねてくる。

妻ポーリナ（上甲まち子）は、かつて医学生だった時代軍のクレーターの直後、外国人の救出活動に従事して逮捕され、ロベルト達に拷問・凌辱された過去があった。審査委員会は、そうしたファシズム時代の人権問題を申請によって審査する機関である。

「致死量以上の真実を求めると人は死ぬこともある」と正義にも限界があることを知るジェラルドの立場と、頑として認めないロベルトを椅子に縛りつけ、ピストルを突きつけて自分を迫るポーリナ。

知性ある三人だけの舞台上に撒きちらされるセリフには、未だ定着しない日本の民主主義の現実と重なる部分もあるが、膨大なセリフの量は解説にはなるが、人物の本質を表現する対話には至らず、幕切れの音楽会の場に、素直に溶けこむまでには至らなかった。

「剃刀」 作／中村吉蔵 演出／西沢由郎

一九一四（大正三）年の戯曲で、散髪をザンパツと言うのを初めて知った。

村に一軒しかない理髪店主為吉（葛西和雄）は、一番で小学校を卒業し、何度も勉学のため東京へ家出をしたが、父親に連れ戻され家業を継いだ不満があり、水商売上りの何度目かの妻お鹿（高安美子）ともしっくりいかない、が金持ちの客と馴れ馴れしくすると気にはなる。その上新

聞や客の話で、二番で卒業した同級生の代議士岡田（板倉哲）が帰郷して、評判が高いのも、昨日訪ねたのに会ってくれなかった思いと重なり、為吉の腹立ちはますます昂っていく。

そこへ岡田が現れ、仕事中の為吉を無視するかの様にお鹿との話が弾み、妻が病身なので仲働きをという岡田に、奉公先さえあれば東京で働きたいとお鹿が答え、お鹿に顔を削ってくれと言う。

こうした舞台上に流れる時間と、客席に流れる時間が同一である一幕物は、演劇の奥深い魅力を増す。だがそのためには、俳優同士の調和のとれた関係が、セリフの有り無しとは係りなく存在することが大切であり、その中に、為吉と見えない糸で結ばれているようなお鹿との緊張関係が、常に主軸として必要なのではないかと思う。

「俺がやる」と強引にお鹿と代った為吉が岡田の喉を剃刀で切り、椅子ごと倒れる幕切れが印象的であっただけに追いつめられていく為吉の内面がもう少し出て欲しかった。だがそれは為吉一人の問題ではなく、出演者全員の問題であらう。

「殺意」 作／飯尾憲士 構成・演出／瓜生正美
十五分の休憩時間で、舞台装置を床屋から法律事務所に飾り変えたのは、自分達の稽古場であるということと、条件の悪い地方公演で鍛えられた経験の多いスタッフの力量

によるものであるかと感心した。

「剃刀」と違って、この作品は小さきままな箱と階段の構成舞台ということもあるが、それにしても照明のことも考えれば、さぞ大変だったことであらう。

構成舞台に相応しいというより、内容がこうした形式を要求したのであらう。法律事務所の女子事務員（沢田泉）の語りと対話が入り交って舞台は展開する。

冒頭、法律事務所の所長清水弁護士（森三平太）の抱えている事件の一つである花井トメ（小竹伊津子）が、お金を貸した死んだ息子の戦友谷口（北上信）を、返済しないから出刀包丁で切りつけ「殺人未遂」で起訴されている経緯を説明する。

そして二十年前に時間は遡り、小企業の社長（後藤陽吉）がトメが谷口に貸したお金を返さないまま行方をくらましているのので、取り返してやりたいからと依頼に来た場面になる。

三十二万円という金額に、弁護士を依頼する関係が、ペテランらしい人間の信頼関係を漂よわせることで現実味をおびる。

よくできた推理劇のような鮮やかな幕切れへのプロセスに、自殺にまで追いこまれた息子の死は、天皇を頂点とする人権無視の階級制度によって、殺されたのも同然だという思いが静かに伝わってくるのである。

曲 シェイクスピア・作『夏の夜の夢』よしの
戯 祭りの夜の夢 北野 茨

登場人物

☆印は女性が可能

奥助……………便所に首突っ込んで昔死んだ、サダの祖父

能舞の名手で、昔の師匠

大高威一郎（いいちろう）……………能舞 現在の師匠

村会議員・原発賛成期成同盟の会長

美亜……………その一人娘

デメの許嫁だが、デメを嫌ってサダを好きに

サダ……………親が原発反対期成同盟の会長

Uターンした 能舞が上手いが今はやる気なし

親が早く漁業権を売ってしまったえはいと思ってる

暴れん坊で時々漁師になる

デメ……………村役場出納係 能舞が上手い

親は原発賛成派 役場中心の村起こし推進派

礼菜……………家は反対派

おっとりしてノロイが、気は優しい、素朴な考え

ずっと昔からデメが好きで好きで仕方がない

☆ 左京……………沼の守り神 五百年前に京を追われて逃げのびた

思慮分別ある若武者。妖怪ゆえ姿を人間に見せられぬ

☆ 三郎……………いたずら者 茶目っけあり

☆ 樵（きこり）の森の精（女形）……………左京に惚れる

☆ 樵……………軽い

☆ 樵……………むつの灯松……………軽い

下風呂の立石……………のろい

村の男……………サダの仲間

村の女……………サダの仲間

村の駐在・御不浄（ごふじよ）の精……………牧良の二役か？

（御不浄の精は奥助と瓜二つで、作中で奥助も含め

て三役）

華麗な花の精霊など数人（女性が多く含む）

(1)

果てし無く続く砂丘。月夜に潮騒。左京沼の辺。

面を被った若武者、左京。笛の首に合わせ、能舞を舞う。

舞い終えて、

左京 三郎、見るがいい。よい月だ……………我等がこの左京沼に果て、早五百年の歳月が流れた。早いものよ……………。

三郎 はい。左京様が無実の咎で京の町を追われて、この最果ての地で、白馬とともにこの沼に身を投げられた夜も、今宵のように美しい月の光が、沼の面を照らし出しておりました。

左京 五百年……………三郎、あなたにも辛い思いをさせた。幼いあなたをはるばるこのような北の果てまで引き連れ、あなたも私の後を追ってこの沼にともに身を投げ……………。

三郎 左京様。何を仰せになります。この三郎、左京様が地獄極楽唐天竺まで、何処に行かれましてもお供いたします。

お傍に置いていただけのだけで、私はもう……。

左京 ならばよいが……。

三郎 左京様。ほれ、この三郎はこうして(快活に振る舞う)、

左京 ははは。そうか。もうよい、もうよい。

三郎 ところで左京様。この頃、村の様子が少しばかり変ではござい

ませんか。

村人ども、しょっちゅういさかいばかり起こしております。

左京 三郎。そなたも気付いておったか。

三郎 あつたりまえでございますよ。あれほど仲のよかつた連中が一

体どうしたといたのでございましょう。

左京 三郎？

三郎 は？

左京 開発、という言葉を知っておるか。

三郎 いいえ。

左京 開発とはな、

三郎 あ、わかつた！

左京 何だ？

三郎 (坊主の真似して) チーン。これでございますよ。

左京 それは、托鉢だ。

三郎 では？

左京 開発とはな、暮らし向きをよくするために、村にいろいろなも

のを造ることだという。

三郎 へえ。暮らし向きがよくなるんでございますか。

では、万事めでたしめでたし。

左京 (首を振り)

三郎 どうしてでございます？

左京 暮らし向きがよくなるというのは、表向きのことだ。のう、三

郎。富を手に入れること、すなわち暮らし向きがよくなることでは

ある。だが、人の真は富では買えぬぞ。それは我等がもつとも知る

ところ。我等が京を追われたのは何の為ぞ。我等一族、富を手に入

れたが為に、人に妬まれ、陥られたのではないか。分不相応の富

を手に入れば、必ずや富に目が眩む輩が生まれるのだ。

三郎 ではございますが、金がなければ喰ってはいけません。

左京 うむ。

三郎 では、その開発とやら、ありがたいものではございませぬか。

左京 いいや。

三郎 わかりませぬ、この三郎には。

左京 それはな、

オートバイの激しいエンジン音。

左京と美亜、陰に。

サダと美亜、若者(男)1、若者(女)2がオートバイに乗って

登場。

歌と踊り

『JENICO』

一、JEN JEN JEN JEN JEN JEN JENICO

JEN JEN JEN JEN JEN JEN JENICO

眠っているなら目を覚ませ

起きていながら歩き出せ

このままじゃ尻すぼみ

蕾のまま枯れちまう

JENICOけるならホレ貰ってやるじゃ

ITS TIME TO START

ITS TIME TO GET JENICO!

二、JEN JEN JEN JEN JEN JENICO

JEN JEN JEN JEN JEN JENICO

おめえの父っちゃ、いい加減に賛成派に回せじゃ。

女 棺桶さ入っても足で原発反対の旗ッコ振り回してんじゃないの。

サダ そんなことはねえ。

近頃じゃすつかり弱っちゃまって、減多に漁にも出ねえ。

弱気になつてる。あと、二年、いや今年中には折れる。

美亜 何処か悪いの、父さん？

サダ 酒飲み過ぎだべ。

村の連中に誰も相手にされねえもんだから、毎晩酒くらって……。

男 意地で原発反対の旗振ってんだべや。

女 早く賛成派に回ってJENICO貰えばいいのにさ。

男 あとはサダんとこ入れても三、四軒だけだべさ。

男 とにかく、サダ。俺たちを誘ったのはお前の方なんだからな。

日本一のこの砂丘に俺たちだけのライブハウスをおっ建ててるべつて。

村の若い連中、すつかりその気になつてるしてな。

サダ 分かつてる。原発の補償金一軒七千万として、長男に三千万は

来るべ。村の長男はし二十人ぐれえ集めて、六億か七億。取り敢え

ずそれを元手にして、俺が東京時代に仲間になったプロデューサー

や歌手仲間なんか、あつちこつちから賛同者集めて十倍くらいに増

やして、この砂丘のど真ん中にライブハウス建てる。ゆくゆくは世

界中のロックンガーやロックグループば集めてやる。チンケな金

と発想で村起こしだなんだと言つてる村のやつらや、町のやつらの

鼻明かしてやるじゃ。任せておけや。

美亜 あたしは信じてる、サダのこと。

女 あんたもよく言うねえ。

美亜 だつて、

男 だつて、許嫁のデメキンばそれで振ったんだもの、か!?

美亜 あいつは役場のお抱え者。村会議員の父さんの言いなり。

男 そりゃそうだ。

男 サダ。ほんとに大丈夫だんだべな。

歌い終わって、

ITS TIME TO GET JENICO!

ITS TIME TO GET JENICO!

バトカーのサイレン、かと思つたら、50CCのオートバイにサイレンをつけて、村の駐在が登場。

駐在 こらこら！ ナドだべ。村の中、そのオートバイでぶっ飛ばして坂の下のパッチャ、アタリの一步手前まで行かへたのは。さ、逮捕する。

男 証拠は？

駐在 通報があった。

サダ 誰の通報だ。

駐在 それは言えねえ。

女 おかしいじゃない。それじゃ証拠にならないわよ。

駐在 やがましい。さ、手っこ出へ。

美亜 父さんでしょ、それ？

駐在 トウサンなんていう名字はこの村にはねえ。

駐在がサダに手錠を掛ける。

車の音がして、人の声。

威一郎が、デメとともに登場。

駐在 おう、これは大高さん。

威一郎 おお、捕まえてくれたか、駐在さん。

美亜 父さん！ やっぱり父さんだったのね。

威一郎 やっぱり、でねえ。明日は祭りでねえか。

美亜 関係ないじゃない。

威一郎 おめえは、こつたら(サダ)バガのどこがよくて。

デメ 美亜ちゃん。なんでこんなやつらと。

美亜 デメ。あんた、また父さんの腰ぎんちゃくになって。

デメ 美亜ちゃん！

威一郎 これ(デメ)はわしが頼んだんだ。

で、村起こしをしようとするの。

駐在 またまたまた。この砂丘は自衛隊のもんだろが。すつたら夢ばかりくっちゃべってるから、バガだんだ。美亜、おめえの父っちゃんの顔ば見てえもんだなや。誰だ、おめえの父っちゃん？

威一郎 わしだ。

駐在 おおっ！ そうだったのか……。

威一郎 それがどうした。

駐在 ああ……。娘が娘なら、親父も親父だ。嘆かわしい嘆かわしい。へぼ。早く皆帰れ。解散解散。超過勤務超過勤務……。

(退場しながら、小唄風に、♪もらいたいな♪補償金……)

威一郎 何だ、あれは。この村さ、ろくた駐在来た試しねえ。

さ、美亜。帰ると。

美亜 やだ。

威一郎 やだ、つておめえ。

デメ 美亜ちゃん。帰るべ。一緒に。

サダ デメ。嫌がるもの、やめたらよかべさ。

デメ おめえは黙ってろ。

サダ 何だと。

威一郎 やがまし。美亜はな、こい(デメ)の許嫁だんだと。

サダ 昔の話だべ。

男 いつの話してるのよ。美亜ちゃんは、デメさ愛想つかしたんだべさ。役場の遣いっばしりと村会議員様の腰ぎんチャクばししてる

男さ。なあ、美亜ちゃん。

女 そうそう。デメ。諦めなさいよ。

美亜ちゃんもう戻らないんだから。男は引き際引き際。

デメ 美亜ちゃん！ 本当か、本当にこんなやつ好きになったのか？

騙されてるんじゃないかねえのか？ 美亜ちゃん！

威一郎 そんだ。美亜、おめえはこれに騙されてんだ。

サダ！ 美亜さ何した！

おめえらの後を追いつけてくれたな。

駐在 で、何キロ出してたっけや？ こいどのバイク。

威一郎 は？

駐在 それとも追い越し禁止区域で追い越しば掛けたのか？

威一郎 いんや。

駐在 したら？

威一郎 なんだから、村の中、ボウボウと飛ばしてらったべさ。

その音で坂下のパッチャが当たり掛けて……。

男 バイクの音聞こえて当たり掛けたら、捕まるってか？！

女 坂下のパッチャだきや、この前チリ紙交換の音でもジョンベン洩らしてらったじや。

駐在 あいや、んだか。

したら、こいどはつかまえられねえなあ。はい、釈放。

威一郎 おい、すつたらこと！？

駐在 本官ば、どっかさ飛ばすつてんだべや？ 頼むじや。

本州最果て下北半島、そのまたはずれの北の果て。

見渡せば日本一の誰も来ねえ大砂丘。日本一のでっけえ——村。

地獄の果てまで行つてもここより辺鄙なところはねえ。

転動だば望むところだ。へぼ。本官はこれで。(退場)

威一郎 あい。次の村議会でおめえの放逐決議は出してやるしてな！

覚えておけ！

駐在 (戻つて)頼む！ この村から放逐してけ！(と縛る)

威一郎 やかましい！

サダ 砂丘の真ん中さ穴掘つてもぐつてろや。

そのうち自衛隊の射撃訓練であの世さ軽く行けるじや。

駐在 おうおうおう。じゃかしい！ おめえらもな、いい気さなるな

よ。ろくに働きもしねえで、原発の補償金だかなんだか知らねえが、

どうせすつたら泡ゼニでも当てにしてんだら。

美亜 働かないんじゃないわよ。あたしたちは、この砂丘に人を呼ん

他人の許嫁さ手っこば出して、済むもんだか！

サダ 俺は何もしてねえ。美亜が俺は好きになった。

威一郎 おめえはどんだんだ！？

サダ 俺も好きだ。

威一郎 ほれ、みる。やっぱりおめえが手っこば！

サダ なしてそうなるのよ！ 村会議員様、本当は、原発誘致期成同盟の会長としては、反対派の家の息子さ娘嫁にやるわけ行かねえんだべさ。んだべ？

威一郎 ば、ばか言うんでねえ。れ、恋愛と政治は別だべさ。

デメ 大高さん！ そういうことではねえべさ。とにかく、サダ。お

めえらの考えは俺も聞いたじや。ライブハウスだか何だか知らねえ

が、そんなもので村起こしが出来たら苦労は要らねえんだ。もつと

真剣にこの村のことば考えるべ。能舞だつてある。おめえも能舞さ

毎年出てらべ。おめえが出なけりや他の連中だつて困るんだ。それ

にこの村にはまだ自然も残ってる。もう原発が出来ることは九分九

厘決まった。決まったからにはその先ば考えるしかねえ。

今から反対したつてもう遅いんだ。

威一郎 いいど。さすが役場の出納係だ。

男 関係ねえべ。

威一郎 やがましい！

女 やがましやがましつて、あんたの方がよっぽどやかましいわよ！

サダ デメ。考え違いすんなよ。それは俺の親父は原発反対の旗振つ

てら。だからつてこの俺も原発反対なわけじゃねえ。それどころか

親父に早く旗降ろしてもらいてえと思つてるくれえだ。

俺たちはな、補償金の使い途を言つてるんだよ。

デメ だから、それは役場で、

サダ ばか。役場に何が出来る。金は貰つたやつのもんだ。一度僕に

入れた金ばまた役場さ出すバカがいるってか。どうせ飲み喰いや道

楽に遣うもんなら、若いもんがこれからの為遣う方がどれだけい

いもんだか。

威一郎 飲み喰いに遣うだと……。

おめえの爺様がそれば聞いたら、どれだけ嘆くことやら。
サダ どっちが。大高さん 俺の爺っちゃんはおんたの能舞の師匠だつたべや。爺っちゃんはおんたに言い残したことがあったんでねえか。どつたらことあつても原発だけは造らしちゃんねえ、つてな。俺は確か、あんたが爺っちゃんの枕元で、その言い付けば固く守るしてつて、約束したの覚えてるど。

威一郎 あれはおめえ、

サダ それが爺っちゃんやが死んで、自分が村会議員になつた途端、原発誘致の旗振り一番乗りだ。たまげたまげた。

威一郎 そ、そいだよ、おめえは何だ。師匠の孫のくせして、能舞は

いい加減だ、原発の金ば当てにしている。いい面汚しだべや！

サダ ああ、そんだ。面汚しだじや。大高さん、あんたと同じ面汚し

だじや。今じや、みんな同じ穴のムジナだじや。同じムジナなら、

ちつたあ毛並みのいいムジナならねばなあ。

爺っちゃんさ顔向け出来ねえじや！

威一郎 とにかく帰るべ。さ、デメ。連れて行け。

デメ (美亜の手を取ろうとする)

男 やめろじや。

一同がもめていると、陰で女の激しい泣き声。

礼菜であつた。

女 礼菜。何してるの、こつたらどこで。

ますます激しく泣く礼菜。

礼菜 デメ。なして美亜は好ギなんだ。わいが、こつたにあんたが好

ギだのに。なしてわがってけねんだ。オイオイオイ……！

デメ、好ギだ！ (デメにすがりつく)

デメ 礼菜、やめろ。俺が好きなのは美亜だんだ。

おめえは関係ねえべ。

礼菜 いや、関係あるじや。好ギだもの。好ギだもの。

デメ おれはおめえが好きでねえんだ。

おめえの面見てるだけで気分悪くなるんだ！

礼菜 わいはあんたを見ていねえと気分が悪くなるうッ！

デメ (吐き気) オオッ！

威一郎 こら、礼菜。デメはな、うちの美亜の許嫁だんだ。

だから、おめえの入る隙間はこれっぽっちもねえんだ。

礼菜 いんや。ワはこの人の心の隙間さ入る。

この人は美亜ちゃんさふられて、こつたらガバツと隙間が開いてるべさ。

デメ 何喋ってらんだ！？

男 礼菜、諦めろ。おめえの家はすうつと原発反対派だ。

デメの家とは正反対。どうせ一緒になれねえ。

礼菜 したら、この人(サダ)と美亜ちゃんは何だ？

賛成派と反対派の親方同士でねえか。

威一郎 なんだ。それみろ。だから、おめえら(サダと美亜)も一緒に

なれねえ。さ、美亜。帰るべ。

はれ、デメ。早くしろ。賛成派同士だ、許嫁だ。

礼菜 違う。わいは反対だ。いや反対派ではねえ。

デメ おめえの家は反対派だべさ？！

礼菜 だして、デメが美亜と一緒にするのは反対だけんども、わいの

父っちゃんが反対派なのは違つて、デメの家の賛成派とは関係なく

てんだか賛成してんだか……アアア！ わがらなくなつてまった！

威一郎 アアアア！ 何喋ってらんだ！ 頭おかしくなつてきた。

とにかく美亜、来い！ (自分が美亜の腕を取る)

サダ やめろつて！

威一郎 やがましい！

美亜 父さん！ あたしはこの人が好きなの！

デメ 俺はおめえ(美亜)が好きなんだ！

礼菜 わいはあんた(デメ)が好きだ！

威一郎 おめえ(礼菜)は引つ込んでろつて！

礼菜 ヤダ！

男 好きなんだもの一緒にさせてやれよ。

女 そうよ。礼菜がかわいそうじやないの。

デメ やがましい！

男 やがましいとは何だよ！

デメ やがましいからやがましいんだ！

男 たちは掴み合いになるし、礼菜がまた泣き始めるし、収拾がつかなくなつて、暗転幕降る。

(2)

暗転幕前。

左京と三郎。

左京 見たか、三郎。

三郎 はい。

左京 困り果てたものだ。

三郎 反対だ賛成だ好きだ嫌いだ。

左京 もうどうなつてゐるんでございませうか。

三郎 あれが開発とやらの結末であらう。

左京 あれでは何のために暮らし向きをよくするのか。

左京 うむ。

三郎 父上が昔、申しておりました。甘いものほどとりすぎると飽きが来る。そして胸が悪くなるほど見るのもいやになるものだ。

左京 そうだ。華やかな宴の席を離れる時、その席に着いた時と同じ食欲を持って立つ者はおるまい。他人から譲られる金を当てにしうなどと、決して若者の考えることではない。

三郎 村の者ども全てがそのような考えに陥つております。

左京 世にあるものはすべて、手に入れてからより追い掛けている

るうちが花。金色に輝く墓もその下に蛆虫住めるなり。富を求める

者と気違いとは、ともに頭が煮えたぎり、ありもしない幻を割り出す……。

三郎 左京様。

左京 このまま進んで行つたら、この村はどうなるんでございませうか。

三郎 うむ……。

三郎 左京様？！ 原発とやらが出来ませれば、この沼は！

左京 やがて埋められよう。

三郎 そう、あのような若者がますます増えるとするならば……。

三郎 私たちの住む所がなくなつてしまふではありませんか！

左京 そうだ。

三郎 では私たちは？

左京 ただ消え失せるのみ。いや、一度果てたこの身ゆえ、失せることなど元々恐ろしくはない。されど、

三郎 左京様。

左京 これでよいものか？

三郎 これでよい筈がございませぬ。左京様。何かよいてだてはございませぬか。左京沼がいつまでも変わらず満々と水をたたえ、千年

も万年も美しい月光を照らし続け、左京様が村の守り神として安住
出来ますでだてが！？

問。
笛の音。

左京 てだてはひとつだけだ、三郎。

三郎 あるのでございますか、よいてだて？

左京 (腰から印ろうを外し)

この印ろうの中には、ある媚薬が入っている。

三郎 媚薬でございますか？

左京 うむ。

三郎 何でございますか、媚薬とは。

左京 これはな。千年に一度だけ用いることが許されておる。この村
の守り神として、この村が危機に陥った時のみ用いることが出来る
のだ。これを人間の臉に塗りこめば、たちどころに眠りに陥り、目
覚めた時に初めて目にした者に心ひかれてしまうのだ。
たちどころに、いさかいは消え失せる。

三郎 へえ。

左京 この沼の辺で暮らす村人共、これまでいかなるな飢饉に見舞わ
れた時でも、はたまた森が埋まるほどの大津波の時でも、幾度とな
くその試練を乗り越えて参った。だがしかし、どうやらこの度こそ
は、この試練、乗り越えることは出来まい。

千年に一度の危機こそ今。そうであろう、三郎！

三郎 そうでございますとも、左京様。この三郎、今ほどの身体、
髪の毛一本から爪先まで、凍るほどの戦慄を覚える時はございませ
ん。左京様、ではこの三郎、早速その媚薬、あの者共に塗って参り
ましょう。

左京 三郎。はやる心を抑えるのだ。

私が沼に果てる時、熊野神社に奉納した能面があった。
五百年前、都から私が持参して参った、由緒あるもの。

三郎 はい。村の者共が能舞が出来るようにと。

左京 うむ。代々の能舞の師匠格の者に伝えられている筈だが、その
能面、取り戻して参れ。

最早、この村には無用の長物であろう。

三郎 はい。承知致しました。では、(去る)

暗転。

(3)

同じ夜。能舞の囃子の音。

村の熊野神社では能舞の練習らしき村人の喧騒。

神社の石段下。

三郎、登場。石段を登って、様子を窺って戻る。

三郎 やってるやってる。精霊たちも集まっているぞ。さて、どうす
るかな。一度にみな呼び出せば多勢に無勢、妖怪ごときの話など聞
けるものかとかからかわれるのが落ち。よし、一人ずつ呼び出して。
さて、まずは。樵の森の精がよい。

石段の上に向かって樵の森の精を呼ぶ。

提灯の明かりが微かにゆらめいて、樵の森の精が登場。

白装束。遠目に女。近目には女？

樵の森の精 だあれ？ あたしを呼ぶのは。

三郎 樵の森の精。私です。

樵の森の精 あんた、誰？

三郎 どうしてでございます？

左京 そなたにも、私にも、その役、叶わぬのだ。

三郎 ええ？！

左京 そなたも私も亡霊ぞ。それを神の御加護により、守り神として
この沼に遣わされているのだ。元を正せば、我等とて、只単なる妖
怪に過ぎぬ。妖怪は人間と交わりは持てぬのだ。

この媚薬、誰か他の者に塗らせねばならぬ。

三郎 誰でございますか、他の者とは？

左京 明日は村の秋祭り。三郎、これから村の熊野神社に参れ。

神社は宵宮。

宵宮からの祭りの夜まで、神社の境内に集まる者たちがある。

三郎 誰ですか？

左京 この地に神代の昔から祭られて住む精霊どもだ。

三郎 精霊？

左京 そうだ。森の精、海の精、岩の精。ありとあらゆる精霊共。
彼らは祭りの夜になると神社に集まり、奉納される能舞を楽しむの
だ。

三郎 精霊が？

左京 そうだ。精霊たちなら人間と交わりが持てる。

三郎、彼らをここに呼んで参るのだ。

三郎 わかりました。たやすい御用でございます。では、

左京 待て、三郎。

精霊共の中には、我等妖怪を不浄の者と忌み嫌う者もある。

三郎 お任せ下さい。この三郎、先祖の元を正せば、旅芸人の一座で
あったと聞かされております。口八丁手八丁、いえ、誠心誠意尽く
し、無事務めを果たしてごらんにいれます。

左京 頼むぞ、三郎。

三郎 はい！(去ろうとする)

左京 待て、三郎。

三郎 左京沼の左京様にお仕えするもので三郎と申します。

樵の森の精 何よ。左京沼のお化けじゃないのさ。

三郎 ちょっとだけお話を聞いていただけませんか。

樵の森の精 お化けの話なんかいいわよ。

三郎 いいえ。実は、(近づくと)

樵の森の精 よしてよ！ 妖怪のくせして、近寄らないで！

その血の気のなさ。ぞっとする。

三郎 そんなに邪険にせずとも。

樵の森の精 うるさいわね。ここはあんたなんかの不浄の者が来る所
じゃないのさ。帰った帰った。(行きかける)

三郎 樵の森の精。これ(手拭い)、お前のものじゃないか？

樵の森の精 何よ。あ！ それ、どうして！？

三郎 お前の館から、ちょっと拝借。

樵の森の精 お前……

三郎 あれは九十四年前のことでしたね。若く逞しい樵が森の木の上
で枝を払っていた。そこに弁当を届けに来た樵の新妻。新妻が見上
げると、木の上の夫の身体にへばりつくようにしている白装束の女
一人。新妻は大声で叫んだ。誰だ、自分の夫に抱き締めるのは、と。
白装束の女は途端に姿掻き消え、夫は転落。死んでしまった。

樵の森の精 それがどうしたのよ。あたしがせっかくな樵を守って
やったのに、あのバカ女が悪いんじゃないの。

三郎 そうですか？

樵の森の精 そうよ、あれは女のばかな嫉妬心を諷めたのよ。

三郎 では、この手拭は？

樵の森の精 そ、それは……

三郎 これは、その若く逞しい樵のものじゃないか。お前はあの時、
我を忘れて若い樵に取り纏っていた。守っていたんじゃないか。
新妻の嫉妬心を諷めたなどと言いついては、そうではない。
お前はあの樵が好きだった。今でも男が忘れられず、この手拭いを

こうして隠し持っているのが何よりの証拠！

樵の森の精 そんなの嘘よ！ 嘘つばちよ！

三郎 じゃ、村人共にこの話、触れ回っていいかな。

樵の森の精 それは！

三郎 村人共がこの話を聞いたら、お前は二度と樵の森の精として奉られることはなくなるに違いない……。

樵の森の精 待って。待ってちょうだい！

三郎 では、私の話、聞いて頂けますね？

樵の森の精も観念した。

樵の森の精 わかったわ。聞くわ。

なんなりと言ってちょうだい。さ、

三郎が耳打ち。

樵の森の精 そう、この村のこと……。そうね。あたしも実のところ村人たちには愛想が尽き始めていた。村人たちはどんどん変わってしまい、今では暇さえあれば金の話ばかり。仕事も手に付かない連中ばかりになってしまったわ。あの樵の男に罪ほろぼしをしようにも、その気持ちさえも起こさせやしない。

三郎 だからこそ、連中を今こそ、

樵の森の精 そうね。いつかは罪ほろぼししなきゃいけないものね。

わかった、行くわ。左京さんのところへ。

三郎 はい。

樵の森の精 でも、仲間がいたほうがいいでしょう。

三郎 それはもう、多ければ多いほど。

樵の森の精 じゃ、呼んであげる。むつの灯松と下風呂の立石がいいかしらね。

まずはむつの灯松。おい、むつの灯松。

むつの灯松が登場。

灯松 なんだなんだ、樵の森の精。

せっかくのお楽しみを。何のつもりじゃい。

樵の森の精 いえ。実はね。(灯松に耳打ち)

灯松 やめとけやめとけ。あんなばかな人間共のために。

それに、こんな(三郎)不浄のやつ言うことなんか聞けるもんかい。

樵の森の精 灯松。いいの？ 例の話、村の連中に教えても。

灯松 お、おい。それは。

三郎 例の話って？

樵の森の精 それはね、

灯松 おい！

樵の森の精 こいつはね。松のてっぺんに明かりをぼうつとつけて、

夜中に旅をする人間に目印になるのが役目なの。でもね、一度だけ

ね、酔っぱらって明かりを点けるのを忘れたばかりに、三人ばかり海に落っこちて死んでしまった……。

灯松 くくく……。

樵の森の精 この話を村の連中に聞かれたら、きっとお前の松は明日にでも、ばっさり……。

灯松 無念……。

樵の森の精 さて、お次は下風呂の立石だ。灯松、呼んで。

灯松 くく。こんなやつ遣いばしりとは……。

樵の森の精 いいから！

灯松 はい！(呼ぶ)

下風呂の立石はほろ酔い加減。

御不浄の精である。

御不浄の精 待て、どこへ行く。

立石 何だ、お前は。

灯松 見掛けねえ顔だな。

御不浄の精 それはお互い様。だが、俺はあんた方と御同業。

立石 じゃ貧乏神かお前は。

灯松 でなきや、ホイドの精。

御不浄の精 無礼者！ 俺は、

樵の森の精 御不浄の精。

御不浄の精 よくわかったな。

立石 御不浄の精？

灯松 御不浄の精って？

樵の森の精 御不浄の精ったら御不浄の精よ。

御不浄の精 そうだ。この世に生を受けた者万人が一日一度、いや二

度三度、人生七十年として三百六十五日×七十年×2ないし3イコール、七万回から八万回に渡って御世話になる、あれだ。

つまり、これだ。(座って)

三郎 御不浄って廁のことか。

御不浄の精 そうだ。立石に灯松、お前たちにも人間共が正月になる

と締め縄を飾るだろが。同じ物が廁にもある。あれだ。あれこそつまり、わしも心から人間共に愛され感謝されておる証拠だ。

わかったか。わしこそ、その御不浄の精である。

三郎が御不浄の精の周りを嗅ぎ回る。

御不浄の精 くらら何をしておる。

三郎 匂うんじやないかって。

御不浄の精 バカモノ！ 誰が！ 臭いを出すのはわしではない！

三郎 では。

樵の森の精

さてと、これでいいわね。さ、行こう。あんたの御主人

様の所へ。

立石 とはとほ……。

樵の森の精 さてと、これでいいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

と間違うなんて！

樵の森の精 やかましいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

立石 誰が！

樵の森の精 それ以来、こいつはあたしに頭が上がりません。ね？

立石 とはとほ……。

樵の森の精 さてと、これでいいわね。さ、行こう。あんたの御主人

様の所へ。

三郎 では。

樵の森の精

さてと、これでいいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

と間違うなんて！

樵の森の精 やかましいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

立石 誰が！

樵の森の精 それ以来、こいつはあたしに頭が上がりません。ね？

立石 とはとほ……。

樵の森の精 さてと、これでいいわね。さ、行こう。あんたの御主人

様の所へ。

三郎 では。

樵の森の精

さてと、これでいいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

と間違うなんて！

樵の森の精 やかましいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

立石 誰が！

樵の森の精 それ以来、こいつはあたしに頭が上がりません。ね？

立石 とはとほ……。

樵の森の精 さてと、これでいいわね。さ、行こう。あんたの御主人

様の所へ。

三郎 では。

樵の森の精

さてと、これでいいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

と間違うなんて！

樵の森の精 やかましいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

立石 誰が！

樵の森の精 それ以来、こいつはあたしに頭が上がりません。ね？

立石 とはとほ……。

樵の森の精 さてと、これでいいわね。さ、行こう。あんたの御主人

様の所へ。

三郎 では。

樵の森の精

さてと、これでいいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

と間違うなんて！

樵の森の精 やかましいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

立石 誰が！

樵の森の精 それ以来、こいつはあたしに頭が上がりません。ね？

立石 とはとほ……。

樵の森の精 さてと、これでいいわね。さ、行こう。あんたの御主人

様の所へ。

三郎 では。

樵の森の精

さてと、これでいいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

と間違うなんて！

樵の森の精 やかましいわね。あたしの美しさに目が眩んだのよ。

立石 誰が！

樵の森の精 それ以来、こいつはあたしに頭が上がりません。ね？

立石 とはとほ……。

(座って) とうやあってシモに落とす人間共ではないか!

三郎 だって、あんたもいつも廁にいらんだらう?

御不浄の精 ああ、そうだ。連中が必死に踏ん張っているのを、こうして(座って正面から)じいっと見守っておるんだ。

樵の森の精 ホントかねえ。それを知ったら人間たち、おちおちしてられないねえ。

立石 (座って) まさかてめえの顔の前にこいつがいるなんてよ。

灯松 (立石の前に座って、イキ張って) こうやってか!?

ハハハ、こりゃ面白いや!

御不浄の精 (バシッと叩いて) ベカモノ! 何が面白いものか。

無くてはならぬもの。それが廁だ。その廁で命を落とす者もある。

寒い所に住む老人は気を付けねばならんぞ。この村でも冬によくアタル爺さん婆さんがあるからな。

樵の森の精 ところで、その御不浄の精が今日はどうしたね。いつもは祭りになつても来ないのにさ。

御不浄の精 それだそれ。わしこそ年中無休の働き精。それもその筈人間共は、のべつまくなしビーヒャラドンドン。祭りの時でも滅多に休みが取れん。そこで元締に直談判。十年に一度くらいはわしも祭りに行かせろ、もしもわしの切なるこの願ひ叶えられぬならば、ストライキも辞さず、とやうたわけだ。これにはさすがの元締も折れた折れた。で、今日は労使交渉の甲斐あって初めての祭り参観日と相なった次第。ところが祭りに来てみれば、お前たちは祭りを見るどころか、どこの馬の骨かもわからぬ妖怪風情とチャラケテおるではないか。わしとて仲間がいなけりや寂しいわいな。

どここに悦楽あるならば、わしも連れてけ袖擦り合つて。

三郎 楽しみに行くんじゃないさ。

御不浄の精 では、何をしに行くのだ。

樵の森の精 あの……。(汚なさそうに)

御不浄の精 (ぐいと引つ張り) 臭くはない! 話せ。

樵の森の精 あの、(耳打ち)

御不浄の精 そ、それはいかん。こいつ(三郎)は妖怪であろう。

わしは妖怪は好かん。妖怪は溶解、つまり「溶ける」に繋がる。

廁から風情を失わせたのは例の水洗面所という代物だ。ありやあ味もそつてもありやしない。日本文化の原形たる、タッポンタッポンの(肥桶担ぎマイム) 汲み取りも失わせたのが水洗面所。臭いもない色もない、紙さえ溶けてなくなる始末。わしは溶解式廁は大嫌いだからな。わしは行かんぞ、妖怪などは。一人でも祭りを見ていよう。

三郎 何だい、ありや。ああ、リョーカイリョーカイ。

と、御不浄の精が石段を戻ろうとすると、境内からデメと美亜が手をつないで走つて来る。後から、威一郎とデメが。

御不浄の精がはじき飛ばされる。

以下、人間たちと精霊たちは同じ場面にいるが、精霊たちの姿は人間には映らない。だが、三郎は隠れねばならない。

威一郎 美亜、待ってば!

デメ サダ! おめえがいなけりや能舞の『弁慶』が出来ねえ。

おめえと俺とで踊るんだべさ!

サダ デメ。だから言ってるべ。俺はもう能舞なんてやらねえことに決めたんだ。どうせもうすぐすたれるもんだ。踊れる若い連中もほんのチョットだべさ。こつたらこつたら何になる。

デメ 美亜ちゃん。おめえもそう思うか? 美亜ちゃん。

サダ 美亜には関係ねえべ。

デメ いや。関係ある。美亜ちゃんはおめえみてえないい加減な考え方していいえからな。な、美亜ちゃん?

美亜 デメ。あたしもサダと同じだよ。

威一郎 美亜!

美亜 だから言ってるでしよう? あたしはサダについていくんだつて。もう決めたの! 変わんないのよ!

デメ 嘘だ! 美亜ちゃんはその人じゃねえ!

サダ うるせえな! 美亜がそう言ってるんだからそうだべさ。

威一郎 サダ! おめえ、奥助爺つちや、いや奥助師匠の教えを忘れたのか?! 師匠の枕元でおめえも誓つたべ。能舞は確かに受け継ぐつてな。

サダ 自分のことば、すっかり棚に上げて。

威一郎 げ、原発のことは村の将来が掛かっていたんだ。情勢も随分と変わった。政治も変わった。こりや仕方がねえんだ。だが、能舞はわしも受け継いでいる。おめえも、原発のことは抜きにしてもこれだけはやつたらよかべ。

サダ 自分の都合のいいことだけ……。いい加減にしろじゃ。

威一郎 そうか……。サダ。おめえは師匠の育て方が間違っていたんだべ。おめえの親父もわしらとは能舞を一緒にやらねえ。師匠の可愛がっていたおめえくれえはと思つていたが、よし、こうなつたらわしも縁を切る。奥助師匠とも縁切りだ。

こうなつたら弟子も師匠も、師匠の孫もねえ。

美亜 父さん!

威一郎 おめえは黙つてろ。サダ、ここで待ってろ。

サダ 何だよ。

威一郎 師匠から受け継いだ能舞の面ば返す。いいな。(戻る)

御不浄の精 こいつら、何だ? 祭りの夜だというのに。

三郎が物陰に隠れて、精たちを呼び寄せる。

樵の森の精 あんた、どうして隠れるの?

三郎 わたしは妖怪。人間に姿を見られると、消えてしまわなければ

ならないんです。だから。

御不浄の精 不便所なやつだ。

立石 ところで何だ、あいつらは。

三郎 ですから、さつきお話しした連中ですよ。

灯松 どうりでハンカタサイ面をしておる。

御不浄の精 ゲンパンだか何だか申しておるが、何じゃ。

樵の森の精 だから、(御不浄の精に耳打ち)

御不浄の精 何? あのトイレなきマンションとかいうのをこの村に建てるのか。愚か者めが。

三郎 どうだい? あんたも行くかい?

御不浄の精 いや。わしはヨーカイは嫌いじゃからな。

三郎 頑固だねえ、あんたも。

御不浄の精 お前ごときに『あんた』呼ばわりされるものではないわ。

威一郎が面を持って戻つて、

威一郎 さ、これだ。奥助師匠に預かったが、縁を切つた今は不要のもんだ。とつとつと持って行け。(渡す)

三郎、思わず、

三郎 あ、左京様の面!

威一郎 左京のでねえ、奥助のだ。あ? 誰、喋つた?

デメ は? また、礼菜のやつだべか?(威一郎にすがる)

威一郎 おめえ、そつたらあのオナゴ苦手か?

デメ すいません。

威一郎 (物陰、見て) いねえじゃ。

ま、いい。とにかく、これで縁が完全に切つたと、サダ。

サダ ああ。おめえに持っていられちゃ、爺つちやも成仏出来ねえべ

「や。ちょうど良かったじゃ。」

威一郎 縁は切ったら、何喋ってもいい。サダ、おめえの爺っちゃんどこでくたばった？ ええ？！

サダ どこでもいかに。

威一郎 よくねえ！ わしはな、これまで自分の師匠だからと思って随分と我慢して来た。村のやつらにどんだけバカにされても、これだけは我慢して来たんだ。

デメ 大高さん！

威一郎 おめえは黙ってる！ サダ、おめえの爺っちゃん、どこでアタツタ？ さ、言ってみろ。サダ！

サダ べ、便所だ……。

威一郎 (ニヤニヤしている)

サダ それがどうした！

どこでアタロとクダケロと勝手だべ！

威一郎 勝手にねえ！ 村の連中は口にごそ出さねえが、おめえの師匠はベンジョアタリだベンジョアタリだと、選挙のたんびに陰口たたきやがって、その御陰でわしはどれほど選挙に苦戦を強いられたことか……。あれがなければ、わしは今頃とくに村長さなつていた！ くくく……。おめえにこのわしの気持ちがわかるか！？

御不浄の精 何？ 剛で当たったと……。

威一郎 誰が喋ったのか知らねえが、とにかくなんもかもおめえの爺っちゃんベンジョアタリが原因だ。原発だって爺様のベンジョアタリさななければ、もっと上手く行っていったんだ。

なんもかもあのクソじじいのベンジョアタリクソアタリのせいだんだ！

美亜 やめて！ 父さん！

デメ 大高さん、そりゃあんまりだして！

威一郎 このベンジョアタリ！ クソアタリ！

さぞ見ろ、さぞ見やがれ！ 悔しかったら、便所ば恨め！

サダ 大高さん。あなたの気持ちはすっかり聞かせてもらった。

これでおれの気持ちもすっかりふっ切れたじゃ。

威一郎 よかったな、それは。

サダ 明日、祭りの夜、俺と美亜は結婚式を挙げる。

いいな、あなたにも、誰にも邪魔はさせねえ！

威一郎 そつたらことは許さねえ！

サダ 場所も時間も教えねえ。

デメ 美亜ちゃんは承知してるのか？

サダ いいや。美亜は何も知らねえ。

だが、美亜は俺の後をついて来る。きつと。

サダは石段の上に消える。

デメ サダ！（戻って）大高さん！

威一郎 よし。美亜は明日家から一步も出さねえ。

デメ そつたらこと出来ねえべ。子供じゃねえんだから。

威一郎 よし。

したら、アイツら式を挙げに行く所さ待ち伏せして、ぶっ壊せ。

デメ したら、調べて来い。

威一郎 調べろつたつて。

威一郎 わがらねやつだな。だから、今からずうつと二人の後を追いつけ回せ。見つからねえように。恐山の血の池地獄の底の底までも

追い掛けてこい。

デメ (頷く) ああ……。わかった。(石段上りかける)

威一郎 どこさ行く。

デメ 能舞の練習……。

威一郎 バガ！ 呑気に能舞踊ってる場合か。美亜は家から出さな。サダの後を追え。

バカな便所の神様恨めじゃ！ へへへ！

御不浄の精 くくく……。この野郎……！ 絞め殺してやる……。

御不浄の精が威一郎の首を絞めようとすると、威一郎は話すはずみで避ける。

威一郎 美亜。わかったか。この男の家系はこつたら家系だ。こいつもいつか便所でアタルかも知れねえ。さ、行くど。

すっかり外された御不浄の精は腰をしたたか打って、他の精霊たちの世話を受けている。

美亜 父さん……。あんまりだわ。あんまりよ……。 (泣いて去る)

サダ 美亜！

デメ 美亜ちゃん！

サダを先頭に、一同も追う。石段の頂上にサダ。次にデメ。最後に威一郎。

御不浄の精 (威一郎の後から追い掛け) あの野郎……。

またも威一郎の首を絞めようとするが、偶然外される。

威一郎 放っておけ。

デメ 美亜ちゃん！ (行こうとする)

サダ デメ！ 行くな！ いけばおめえはぶちのめす。

威一郎 ほれみろ。クセエやつはすぐに暴力振るいたがるもんだ。

御不浄の精 何を！ あ、いてて……。

分かるまで戻って来るな。役場さも来なくていい。わかったな！

デメ はい！

威一郎 どうれ、最後の能舞になるな。こりゃ。今年でお終いだ、能舞も。

礼菜が現れる。

礼菜 サダと美亜が結婚する……。 (しみじみと) よかった！

これで、デメも美亜ちゃんば諦めてくれる。ウヒヒヒ。

は！ でもデメが二人の結婚は止めさ入ったら……。そうだ、ワも二人の結婚式さ！ デメ！ (退場)

三郎も物陰から姿を現して。

立石 どうなつてんだ、こりゃ。

灯松 さつぱりわけがわからない。

樵の森の精 三郎？

三郎 わけはゆつくり左京沼でお話いたしましたしよ。さ、御不浄の精 待て。

樵の森の精 あんたはゆつくり、能舞見るんでしようが。

御不浄の精 気が変わった。わしも行く。剛をののしつたあのクソ、いや、あの愚か者を許すわけにはいかん。

樵の森の精 やけに変わるわね。

立石 そうだ、何か、あるのか？

灯松 あのベンジョアタリに？

御不浄の精 よくぞ、聞いてくれました！ 実は、あの奥助とかいうアタリ屋、わしが見張ってる晩に当たつたのだ。それも、ワシがうっかり居眠りしたばかりに！ 不覚であった……。三郎 おやおや。どいつもこいつも失敗ばかり。

ホントに精霊なのかい。

御不浄の精 おまけに。アタツタ爺さんを見て、わしは二度びっくりしてしまった。何と、そいつがわしの容貌とうり二つではないか！

樵の森の精 あらま。

御不浄の精 さ、行こう。その左京とやらのところに。

わしのたった一度の失態、そのつみ滅ぼしせにやららん。

はれ、ぐずぐずするな！

三郎 変われば変わるものだ。

暗転。

(4)

海の上。

霧が立ち込めている。

小さな磯船に乗っている、サダと美亜。

サダ 美亜、父さんの目、ごまかすの大変だったろう。

美亜 ううん。父さんは祭りの人集めであっちこっち走り回ってるし、

デメの方が大変だった。もうあの人がいたら、あたしの家の庭にテント張って一晩中うろついているんだから。

サダ どうやってデメは巻いたんだ。

美亜 あの人真面目だから、朝トイレに必ず行くんだって。こっそりうちのトイレ借りに来たのよ。それでさ、デメが中に入ったのを見

届けて、トイレのドアに釘打ちつけてやった。

サダ ははは。そりゃいいや。デメのやつゆっくり出来たらが。

美亜 サダ。どうしてあたしをこんなところへ？

サダ 美亜。(突然キス)

船が揺れ、危うく海に落ちそうになる二人。

サダ！

美亜が抱きつき、また海に落ちそうになる。

サダの悲鳴。

サダ バガ！ 落ちたらどうする！

美亜 だって、あんた漁師でしょう！？

サダ あ、おう。いや、俺は美亜のこと！

美亜 サダ。あんたは、優しくして……。 (胸に頬寄せて)

ずっとうろついていた……。 (胸に頬寄せて)

サダ ああ。

美亜 ねえ、サダ？

サダ ん？

美亜 サダは漁師になりたかった？

サダ そうだな。昔はな……。

美亜 やっぱロックシンガーかなんか？

サダ 高校卒業する時は、それしかなかったな。けど、

美亜 けど？

サダ 美亜。お前な、

美亜 ロックの話は？

サダ いいから。美亜。

美亜 何？

サダ 俺の枕元に何かあると思う？

美亜 枕元？ ヤダ。まだあんたの布団で寝たことないもの。

サダ バカ！ そしたらことでねえってば。

美亜 だって、

サダ あのな。俺の家は砂丘の真ん前に立ってるな。

美亜 あ、そうか。砂丘だ、枕元にあるの。

サダ ああ。砂丘だ。家のすぐ真下は崖になっててな、俺が寝る部屋

美亜の悲鳴。

美亜 バカね。

サダ 美亜。今夜、結婚するぞ。

美亜 ……うん。しよう。

サダ (後方を指して) あそこで。

美亜 あそこって？

サダ 砂丘……。

美亜 砂丘？ だって、

サダ 自衛隊が黙っちゃいないっていうんだろが。

美亜 そうよ。

サダ 俺たちはあの砂丘にでっかいライブハウスを建てるのが夢なんだ。だったら、俺たちの結婚式はあそこしかねえ。

美亜 砂丘か……。

サダ 夜になれば必ず砂丘に霧が出る。

目の前も見えねえような深い霧だ。誰にもわからねえ。

結婚届けも役場から持って来た。ハンコも美亜の分と俺の分、用意してある。

美亜 サダ……。

二人、抱き合う。

美亜、離れて。

二人、抱き合う。

美亜、離れて。

美亜 二人だけで？

サダ ああ、そうだ。他には誰もいらねえ。そうだろ？

美亜 うん。いらねえ、誰も。

サダ 仲人も、披露宴も、新婚旅行も、何もねえ。

美亜 だが、俺たちの結婚式だ。今夜は。

美亜 祭りの夜に、霧の砂丘の上で、二人だけの結婚式……。

の壁一枚向こうはな、砂丘なんだよ……。

本当に枕の向こうには何もねえんだ。ただ砂丘がずうっと向こうまで続いているだけだ。真夜中にひよっと目が覚めるとな、砂が風に飛ばされて行く音が聞こえるんだ。サラサラサラ……ってな。真っ白な砂がミルク色の霧の中に流れて行くんだ。その音を聞いているとな、俺の身体の細胞がどどん砂になって、砂丘の中に消えていくような気がしてくる……。

美亜 怖い……。

サダ ああ、怖くなる……。独りだ……って、思う。

美亜 俺は独りだなあって思うんだ。

美亜 やめて……。

サダ いや。もう少し聞いて。東京でアルバイトやりながら、あっちこっち潜り込んで、なんとかロックやってけなかって思ってた。

三年ばかりそうこうして、小さなライブハウスとか出ることも出来るようになったし、そのまま東京にいれば、何とかやってける気がしてたんだ。ところが、ある晩、アパートで寝たら、真夜中に枕元から変な音が聞こえて来た。サラサラサラ……。

美亜 砂……？

サダ ああ。砂丘の音だ。ガキの頃からずっと聞いていた、あの音だった。その音を思い出してからだ。おかしくなったのは。

美亜 おかしくなった？

サダ ああ。おかしくなった。自分でもよくわからねえ。きつと、砂丘の音を聞いていると、自分が独りきりだなあって……。そう思うことと、なんか関係があるような気がする。俺たちはいつも、泣いたり笑ったり怒ったりしながら、いろんな人間とくっついていたり離れたりに暮らしているが、一步、どっかを越えちまえば、誰もいねえ、たった独りの世界に足を踏み込んでしまうんだ。元々、俺たちの住んでる世界には何もねえんだよ、美亜。家も、畑も、土地も、車も、金も、幼稚園も、学校も、マーケットも……何もねえんだ。

独りで生きてるってことだけなんだ、残っているのは。……気がついたら、東京を出てた。ここに戻って来た。

美亜 で、お父さんと喧嘩した？

サダ ああ。親父のやつ、俺が今みてえな話したら、そういうのを虚無的というんだ、おめえはアナーキーだなんて言いやがった。

美亜 だって、サダのお父さんは原発反対の勉強してるから、いろんなこと知ってるもの。

サダ ま、当たってるような気もするがな。俺もな、言い返してやっただよ。原発反対の旗振り回しても誰も村のやつらにはついでにやこねえ、ついてこねえもんで毎日酒ばかり食らってる親父の方がよっぽどアナーキーじゃねえかってな。

どうせアナーキーになるんなら、原発の補償金がつぼりもらってそれで原爆でも水爆でも造って、国会議事堂に一発ぶち込んでやりやあいい。いくら原発反対の選挙やったって、負けるばかりじゃねえか、そんなら原発賛成の村会議員、県会議員、国会議員は皆殺しにしてやれってよ。

美亜 無理よ。そんなの。

サダ じゃあ、俺たちの砂丘のライブハウスもか？

美亜 それは……

サダ かもな。だが、やるぞ、俺は。親父に宣言したんだ。どうせアナーキーになるなら、とことんやってやる。

美亜 ついて来るか、俺に。

美亜 うん。ついて行く。どこまでも。

サダ 美亜。(再び抱き寄せてキス)

と、精霊たち(樵の森の精、灯松、立石、御不浄の精)が登場する。(つまり、海の上でも雲の上でも、どこでも精霊は歩けるわけ……)

サダ (海に投げようとする)

美亜 何するの！

サダ もう、これを使う者はいねえ。

美亜 だって、そんな大事なものを！

サダ 大事なものだから、海に戻す。

美亜 どうして？

サダ この船の下にはな、爺っちゃんに教えてくれた、根がある。村の者も誰も知らねえ、魚やアロビがすんでる根だ。

美亜 そう……。(覗き込む)

サダ 潜ればわかるが、恐ろしくデッカイ岩がある。海草がユラユラ揺らめいて、その陰だ。俺と爺っちゃんだけが知ってる……。

俺も爺っちゃんの能舞継げなかった。原発造らせてなんねえというのも今じゃ無理なこった……。この面はこの村の者、誰も受け継ぐ資格なくなった。したら、爺っちゃんに返すほかねえ。

な、美亜。そうだべ？

美亜 ……………。

樵の森の精 灯松、立石！ あの能面、あいつが投げたらキャッチするのよ！ いい、一旦海の中に落とさせてからよ！

二人 よし！ (と、サダの正面に回る)

サダ したら、

美亜 でも！

サダ いいんだ。

美亜 待って！

サダ いいって！

美亜 どうしても！？

サダ んだ。

美亜 考え、変わらない？ (止める。灯松と立石、こける)

樵の森の精 誰も見てないと思って。

灯松 やつとるやつとる。

立石 気持ちいいのかの。

御不浄の精 廁の次だな。

と、海を見た美亜が叫ぶ。

美亜 海の中で、何かが動いた！

精霊たち、自分たちのことかとオタオタする。

樵の森の精 バカ！ あたしたちの姿は見えないのよ！

立石 おう、そうじゃったそうじゃった。

サダ (中、覗いて) そりゃ動くべさ。魚がいるんだから。

美亜 違うの！ もっと大きくて、こう、手があって、

サダ 魚に手があるわけなかべさ！

美亜 でもあった！

サダ したら、マグロさ手っこ生えたべか！

美亜 ホント、見たんだから！

サダ 気のせいだ。今頃、そったにでかい魚はこの辺にゃいねえ。波の加減だべ。

美亜 美亜はまだ信じられずに、海の中を覗いている。

その間に、サダは能面を取り出す。

美亜 それ、お爺さんの、

サダ ああ。爺っちゃんが命よりも大事にしていたもんだ。

美亜 そうね。

サダ 変わらないって！ (投げようとする)

美亜 じゃ、あたしに。 (止める。灯松と立石、こける)

サダ どうする？

美亜 あたしが、お爺さんに返すの。孫の嫁が……。

サダ ああ……。へば。

美亜 じゃ、

サダ あ、ちょっと！ (止める。灯松と立石、こける)

灯松と立石 いい加減にせんかい！

サダ いい。さ、

美亜 うん。

美亜が名残り惜しそりに投げ入れる。

灯松が見事キャッチ、して一旦海の中に入れてから、樵の森の精たちの所に持って行く。

間

サダ さ、戻ると。

美亜 サダ！ (抱きつく)

サダ ほれ、船は出せねえじゃ。

美亜 ……。(離れる)

船は見えなくなっていく。

と、浮かび上がって来たのは、水草を頭に乗つけた、潜水服のデメだった。

デメ 今夜、砂丘で、結婚式……。ようし……。

デメはまた潜って行く。

デメが消えたかと思ったら、もう一人、水草を頭に被った潜水服姿の礼菜が、デメの後ろから抱きつく。

デメ アワワ！ だ、誰だ！？

礼菜 デメ！ 好ギだ！

デメ れ、礼菜！ ブクブクブク……。ば、場所、わきましろ！

礼菜 惚れたらそつたらごど！ ブク……。

デメ ワ、あんまり泳ぎ、得意でねんだってば！ ブク……。

礼菜 ワも、そんだ。好ギな人と一緒なら本望だ！ ブク……。

デメ ワは本望でねってば！ 好ギでねんだってば！ ブク……。

礼菜 あの世で好ギにさせでみる！ ブク……。

デメ あの世さ行きたくねえ！ ブク……。

礼菜 したら、ワは好ギになつてけろ！ ブク……。

デメ バガ！ ワはこれから行く所あんだってば！ ブク……。

礼菜 砂丘だべ、美亜ちゃんの結婚式だべ？ ブク……。

デメ どこでもよかべ！ ブク……。

礼菜 好ギだ！ ブク……。

デメ ア、ア、ア！ ヤメテケローッ！

二人、ブクブク……と潜って行った。

精霊たち海の中、覗いて、

御不浄の精 どうなつとんじやい、あの二人は。

樵の森の精 あら、あら、ワカメが絡みついちゃって。

立石 このまま、あの世行きかいな。

精霊たち笑って、

暗転。

(5)

祭りの夜。遠くから囃子の音が聞こえる。霧が深く立ち込めた砂丘の中。様々な精霊たち(女性を多く)の歌と踊り。出来ればワルツのリズムで。

『MISTY』

一、MISTY MISTY すべてが MISTY

MISTY MISTY この世は MISTY

誰もわかっていやしない 誰も信じていやしない

平和なんて 幸せなんて この霧みたいMISTY

聞こえるだろう あの足音が

お前の耳元に 忍び寄る

眠りのメロディ消えないうちに

だから お逃げよ いますぐに

ああ ああ …… MISTAKE

二、MISTY MISTY すべてが MISTY

MISTY MISTY この世は MISTY

誰も見たことありやしない 誰も掴んだことがない

愛なんて 真なんて この霧みたいMISTY

覚えてるだろう あの時を

お前の臉に 焼きついた

地獄の幻消えないうちに

だから お逃げよ いますぐに

ああ ああ …… MISTAKE

(以下二重唱でMISTYとMISTAKEを重ねる)

三郎 みんな、揃ったかい？

立石 何が、揃ったかい、だ。遅れて来やがって。左京は？

左京 (登場し)ここにいます。

樵の森の精 左京さん！ 素敵！

御不浄の精 どうじゃ、この変わり様は。

すっかりヨーカイにトロケテおるわい。

樵の森の精 うる！ さいでしよう。

三郎 左京様。では、さっそく首尾を。

左京 うむ。

灯松 はいはい。その媚薬とやらは？

左京 これだ。(取り出す)

樵の森の精 これが目に塗ると人を好きになるといふ。

立石 樵の森の精。さしずめお前ならば、これを左京の目に塗って自分を真先に見て欲しいんじやろが。

樵の森の精 そうね。試してみようかしら。

ちよつと(薬に手を伸ばす)

三郎 (樵の森の精の手をビシヤリ!) 千年に一度の危機にしか使えないものだから。そうでしょう、左京様。

左京 樵の森の精。あい済まぬ。

樵の森の精 いいえ……。 (目が〇になっている)

御不浄の精 さあ、それをどうするのだ。

左京 これからサダと美亜の二人がやって来る。

次にはデメという若者に、恐らく礼菜という娘も。

そして、美亜の父親もやって来るに違いない。

立石 そいつら全部に塗ってしまうのか？

三郎 違うよ、人の話は最後までちゃんと聞いた方がいいよ。

立石 余計な御世話じゃ。わしは立石に水じゃわい。

樵の森の精 どっか違うんじやない。あれ？

灯松 いいから！ で、

三郎が現れる。

左京 うむ。私の考えはこうだ。この村は原筈とかいうもののために二つに分かれてしまった。今は村の中の対立を取り除き、これからのことを村人皆が力を合わせて考えるようになることだ。そのためには、反対派と賛成派の家同士の間違いを無くすことが最も早道のような気がする。

三郎 そこでです。左京様がお考えになった。

御不浄の精 どうお考えあそばさしたんじや？

三郎 賛成派の親方である大高村会議員の家と、反対派の親方であるサダの家とを親戚にしましょう。

樵の森の精 つまり？

左京 サダと美亜をそのまま結婚させる。

立石 そりゃあ、簡単じゃ。あの二人は今夜結婚するんだから。

左京 いや。美亜の父親が承知しておらん。

灯松 そうか。では、婿業の第一号はあのクソ、

御不浄の精 (灯松をビタッと叩く) 言葉に気をつけろ。

灯松 あの、ク……親父だな。

左京 うむ。そうだ。

父親の目に塗り、サダを気にするように細工するのだ。

樵の森の精 わかったわ。じゃ、

左京 待て。

樵の森の精 ええ。お待ちます。

三郎 それから、

樵の森の精 お前はいい。左京様、それで？

左京 もう一人塗って欲しい。

立石 誰だ？

左京 デメという若者にだ。

灯松 デメ！ どうして？

三郎 礼菜と一緒にさせるためさ。

御不浄の精 プフッ。あの二人をさか？！

左京 では、これを。(婿業を差し出す)

樵の森の精 はい……。

樵の森の精が恥ずかしげに、そっぽ向きながらその手を出す。ところが、灯松が呆気なく左京の手から奪ってしまふ。

左京と三郎は霧の中へ消えて行く。

樵の森の精はそれと知らず、御不浄の精の手を取ってしまふ。

樵の森の精と御不浄の精 オオッ！

一同、霧の中へ消える。

サダと美亜、手を取り合って登場。

サダ もっと向こうへ行こう。

二人は消える。

ガスマスクと自衛隊の制服で身を固め、銃を持った男が登場。マスクを取ると、デメ。

デメ 向こうだな。よし。絶対に結婚させないからな。

デメが消えると、礼菜が。礼菜はウェディングドレス。尻から現れた礼菜と、御不浄の精が尻で鉢合わせ。

二人 オオッ！(デメ退場)

礼菜 デメ！ 好ギだ。ワイドも結婚式挙げるべや！
ワイドだけこれ(ドレス)着ても釣り合わねえして、デメの分も持って来た。(黒いタキシードを取り出す) デメ！(退場)

デメのやつ、礼菜を死ぬほど嫌っておったぞ。

左京 だが、礼菜は一途にデメを好いている。それに、デメが美亜を好きになっていたのでは、サダと美亜、それに父親を加えた和にヒビが入ってしまう。デメと礼菜の家も、賛成派と反対派だ、一緒にさせるうちょうどよい。

御不浄の精 面白い！ よし、引き受けた！

立石 ま、よいか。それでこの村が助かるならな。

灯松 わかった。やろう。

樵の森の精 左京様。わかりました……。やらせていただきます。

この樵の森の精、一命に賭けて。

御不浄の精 ばかもの。精霊には命はないんじや。

樵の森の精 うつつるさいわねえ！

三郎 喧嘩してないで！

立石 ところで、誰が誰に塗るかの？

御不浄の精 わしは、あのクソ、

灯松 (ビタッ！)

御不浄の精 おおっ！

灯松 仕返しじゃわい。

御不浄の精 うっかり、ものも喋れん。

とにかく御不浄を罵った、あのにつつきヤツはわしに任せろ。

こっぴどい目に遇わせてやるわい。灯松、お前、わしと組め。

灯松 まあ、よいか。

樵の森の精 じゃ、デメの方は、あたしと立石ね。

三郎、あんたたちは？

三郎 わたしたちは申しましたとおり、人間とは交わりを持ってないのです。陰ながら応援いたしますから。

樵の森の精 いいのよ。

左京様は、どうぞ朗報を待ってらして下さいませ。

御不浄の精 さ、行くぞ。

立石 なんじやい、あれは。あの黒い服をデメに着せるのか……。ようし……。(退場)

樵の森の精が威一郎と真正面から鉢合わせ。

威一郎 霧にしてはフニャとしていたが……。ま、いいか。

デメ……デメ……どこさ行った。デメ……。 (退場)

灯松と御不浄の精が互いに首を絞めながら、登場。

二人、苦しい！ と悶えながら、

御不浄の精 なんじやい。

灯松 お前か。(二人退場)

ようやく、サダと美亜は思う場所に辿り着いたらしい。

サダ ここまで来れば、誰も来ねえべ。

美亜 うん。

サダ じゃ。(バッグの中から、ウェディングドレス取り出す)

美亜 サダ！

サダ これ着るの夢だったんだべ？

美亜 うん……。ありがとう、サダ！ あの、これ。(礼服出す)

サダ 何だ？

美亜 あまりいいのじゃないけど。

サダ ありがとう。この霧だ。ちよっと離れば、見えねえべ。

着るか？

美亜 うん。じゃ、

サダ じゃ。(ちよっと覗きたがるが、やめとく)

二人、隠れる。
と、デメが登場。

デメ 確か、この辺りさ来たはずだが……。おっ！（隠れる）

サダ。タキシードを着て登場。
後ろから、現れたデメが銃を突きつける。

デメ（声を覚えて）手を挙げろ！

ここをどこだと思っている。立ち入り禁止区域だぞ！

サダ（向き合う）お前は誰だ？

デメ 見ればわかるだろう。自衛隊の者だ。

サダ 自衛隊？ ホントか？

デメ 天下の自衛隊に向かって、ホントかとは何だ！

貴様、それでも日本人か！

サダ 日本人だけでもよ。どうも感じ違うな……。

デメ 違わない！ 自衛隊と言ったら自衛隊だ。

俺は、見回り班だぞ！ 不法進入だ！

自衛隊法によって現行犯逮捕する！

サダ 自衛隊法の第何条何項だ？

デメ そ、それは、ナンジョカイなあ……。

サダ ハハハ。デメ、もういいから。そのマスク、外せ。

デメ 俺は、自衛隊だ！

サダ ははは。いいからいいから。（と気楽にデメに近づく）

デメ それ以上近づくな！

サダ いいって、いいって。

デメ 来るな！

デメは、思わず、銃でサダの頭をいきなり殴る。

礼菜 あや。こつたらどござ。誰だべ？（見て）

やや！ サダでねえか。サダ、サダ、気はサダカダガ？

サダ（気付く。一瞬、わけがわからないが）なんて美しい！

礼菜。透き通るように美しい礼菜、これは自然の魔法だ。

デメのやつはどこだ。あの野郎ただじゃおかねえ。

礼菜 そつたらごと言わねえで、お願い、そんなひどいことは。

構わねえべ、あの人が美亜を好きなのは。

美亜はおめえは好きだ。満足出来るべきさ。

サダ 美亜で満足だと！ 冗談じゃねえ。俺はあいつと過ごした退屈

な時を悔やんでばかりだ。美亜じゃねえ、礼菜だ、俺が好きなのは。

当然だべ、黒いカラスを白い鳩ととりかえるのは。男の欲望はもと

もと理性によって支配されるって父っちゃんか言ってる。それで

おめえの方が立派だって、その理性が喋っちゃ。みなそんな時になっ

てみなければ熟さねえ。俺もそうだった。若かったして理性を持つ

ほど熟してなかったんだべ。ほんでも、今は人間（ふと）としての

分別は持つようになって、ようやく理性が俺の欲望の親方になり、

俺はおめえの目さ導いてくれる。その綺麗った愛の本コさ記された

愛の物語りば俺が読み取れるように。

礼菜 なしてワイがこつたらバガにされねばねえんだ？

サダ バカにするだなんて。

礼菜 いんや。ワイがおめえに侮辱されねばよつたこと、何時したん

だ？ あんまりだ。たしかにワイはデメからはコッタベッコも優し

いままさしコ貰ったことねえ。けん、だからって、おめえにまで

そつたになぶられるわけあるべか？ あんまりだ、おめえときたら

こつた人ば軽蔑した態度でワイばくどくんだから。

いい、ワイは行く。おめえのこと、きつと今の今まで勘違いしてら

った、もつと優しいやつだと思ってる。ああ、なんて悲しい切

ねえオナゴだべ、一人の男さ嫌われて、そのために別の男にこつた

らひんどい目に会わされて！（泣きながら退場）

不意を襲われたサダはまともに一撃を食らって倒れる。

デメ サダ！ おめえがいけねえんだぞ！ 動くなつてのに！

そこに現れた、美亜。

倒れたサダを見て、

美亜 サダ！（と、そこにデメがマスクを外して立っている）

デメ！ あんたね！ サダに何したのよ！

デメ 動くなつていったんだ！ それを！

美亜 卑怯者！ サダ！（サダは頭を抱えて呻いている）

デメ 美亜！ 行くべ。さ、行くべ！（手を引く）

美亜 嫌よ！

だが、デメの力が強く無理やり手を引かれて行く。

サダを呼ぶ美亜の声と、デメの声、霧の中に消えて行く。

サダは二人を追おうとしたが、気を失ってしまう。

現れた立石と樵の森の精。

立石がつまずくと、そこに男。

立石 誰だ、こんなところに寝ているのは。

お、例の黒い服だ。おい、樵の森の精。デメがいた。

デメだ、デメだ、デメキンド。

樵の森の精 ラッキーね。さ、さつそくこの薬を塗って。

立石 はい。（塗る）ようし、これでよしと。

樵の森の精 ほら、ちょうど来たわよ。礼菜が。

立石 これまたラッキー！ それい！（二人、隠れる）

礼菜、登場。礼菜もつまずいて、

サダ 美亜、二度とこき来るなよ、俺の側さ。甘いものだけとりす

ぎると飽きがる、して、胸が悪くなるほど見るのもいやになるべ。

してまた、異端の教えはいずれ人に捨てられる、そして騙されてい

たと知ったやつらに憎まれる。それがおめえだ。俺の飽きが来た異

端だ、みんなに憎まれるがいちばん憎むのは俺だ。

さあ、俺の愛いっべえの心臓よ、全力をふりしぼるべ、礼菜は崇め

奉り、礼菜を守る騎士になるべ！（退場）

威一郎が登場。

威一郎 おかしいなあ。

この辺りさいろって喋っておいたんだがな。デメ！ デメ！

霧の中から、能面を被った御不浄の精が登場する。

威一郎 だ、誰だ！

御不浄の精 威一郎……。この声を忘れたか……。

威一郎 は？ して……。

御不浄の精 このバガタレ。そのバガさ加減だば、ワの声も忘れた

べ……。ほれ、（能舞のひとつを華麗に舞う）

威一郎 そ、その足の運びは？！

御不浄の精 そうだ。威一郎、ワだ。

威一郎 ま、まさか！ そつたらこと！

御不浄の精 これでもか。（面を外す）

威一郎 し、師匠！

御不浄の精 ふふふふ……。あの世から舞い戻った。

この面は返してもらいな……。

威一郎 ゆ、ゆるして下さい！ 師匠！

御不浄の精 いや、ならねえ。おめえ、ワのこと何て喋った？

ベンシヨアダリ、クソアダリ、ババダアダリにフズマリアダリ、クソ蠅アダリにクソミソアダリ……

威一郎 ややや！ そつたらこと！

御不浄の精 やがましい！ この、糞虫野郎！

威一郎 はははい！

御不浄の精 おめえは、ワの言いつけも守らねえどころか、ワと金輪際、縁まで切るってか？

威一郎 と、とんでもない！

御不浄の精 控えおろう！ この額の三日月が目に入らねえか！

これはな、剛でアダッタ時に金隠しさガツチリアダッタ傷だ。

おめえの極悪非道、お天道様が許しても、この三日月が許さねえんだよ！

威一郎 お、おみそれいたしやした！

御不浄の精 改心したか？ 威一郎。へば、

威一郎 許して貰えるべが？！

御不浄の精 マギリ、持って来た。

威一郎 マ、マギリはねえべ！ 爺っちゃ！

御不浄の精 そごさ、直れ。そのこ汚ねえ首、ぶったぎってやる！

おめえのこどだ。赤え血の変わりに、クソでもはみ出すべが。

威一郎 そ、そればかりは！

御不浄の精 御意見、いや、お情け無用！ 切る！

威一郎 アワワワ……（腰が抜けて立てない）

御不浄の精がじりじりと迫り、ついにマギリを振り降ろすと、恐ろしさの余り威一郎が気絶。

灯松 薬、持って来い。

灯松（登場）合点だい。おい、脅かし過ぎじゃねえか。

デメ 美亜！ 頼む！ 俺と一緒に戻るべ！
美亜 いや！

二人が争ううちに、デメが威一郎の体につまずく。

デメ 大高さん……。

美亜 ええ！？

デメ 大高さん！ なした！

美亜 どいて！ 父さん！（抱き起こす）

父さん！ しっかりして！

威一郎（気が付く）道代……。

美亜 道代は母さんでしょが！ しっかりして！

あたしよ！ 美亜よ！ 父さん！

威一郎 道代……。惚れ直したじゃ……。

好ギだ。（美亜を抱きすくめる）

美亜（飛び離れて）何すんのよ！

デメ 大高さん！ あんた、そつたら趣味あったのか！？

威一郎 自分のカカア抱いてどご悪い！ こつちさこ。ほれ。

デメ 美亜ちゃんば、何すんだ！ このスケベ親父！

威一郎 スケベ親父とはなんだ！ このデメキントマ！

デメ キ、キントマ！ いくら許嫁の父親でも、それはねえべさ！

威一郎 やがましい！ あ、それどころでねえ。

（美亜に）さ、砂丘で二人で金婚式は挙げるべ。（ニマニマ）

美亜 気持ち悪い……。

威一郎 ほれ……。こつちさ……。

デメ やめれ！（ボカッと威一郎の頭を殴る）

威一郎 こ、この野郎！ 許嫁の父親は。ただで置かね！

デメ 美亜ちゃん！ 逃げる！（手を取り、二人退場）
威一郎 これ！ 待て！ ワのオナゴはどうする！（退場）

アタツタンじゃねえか？

御不浄の精 これくれえでアタル玉か。

こいだば、心臓の中、一尺も毛生えてらじや。

肥溜さ三日漬けどいでも死なねえべ。

灯松 どうれ、と。（塗る）これでいい。

さてと、ここに、サダが来ればいいわけだが。

御不浄の精（霧の中覗いて）おうおうおう。来た来た来た。白い花嫁衣装なんぞ着て。二人だけの結婚式に花嫁衣装もなかるうが。

灯松 と、すれば、もう一人はサダのやつだ。

これまたいいタイムングじゃ。

二人、消える。
デメと美亜、登場。

デメ なして、おめえは好きな俺さ悪口言うんだ。
そつたら憎まれ口はこ憎らしい敵（かたき）さ向かって言つたらよかべ。

美亜 今は、口だけだ。でももつとひどいことをして当然だ、あんたは呪われても当然のことしたんだから。サダを殺したんだつたら、血の川に一度足をひたしたらもつと深みに飛び込めつて言うから、このあたしも殺して。お前があの人を殺したとしか考えられない。その顔は人殺し、幽霊みたくに恐ろしい顔！

デメ 俺の顔は人殺しにやられた顔だ、おめえの冷てえ目に心臓はざつくと突き刺されたんだ。そいだのに、人殺しのおめえの顔は光り輝いてる、恐山の上の金星（ヴィーナス）みてえに。

美亜 そんなこと、サダと関係ないでしょ！

ね、サダの所に行かせて。ねえ、あの人をあたしに返して！

デメ それぐれえなら、あいつの死体を犬に喰わせてやる。

美亜 何ですって！ 犬！ 野良犬！ 呪ってやる！（暴れる）

礼菜を追いかけてサダが登場。

礼菜 しつこくしねえで！ ワイはおめえは好ギでねえつては！
サダ 好きた！ 礼菜！ おめえなしでは生きられねえ！

礼菜 人はコケにするのもいい加減にしろ！

サダ なして、俺がおめえを！ 世界で一番愛してる！

礼菜 ワーッ！ 好かれるのつてこつたにつれえもんだべか！
（泣き出して、去る）

サダ とうとうわかつてくれたね、礼菜！（追う）

礼菜 わがらねえ！（と、だけ聞こえる）

今度はデメが美亜の手を引き逃げて来る。

デメ こ、こつちだ！
美亜 手、放して！

デメ そつたらご言ってる場合でねえべ！
親父さてごめにされると！ さ、（手を引く）

美亜 イヤ！（連れ去られ、二人消える）

威一郎、登場。

威一郎 道代！ 待ってけ！ 金婚式……。（退場）

御不浄の精、現れて、頭を抱える。

御不浄の精 あれ？（退場）

礼菜を追いかけて、サダが現れる。（退場）
樵の森の精、現れて、頭を抱える。

樫の森の精 あれ？(退場)

美亜とデメを追いかけて、威一郎が現れる。
立石と灯松、現れて、頭を抱える。

二人 あれ？(退場)

美亜と礼菜が鉢合わせ。

礼菜 あ、美亜ちゃ！

美亜 どうしたの、そのドレス！

礼菜 どしたもこしたもねえ、サダがわばバガにする！

美亜 サダは生きてるのね！

礼菜 生きてる生きてるピンピンじゃ！ わば好ギだつてへる！

美亜 あんた、サダを誘惑したのね！？

礼菜 わ、わが誘惑？！

美亜 そうでしょ！ でなきゃ！

礼菜 あんまりだ、美亜ちゃ！

サダが登場。

サダ 礼菜！ 好ギだ！ 二人だけで結婚式挙げるべ！

礼菜 はれみろ！

美亜 サダ！ あんたあたしを裏切ったのね！

サダ おめえはもう飽きた。

礼菜 あいや、こいだば二人ともぐるでわばからかつてるのか！

美亜 何言つてるの！

礼菜 したつてそうだべ。みんなでぐるになつて芝居してらんたべ。
祭りの夜にお楽しみしてらんたべ！

美亜 どうやって、この人(サダ)の気持ちを引きいたの！ 礼菜！

サダ サダの愛だ、サダをおめえ(美亜)の側から離れさせたのは。

美しい礼菜が俺を引き寄せるんだ、金と銀の星が空を飾るよりもつと綺麗にする礼菜か。

礼菜 ああ、またバガにする！

美亜 今度はあたしをバカにするのね！

礼菜 ああ！ わがらなくなつてきた！

サダ 礼菜！

美亜 サダ！(泣きわめく)

デメが登場。

デメ 美亜、逃げろ！ 父っちゃ、狂つた！

美亜 狂つたのはサダよ！ みんなあんた(デメ)のせいじゃないの！

サダ サダはあんたに殴られて気が狂つたのよ！

サダ いや、俺は狂つたんじゃない！

礼菜への本当の愛に目覚めたんだ！ 好ギだ、礼菜。

デメ 何喋つてらんた、こりあ？

礼菜 好ギだ、デメ！

美亜 あんたが好きなのはサダでしょ！

デメ いや、礼菜が好きなのは俺だ。

サダ いや。礼菜は俺が好きなんだ。

美亜 あたしはどうするの！？

デメ 俺の許嫁だ！

美亜 もう！

威一郎が現れて。

威一郎 わしのカカアばどこさいた？

左京 一度塗ってしまった者には、これ(別の印ろう)を塗るのだ。

さすれば何事もなかったように正気になる。そしてまだの者には計画通りに塗り直すのだ。いいか、今度こそ過ちは許されぬぞ。

三郎 わかつたか？！

四人 (真剣に)はい。

左京 三郎。そなたは声音を用いて、あの者共をとことん砂丘に迷わせるのだ。そしてもう歩けぬほどにせよ。そして、深い眠りにつかせるのだ。その時こそ、いいな精霊たち！

四人 はい！

一同、消える。

礼菜、登場。

追つて、サダ登場。

以下、三郎が少しだけ顔を出して、

① 陰から礼菜の声で、『こつちよサダ』と。

引かれて行くサダ。

美亜とデメ、登場。

追つて、威一郎登場。

② 陰から美亜の声で、『こつちよあなた』と。
引かれて行く威一郎。

礼菜、登場。

③ 陰からデメの声で『礼菜、礼菜、どこだ？』と。
礼菜、喜び勇んでそつちへ。

美亜、登場。

あ、いた！(美亜に抱きつく)

礼菜 また狂つたのが出た！(泣きながら退場)

サダ 待て、礼菜！

美亜 サダ！(退場)

デメ そつちじゃねえ！ 美亜！(退場)

威一郎 道代！ どこさ行く！(退場)

四人の精霊たち、一緒に現れて、頭抱える。
媚薬を見つめて、『確か……こう……塗つて……』

四人 大変だァ！

四人、パニックになる。

いやはや責任をなすりつけるやらでもう大変。
そこに左京と三郎が登場。

三郎 どうも様子がおかしいと思つたら、
左京 媚薬を塗り損ねたな……。

三郎 左京様。こりゃ、つけ間違いですよ！

おい、みんな！ もめてないで！

御不浄の精 いや、わしはちゃんと威一郎のやつをマギリで、

立石 わしこそ黒い服の、

灯松 ちゃんとこう塗つて……

樫の森の精 こうやって……ね。

三郎 早い話が、つけ間違つた。そうだろ！？

一同、シュン。

三郎 仕方がねえなあ。左京様、如何いたします？

④ 陰からサダの声で『美亜、どこへ行った?』と。
美亜、喜び勇んでそっちへ。

デメ、登場。

⑤ 陰から美亜の声で『デメ、デメ、どこにいるの?』と。
デメも勇んで、そちらへ。

以上、①⑤までの声が響き合い、乱れ合い、礼菜、サダ、美亜、
デメ、威一郎が砂丘をうろつき回る。
そしてついに、一同は同じ所に集められ、精霊(四人以外の女の
精霊)たちに導かれ、次々と疲れ果てて眠りにつく。
精霊たちは、礼菜の隣にデメを、サダの隣に威一郎を眠らせる。
大勢の精霊たちの踊りと歌。

『もう遅すぎる!』

(J・ムスタキ 歌詞は北野次)

一、眠りの中で
時計の針は回る
子供の頃は
時は巡り

夢の中で
もう遅すぎる
あんなに遠い
戻ってこない

二、誰かを愛して
愛は消え去った
死ぬほどさみしくて
時は巡り

抱きしめていると
もう遅すぎる
一人ぼっち
戻ってこない

三、歌ってる間に

自由が消える

美亜 ……じゃ、あたし、サダと結婚してもいいの?

威一郎 当たり前だべ。わしはコイバ好きだもの。

サダ さっぱりわけがわからねえ。

美亜 父さん! ありがとう! (抱きつく)

デメが目を覚ます。礼菜を見る。

デメ 礼菜って。ウェディングドレス似合うな……。礼菜。

礼菜 (目覚める)ん?

デメ 礼菜。結婚するべ?

サダと美亜ちゃんが結婚する日に一緒に。

礼菜 ホントか?! デメ! 嘘でねえべ!

デメ 嘘でねえ!

何だか、とっても大切なもの、見つけたよった気がする。

礼菜 デメ!(抱きつく)

デメ 今までのことが小さくおぼろになっていくようだ。

美亜 いままでのが別々の目にうつるようだわ。

礼菜 ワイもそんだ。だって、デメが拾い物の宝石みてえに、ワイの
ものであるよったねえよった気がして。

サダ 確かに俺たちは起きているんだらうか?

俺にはまだ、眠って夢を見ているような気がするが。

威一郎 いいや。夢ではねえ。みんなこうしてここにいるんだから。

ほれ、ここに、師匠の面もある。

美亜 それ……。海に捨てた筈なのに。

威一郎 取り敢えず、神社さ奉納すべ。あとのことはこれからだ。
な、みんな。さ、夜が明ける。行くべ。

一同は歩き始める。

威一郎たちの声が聞こえる。

誰かが奪った
聞いたも過ぎて
時は巡り

もう遅すぎる
何も知らない
戻ってこない

四、それでもあなたは
それでもあなたは
声を合わせて
子供の頃は
子供の頃は

(自前の歌と差し替えても可)

その間に、四人の精霊たちが左京の指図通りにする。
霧が少し、薄くなる。

真夜中から少し、朝方に近づいたかもしれない。
精霊の一人(花の精)が花弁から威一郎の額に露をひと雫垂らす。
(精霊たち退場)

威一郎 (目覚める)なした? サダ……。おい。(起こす)

サダ 美亜はどうした!

威一郎 結婚式さ、なしてわしは呼ばなかった。

サダ は?

威一郎 親ば抜きで結婚式すればわがねぞ。

サダ まだしてねえ。

威一郎 そうか。したら、わしも美亜の花嫁衣装は見られるのか。

美亜。おう、こんなとこにいた。美亜。(起こす)

美亜 あたし母さんじゃないわよ!

威一郎 なに、バガなこと喋って。

美亜。サダとまだ結婚式やってねえんだってな。よかった。

今度やる時は、わしもカカアもちゃんと呼べよ。

『……したども、ロックハウスの話は承知したわけではねえか
ら……』

『いや、あれは……』

『父さん……』

左京、三郎、登場。

三郎 左京様。これでよかったですでしょうか?

それに、あの能面……。

左京 託してみたくなったのだ。あの者共に。

いや、変わらぬかも知れぬが……。

三郎 どうも、心配だなあ……。

左京 よい。さ。精霊たち出て参れ!

精霊たち、登場。踊る。

左京 精霊たちよ、夜明けまで踊れ、砂丘のすみずみまで。

我等は二組の夫婦に授けよう、祝福を。そこで生まれる子供らに、
永遠の愛情あるように。その子供らの体に、生来の傷がないように。
生まれながらに、世の人の不吉ときらう傷痕に、悩まされることの
ないように。精霊たちよ、それぞれに清らかな野の露を手に、村の
家という家を訪れ、注げ、祝福を。そこに眠れる人々を訪れ、注げ、
安らぎを。さあ行け。すばやく跳んでいけ、夜明けになるまですま
せておけ。

BGM高まって、左京、精霊たち退場。

三郎 われら役者は影法師、皆様がたのお目がもし、お気に召さずば
ただ夢を、見たと思ってお許しを。つたない芝居であります、夢

にすぎないものですが、皆様がたが大目に見、おとがめなくば身のはげみ。私三郎めは正直者、さいわいにして皆様の、お叱りなくば私も、はげみますゆえ、皆様も見ていてやってくださいまし。この村、この国、この世界、あの人、この人、やがて生まれる子供たち、いつかよい故郷を作るでありますよう。それでは、おやすみなさいまし。皆様、お手を願います。三郎がお礼を申します。

—幕—

△劇団支木上演作品▽

※作中、シェイクスピア作『夏の夜の夢』（白水社文庫・小田島雄志訳）より、一部削除、加筆、また青森弁に変更して引用しました。

※捜入歌は、ジョルジュ・ムスタキの『もう遅すぎる』以外は創作する必要があります。『もう遅すぎる』は、レコード盤 THE BEST OF J. GEORGES MOUSTAKI (ポリドール)の邦訳から、作者が再構成したものです。



事務局長の目

全リ演議長団会議が一月二十七、二十八の両日、大阪市でひらかれましたので、その内容を報告します。

神戸での開催を断念
全日本演劇フェスティバル

神戸で開催予定の全日本演劇フェスティバルは、阪神大震災のため一年延期し、来年の夏にひらくことで劇団四紀会を中心に可能性を探ってきました。しかし、地震の後遺症は重く、会場や宿泊施設、自治体からの助成などで開催は困難と判断し、神戸での開催を断念しました。代わりに大阪府（吹田市、岸和田市、豊中市、八尾市など）又は劇団あしづえのある島根県などが候補地としてあがり、これから可能性をさぐっていくことにしました。

また、上演本数が六、七本では多すぎて交流の時間が少ないとの声が多いことから、今回は内容の面でも改善していくことにし、今年八月までに企画案をまとめることにしました。

近年、NADA（日本アマチュア演劇連盟）と共催して

正 誤 表 (↓印下が正です) 八九号

8頁・下段12行目	……時間・空間が意図の↓時間・空間が意図の
9頁・下段18行目	……それらの芸術意識の↓それらの芸術意識の
16頁・下段18行目	……「演劇は象徴的」↓「演劇は象徴的」
19頁・上段19行目	……鈴木三郎議長のことばに……↓山崎三郎議長のことばに……
21頁・囲み文章(下段)	山静・伊藤三郎(静芸) ↓山静・山崎三郎(静芸)
49頁・囲み文章(劇的とは)	上段18行目 ……として展開して…… ↓として展開して……
	下段3行目 ……考えられます。 ↓……考えられます。
95頁・上段16行目	……鉄砲水で山崩れ、…… ↓鉄砲水で山崩れて、
95頁・上行末行から下段の一行目の間に欠落	山も田んぼも畑も見たくもね、陸嫌えて、あの船の乗り子になっ(以下欠落部分) ↓て、海ごとはるばるわたってきたのせ。くる日もくる日も、どっ(下段に続く)ち向いても……
98頁・上段17行目	……言うだけえが…… ↓……言うだけえが……
104頁・上段24行目	……言うだけえが…… ↓……言うだけえが……
108頁・下段3行目	早川昭二(劇団銅) ↓早川昭二(劇団銅)



いることからNADAとも交流を深めていきたいと思えます。

「演劇会議」をもっといいものに

機関誌「演劇会議」の件では、紙面の刷新で親しみやすくなったものの、もっと特集記事に力を入れてほしいとの要望が出ました。

例えば、スタッフの力をどうやって蓄えていくか、地元発信が叫ばれている中で地域で信頼される劇団になるためにはどうすればよいか、若者たちが集まってくるような集団にするためには……などをとりあげて欲しいという要望です。

会計面では、誌代の値上げと全リ演会計からの助成でなんとかが発行できていくもの、いくつかの集団と個人の滞納で困っており、これは事務局から催促してでも回収することになりました。

加盟劇団をふやすために

全リ演が力をつけていくためには、加盟劇団をもっとふ

全日本リアリズム演劇会議住所録

東 会 議

B	劇 団 名	住 所	電 話
北海道	劇 団 さ っ ぽ ろ	063 札幌市西区宮の沢3条4丁目14-8	011-663-6251
	劇 団 新 劇 場	065 札幌市東区伏古11条2-396-47	011-784-9908
奥羽ブロック	劇 団 弘 演	036 青森県弘前市品川町1 ブラジル内	0172-35-4670
	劇 団 支 木	030 青森市長島町4丁目21-3	0177-77-4677
	黒石演劇研究会	036-03 青森県黒石市乙徳兵衛町51 加賀谷方	0172-52-4097
	劇 団 東 風(やませ)	031 青森県八戸市大字飯町字下松苗場14-183 榎谷方	0178-33-1913
	劇 団 未 来 半 島	035 青森県むつ市緑町26-2 丸丸二物産内 仁木方	0175-24-1189
東北ブロック	劇 団 山 形	990 山形市東青田町5丁目8-5	0236-32-4105
	劇 団 だ い こ ん 座	997 山形県鶴岡市青柳町42-32 たんぼぼ保育園内	0235-24-1688
	仙 台 小 劇 場	980 仙台市青葉区五橋1丁目5-13 平和友好会館2F	0222-64-2340
関	劇 団 群 馬 中 芸	371-01 群馬県勢多郡富士見村大字赤城山大河原 626-498 未来スタジオ	0272-88-2700
	劇 団 埼 芸	362 埼玉県上尾市日の出町4-508-1	048-777-4430
	劇 団 久 喜 座	346 埼玉県久喜市中央1-3-13 江原方	0480-21-0664
	劇 団 アポストロフィー	359 埼玉県所沢市山口403-2 平石方	0429-28-5374
東	青 年 劇 場	160 東京都新宿区新宿2-9-20 問川ビル6F	03-3352-6922
	劇 団 銅 鐘	175 東京都板橋区成増5-1-2 米丸ビル	03-5997-9461
ブ	東 京 芸 術 座	177 東京都練馬区下石神井4-19-11	03-3997-4341
	劇 団 展 望	166 東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-3-32	03-3393-2739
	世 仁 下 乃 一 座	168 東京都杉並区方南町2-24-5 第二広栄ビル501	03-3316-9496
ロ	演 劇 集 団 石 る つ	135 東京都江東区森下5-11-8 荒川ビル 吉川複写工業内	03-5600-0270
	演 劇 集 団 土 くれ	105 東京都港区虎ノ門1-12-1 第一法規ビル 福田事務所内	03-3508-0104
ッ	劇 団 阿 修 羅	157 東京都世田区南烏山2-33-15 川崎方	03-3309-8633
	京 浜 協 同 劇 団	211 神奈川県川崎市幸区古市場2-109	044-511-4951
	劇 団 蒼 生 樹	220 神奈川県横浜市西区伊勢町3-133-824 濱田方	045-242-3584
ク	三 浦 半 島 劇 団 海	230-01 神奈川県三浦市南下浦町菊名56	0468-88-3142

国際交流について

昨年保留となっていた韓国との演劇交流について再び話

萩坂桃彦前編集長の一周忌(三月三日)を前に、全リ演としてどうかを検討しました。一周忌の行事そのものはご遺族や川崎文化会議などの現地の人たちに委せるとして、全リ演としては追悼文集を出すことにしました。それも、ただ追悼文をいっばい集めて載せるだけではつまらないので、萩坂さんの業績が分かるようにテーマを決めてそれにふさわしい人に書いてもらうとか、みんなが知らない側面とか、萩坂さん自身の文章や評論などを中心にしてまとめることにしました。担当は京浜協同劇団。

萩坂前編集長の追悼文集

やしていく必要があります。東会議では「加盟のしおり」を作成してとりくんだ結果、この三年間で六集団がふえました。意識的にとりくめば加盟してくれる集団はまだまだあります。東西合同で新しく「加盟のしおり」を作成して加盟集団をふやしていくことにしました。

し合いました。昨秋、劇団すがお(三重)、劇団たけぶえ(福井)が韓国の「劇団馬山」を招き「春香伝」の公演を行いました。今年秋に韓国で行われる演劇祭に出演劇団を募るとともに観劇ツアーを組もうという提案がありました。話し合った結果、国際交流は時代の流れでもあり、外国の文化に触れることは大いに刺激を受ける、特に若い人たちは魅力ある企画であり、実現に向けて準備をしていくことになりました。劇団すがおを中心に企画を練っていきます。

そのほか、今年十月十日から十三日まで釧路市で行われる北海道演劇フェスティバルに代表を送ることなどを決めました。



劇 団 名	住 所	電 話
川崎演劇塾	214 川崎市多摩区寺尾台2-8-1 小川雅功方	044-951-9819
劇団津演	514 三重県津市大門31-28 仏教会館内 岸武雄方	0592-26-1089
演劇研究所	420 静岡県秋山町2-1715	054-271-0177
劇団はにわ	462 名古屋市東区矢田町3-9アーバンドリーム矢田401 下高原方	

西 会 議

劇 団 名	住 所	電 話
劇団京芸	612 京都市伏見区納所北城堀31-18	075-631-2609
人間座	606 京都市左京区下鴨東高木町11	075-721-4763
人形劇団京芸	611 宇治市白川鍋倉山35-20	0774-21-4080
関西芸術座	557 大阪市西成区岸里東2-10-2	06-661-2112
劇団潮流	557 大阪市西成区松1丁目6-17 橘モータープール内	06-658-2315
劇団未来	536 大阪市城東区成育1-4-25	06-939-5777
劇団きづがわ	551 大阪市大正区泉尾4-2-7	06-553-7991
劇団大阪	542 大阪市中央区谷町7-1-39-103	06-768-9957
劇団コロロ	546 大阪市東住吉区公園南矢田2-4-7	06-695-6401
人形劇団クラルテ	559 大阪市住之江区南加賀屋町3-1-7	06-685-5601
劇団息吹	578 東大阪市中野244-14	0729-64-4441
演劇集団わたち	533 大阪市福島区福島6-12-17 川村ビル4F	06-458-1455
大阪府職劇研	540 大阪市東区大手前元町 大阪府職労第2書記局内	06-941-0351
演劇集団和歌山	641 和歌山市和歌浦南1-1-14	0734-45-4537
劇団四紀会	650 神戸市中央区元町通2丁目9-1-612	078-392-2421
劇団どろ	652 神戸市兵庫区大開通7-4-7 谷垣ビル4F	078-576-6488
神戸職演連	650 神戸市中央区下山手通9-9-7 西藤ビル2F	078-351-6969
劇団市民劇場やぎ	664 伊丹市大鹿5丁目67 貫名俊行方	0727-82-2573
劇団かすがい	660 尼崎市昭和通1-17-1 石和久ビル3F	06-492-1289
劇団月曜会	730 広島市中区榎町4-27 岩井方	082-234-9656
劇団若者座	755 宇部市松山町4-10-24 東洋針灸科内(天羽方)	0836-21-7468
演劇サークル・トラム	753 山口市大字吉敷2025	0839-20-2835
劇団演劇街	753 山口市中国街1-3 やの舞台美術内	0839-24-0075
劇団あしぶえ	690-21 島根県八束郡八雲村平原481-1	0852-54-2400
劇団こじか座	790 松山市木屋町4丁目35-1 酒井方	0899-24-3415
福岡現代劇場	810 福岡市中央区薬院1-6-5-410	092-751-7982

B	劇 団 名	住 所	電 話
山 ブ ロ ッ ク 静	劇団やまなみ	400 山梨県甲府市青沼1-8-5 梅津方	0552-33-9556
	劇団静芸	420 静岡県昭府町1丁目10-27	054-273-0604
	劇団からっかぜ	431-02 静岡県浜松市篠原町21505	0534-49-0937
	劇団火の鳥	421-21 静岡県安倍口団地5-38-308 泉地守方	054-296-1297
中 部 ブ ロ ッ ク	岡崎演劇集団	444 愛知県岡崎市元欠町3-10-3 浅井方	0564-21-2614
	劇団名芸	468 名古屋市天白区平針1丁目1808	052-803-2922
	劇団名古屋演集	451 名古屋市西区庄内通4-16-3	052-524-5975
	劇団名古屋	456 名古屋市熱田区新尾頭町2-2-19	052-682-6014
	上野市民劇場	518 三重県上野市丸の内 共同ビル3F	0595-23-5252
	劇団すがお	511 三重県桑名市森忠睦美丘1058	0594-31-4210
ク	劇団夜明け	508 岐阜県中津川市北野丸山	0573-65-4937
	劇団はぐるま	500 岐阜市西野町1丁目	0582-65-1852

個人加盟

氏 名	住 所	電 話
桜井裕子	921 石川県金沢市山科3丁目6-10 早川方	0762-44-2802
大橋喜一	210 神奈川県川崎市幸区小向仲野町3-2-406	044-533-3779
岡田和義	176 東京都練馬区羽沢2-12-8	03-3991-1723
こうじ谷一朗	924 石川県松任市若宮町2-4	0762-75-2755
大原穰子	215 神奈川県川崎市麻生区万福寺2-14-5	044-966-8125
川島柳一	270 千葉県松戸市金ヶ作57-57	0473-84-6207

友好劇団

劇 団 名	住 所	電 話
アートステージくしろ	085 釧路市貝塚1-6-19 加藤たけはる方	0154-42-8009
劇団新芸	047-02 小樽市銭函町3-23-162 鹿角優一方	0134-62-3254
劇団河童	090 北見市幸町8-3-4 扇谷国男方	0157-24-3357
劇団湖(うみ)	068-21 三笠市本郷町578-9 加藤元方	01267-2-3044
釧路演集	085 釧路市寿2-5-1 中山知征方	0154-23-6551
劇団ベルソナ	062 札幌市豊平区平岸4条12-8-4 秋元博行方	011-811-9036
函館創芸	040 函館市川原町2-5 長谷川潔方	0138-53-7520
劇団海鳴り	094 紋別市潮見町2-3-40 我孫子正好方	01582-3-3238
演劇集団未踏	121 東京都足立区梅島1-9-1	03-3880-0034
演劇サークル麦の会	133 東京都江戸川区北小岩7-3-20	03-3659-8704

編集後記

●多幕物の戯曲を掲載することができ、今号で実証した。行数や字数を増やし、従来より三百字余増え、実質六ページ増ということになる。さらに、二段組みで読みやすくなっていると思うのであります。

●次号に向けて早々に、戯曲が寄せられています。掲載されるか否かの判断は編集部におまかせ願ひ、が、しかし「これは！」と思われる作品は是非、どんどん寄せてください。

●「今日のリアリズム」をシリーズ化したい。各劇団の具体的な活動から掘り起こした報告がある。面白くはないだろうか。作家、あるいは演出の立場から、作品とスタッフの関係から、また演技の側面から、あらゆるジャンルから報告、意見が出されるといいのではないか。

●各地域での動きや情報をもっと寄せてほしい。これについては編集委員だけでは無理である。各ブロックで『演劇会議』通信員を確立し、情報を中心していくことにある。地域での行政指導型で中央視座型の演劇祭など、報告していただきたい。

●岩手ぶどう座の川村光夫氏に感謝いたします。多忙のなか、原稿を寄せていただきありがとうございます。●スタッフの仕事や若者の声など、企画されなかった。議長団会議等でも、かなりの要望があったにもかかわらず。次号にはなんとか企画したい。ブロックなどで、若

者座談会が組まれるとよいのだが。

●故萩坂元編集長から引き継いで五号目になる。当初、新しい企画、編集等で新鮮さが感じられたという感想や意見が多く寄せられた。しかし最近では、読者の短信などが少なくなった。ハガキでもいいから、ぜひ寄せてほしい、誌面で紹介したい。

●ある読者が『演劇会議』を全部読むことはまずない、劇団通信は読むが、あとは関心のあるものしか目がないという話を話してくれた。まだまだ、面白くないというのだ。我々編集部も、面白くするために頭を痛めているのだが……。

●面白いが、面白くないかは、かなり個人差がある。もっと多面的な企画が必要なのだろう。そのためには読者のみなさんが編集部に要望・意見をどんどん寄せ、編集部に知恵とアイデアを与えてください！

●『演劇会議』が機関誌として認識されていくには時間がかかるであろう（もちろん認識している人はいるであろうが）、個々の人の力で、もっとよいものにするのだという認識を！

(文責 境野)



演劇会議 第90号 1996年4月7日発行

定価 700円(送料240円)

編集委員 早川昭二 境野修次 石垣政裕 栗原省 赤松比洋子 楠本幸男

発行所 演劇会議発行所

〒135 東京都江東区森下5-11-8 荒川ビル 吉川複写工業㈱内(境野修次)

電話 03(5600)0270 FAX 03(5600)0271

劇団名	住所	電話
劇団生活舞台	815 福岡市南区長丘2丁目15-4-401 平原義行方	092-922-9737
劇団道化	818-01 福岡県太宰府市大字太宰府2629-10	092-271-5090
テアトル・ハカタ	812 福岡市博多区上川端10-15-901 ローズマンジョン9F	06-488-9215
劇団蝶線館	660 兵庫県尼崎市杭瀬北新町3-47 尾尻コーポ4F	08669-2-4325
岡山職場演劇集団	719-11 岡山県総社市富原480-3 岩城方	0886-23-5670
劇団阿波っ子	771 徳島市佐古三番町8-17 船越智子方	

友好集団

劇団しゅう	560 豊中市蛍池東町1-13-11-302 又川邦義方	092-271-5090
サークル瞬	602 京都市上京区仁和寺街道千本東入西陣文化センター	075-431-3169
演劇集団あり	683 鳥取県米子市昭和町23-2 宮倉方	0859-33-9302

議長団	所属団体	住所	電話
こばやしひろし	劇団はぐるま	501-01 岐阜市寺田852 円成寺	0582-51-0490
後藤陽吉	青年劇場	184 小金井市貫井南町5-12-13	0423-81-1590
中沢研郎	京浜協同劇団	211 川崎市幸区古市場2-109	044-555-4066
中野健	劇団支木	030 青森市長島4-21-3 劇団支木内	0177-77-4677
仲武司	関西芸術座	606 京都市左京区上高野上荒蒔町1-1	075-701-2570
藤沢薫	劇団京芸	615 京都市西京区榎原内垣外町25-1 A 403	075-391-5039
梶武史	劇団四紀会	673 兵庫県明石市東野町1-5-1009	078-911-1513
猿渡公一	福岡現代劇場	814 福岡市早良区有田2-10-4	092-831-1696

事務局

城谷護子	京浜協同劇団	211 川崎市幸区東古市場9-21 事務局長	044-544-3737
浅野真理	劇団はぐるま	500 岐阜市西野町1-11 劇団はぐるま内	0582-65-1852
加納美千子	劇団大阪	542 大阪市中央区谷町7-1-39-103 (西会議事務局長)	06-768-9957

編集委員

早川昭二	劇団銅鑼	168 杉並区和泉1-9-12-201 編集長	03-3323-8943
境野修次	劇団石るつ	134 江戸川区西葛西3-15-8-701	03-3804-0507
石垣政裕	仙台小劇場	983 仙台市太白区西中田5-23-1	022-264-2340
栗原省	劇団いこら	643 和歌山県有田郡吉備町庄684-32	0737-52-5963
赤松比洋子	劇団きづがわ	585 吹田市竹谷町36-2 古川方	06-388-7513
楠本幸男	演集和歌山	640 和歌山市加納271-14	0734-73-7589